四五輩殿上人參休廬、有饗、攝政以余被聞左府公、今日宣命事可被行者、卽申事由、（公卿座在昭慶門東廊、）左府以內記令覽宣命、（以頭藏人可被覽歟云々、）申刻許、齋王西河禊了、入自藻壁門、被參八省、先於嘉喜門外、以裝束司左中辨（藤原）在國、令奏參入由、天皇欲御大極殿、先供御手水、了御大極殿、（自小安殿至大極殿御座、敷筵道如例、）藏人賣候式御筥、御笏、額櫛、（黃楊木額櫛、納蒔繪筥、有錦縫立、櫛納筥、筥櫛、小手巾筥、仰作物所令奉仕、）裹紙欲御々座召御笏、余傳取奉之、（攝政進候御座北頭敷兩面端疊、）御々座之後、中臣取御麻、（敷度令催歟、）昇自東廊、經殿東壇上、候北面東一戶外、內侍取奉之、卽返給中臣、天皇端笏拜給御幣、（兩段再拜、）次令藏人右少辨扶（聽）義仰齋王可參之由、入自嘉喜門、御輿昇從殿北面東一石階、留同一戶許、（齋宮御著座、）童女六人下馬參入、指行障隱齋王、闈司二人開扉、（先是闈司著東扉內、御屏風外、左右座、開扉後可著歟、）齋王下輿、著座、（西方、）時、闈司閉扉、復座、以行障指東西南三方、蓋隱齋王也、（乳母抱齋王、）天皇喚舍人二聲、舍人於東廊稱唯、少納言參跪就版位、（當殿東第二間壇下、有版位二、就前版、）勅召中臣忌部、稱唯、於昭訓門外召之、中臣忌部後取等參候就版、勅忌部參來、稱唯、昇自石階、脫履膝行、拍手取御幣、出授後取、又參、拍手取御幣、復本所、勅中臣參來、稱唯、昇自同階、參上跪候、（在南庇柱下、其程極遠、可進歟、）勅曰云々、如例、中臣稱唯退下、了余取櫛筥、授內侍、內侍取筥置御座左方、次內侍奉勅參齋王許、傳示可參之由、齋王進候御前、（顏依

齋宮御禊
八省院ニ參ラル
大極殿ニ出御
齋宮御著座
中臣ニ勅ヲ給フ

遲參、余急催申、乳母抱之、此間及黃昏、天皇以櫛刺齋王額、（勅曰、京方ヱ給フナ、）了乳母抱之歸參、內侍取櫛筥授宮女、（余申攝政云、奉抱齋王之乳母、向輿之間、不顧、又此櫛到勢多頓宮收納者也、攝政以此趣、被仰乳母云々、）輿候東面戶許、闈司開殿東戶、齋王起座、（乳母抱之、）向輿之間、座上落袴、余取之、授在國朝臣、令傳乳母、了天皇還御小安殿、（此間乘燭、）齋王乘輿之後、良久不出、是駕輿丁等不具云々、戌二刻許、出從昭訓門、去一許町之間、進御輿、還御本宮、（右大將以前駈役、扈從行幸、）於南殿、公卿通籍、（左中將清正問之、）余候宿、長奉送使權中納言道兼、十月一日、長奉送使權中納言道兼、行事辨惟（平）仲、參射場殿、令奏齋王平安著給之由、余傳奏、卽被仰聞食之由、

○群行ニ依リテ、齋月ヲ定ムルコト、本月三日ノ條ニ見ユ、

櫛ヲ齋宮ノ額ニ加ヘ給フ
長奉送使
齋宮御安著
齋宮御起座
還御

二十八日、（壬子、）僧綱ヲ任ズ、

〔僧綱補任〕（三○興福寺本）　權律師安眞　九月廿八日任、天台宗、依崇福寺造功、□

崇福寺造功

十月大盡 甲寅朔

三日、丙辰、直物、小除目、

〔公卿補任〕六 正暦三年 参議正四位下平惟仲、四十九、十月四日（永延二年）兼近江權介、受領、止藏人大學頭、親信辭替、

〔公卿補任〕六 正暦六年 参議從四位下源俊賢 十月日（永延二年）補藏人、惟仲近江守（介カ）替、

〔公卿補任〕六 長保三年 非参議從三位平親信、五十七、寛和元九十四近江權介、略○中 永延二十四辭、

〔職事補任〕一條院五位藏人 右少辨從五位上源俊賢（實） 永延二十（衍カ）十五補、

右中辨正五位下平惟仲 同（永延二）十二五（衍カ）任近江守（介カ）、藤原清正例、

〔小右記〕十月三日、丙辰、今日直物、又有小除目、（說アラン）近江介右中辨惟仲、親信辭云々、大學頭菅原爲紀、鎭守將軍藤文條、選歟、件文條攝政御賀料、皇太后宮被納任料云々、馬允內舍人云々、

五日、戊午、○中略 惟仲藏人替、以右少辨俊賢爲藏人、余奉之、

〔類聚符宣抄〕八 任符事 太政官符 陸奥國司幷鎭守府內印、

藤原文條ヲ鎭守將軍ニ任ズ

文條ノ任符

從五位下藤原朝臣文條

右今月三日任彼府將軍畢、國府承知、至卽任用、符到奉行、

左中辨（在國）

永延二年十月五日

賴忠ニ扈從ノ人々

藏人頭ノ昇敍ハ、上日ニ依ラシム、是日、太政大臣賴忠、觀音院ニ詣ヅ、

〔小右記〕十月三日、丙辰、○中略 早朝參太相府、直衣烏帽、密々參給觀音院、修理大夫（藤原懷平）、內藏頭、權中將、余、皆著狩衣、騎馬扈從、殿下被隨身食物、又殊有食物、納折櫃、是被志僧都（所カ）料也、被與僧都良久令淸談給、及晩景歸給、此間從內有召、秉燭馳參、左中辨在國（藤原）傳仰云、藏人頭依上日可期昇進者、從今日可始行事也云々、卽罷出、往古不聞事也、最是爲奇、今日須候內、而太相國承希有逍遙（ヶ）、仍拋公事所馳參也、不思後難、又忘公責耳、

實資ノ感慨

五日、戊午、弓場始、

〔小右記〕十月五日、戊午、○中略 依弓場始營、參大內、未時許攝政被參射場、裝束如恆、依仰撤御射席、申時出御、三位中將候、御劍置北置物御机、仍余後見、執御劍置右置物御机、出御之後、出居右少將明理（平）參著、須出居候座□出御、自餘儀如恆、權中

出御

還御

納言、道長、左兵衛督、時中、三位中將道綱、射之、侍臣向射三度了、今日貫首左大將朝光、略○中左府從朝候陣、所勞難堪、不可候射場之由、以余被申、即退出、亥時還御、

懸物

今日例懸物外、殊有仰事、被申懸物於皇太后宮、女裝束、人々不射料、有宮仰、返奉懸物、頗非例、

六日、己未、侍臣等、大井川ニ遊ブ、

〔小右記〕十月六日、己未、早朝從内侍臣向大井、先於美福門相待、公卿權中納言、道長、左兵衛督、時中、修理大夫、懷平、右中將、道綱、以上二人三位、或車或馬、向大井乘舟、或舟葺紅葉、或舟葺檜、蘆花等、兼所用意也、新中納言、道長、修理權大夫、安親、侍從宰相誠信、等追來、有大檜破子、他食物等、棹舟向度、難瀨、臨暮有和歌合者、修理大夫、大井心也、乘月侍臣皆歸參内、先是、長櫃破子付皇太后宮亮、忠信、依陪膳歸參内之便、送大盤所、

和歌合

○攝政兼家等、大井川ニ遊ブコト、九月十七日ノ條ニ見ユ、

七日、庚申、内御物忌、庚申、

〔小右記〕十月七日、庚申、今明内御物忌、早朝罷出、入夜歸參内、侍數多來宿所、皆云、今夜召酒殿不眠、依庚申者、仍卒爾求食物、令遂其志、侍臣淵醉、或歌或舞、覃曉更、相率參皇太后宮邊、舞歌、從亥子時許雨降、

侍臣淵醉

十日、癸亥、興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學竪義次第〕二年、戊子、講師定澄、年五十四、臘卅八、法相宗、興福寺、（永延）（永書「去年十月廿五日宣、十一月十九日請」）

丹生氏、左京人、寛空僧正入室、空晴僧都弟子、付屬眞喜僧正、住中院、十、臘四十二、

研學蓮泰、年四十、臘廿九、准研學春詮、年五

講師定澄

〔三會定一記〕一　同二年（永延）去年十一月廿五日、講師定澄、五十四、興福寺、法相宗、竪義蓮泰、春詮准、

次春詮、

〔僧綱補任〕三〇興福寺本　同二年（永延）戊子、講師定澄、法相宗、興福寺、元年十月廿五日宣旨、（永書「五十四」）

竪者蓮泰　（永書「春詮」）（永書「准」）

十三日、丙寅、四品永平親王薨ズ、

〔日本紀略〕一條院　十月十三日、丙寅、○扶桑略記同ジ、

〔小右記〕十一月十九日、壬寅、○中略來廿三日天皇御衰日、院御本命日、院御衰日、太后御衰日、攝政衰日、仍彼廿三日可有薨奏之由、仰外記政（多治）輔了、觸無忌公卿可令奏故也、

薨奏

廿三日、丙午、中納言保（源）光參入射場、奏兵部卿永平親王薨由、外記薨奏於書杖余令奏、依御物忌、以詞奏聞、奏文留候、以空杖返給上卿、依有前例、須付内侍所、而少納言不候云々、仍所令奏也、有例者、今明召保遠於藏

射場ニ參入シテ奏ス

錫紵ヲ著ケ給フ

人所、令擇申裁縫錫紵、及著御又除御等時刻、年中行事御障子東邊立所司御屏風二帖、其内敷小筵二枚、以所牢(司脱カ)帖敷其上、召内藏寮絹、度縫殿、申點、一令裁染、戌一點、著御之、直衣出御、脱御直衣、只著給御帶、即解御衣納柳櫃、居高坏(机カ)、須著御衣、然而未成身終之間、(給カ)

三箇日音奏セズ

頗無便宜、仍隨事狀、且(宜カ)、還御、從今日三箇日不音奏、

〔本朝皇胤紹運錄〕

御世系

村上天皇

永平親王　四品、兵部卿、號八宮、母同昌平、(藤原時尹女芳子)

八宮

〔大鏡裏書〕四品兵部卿永平親王

村上天皇第八皇子、母女御藤原芳子、小一條左大臣師尹公女、

〔榮華物語〕十日かけのかつら

みしきものに思ひきこえさせ給けれと、女御にてやみ給にき、(永平)おとこみやひとりうみ給へりしかとも、そのみやかしこき御なかより出給へりともみえ給はす、いみしきしれものにてやませ給ひにける、○下略

いみじきしれもの

〔榮華物語〕(芳子)一月宴　かゝるほとに、かのむらかみの先帝の御おとこ八宮、宣耀殿の女御の御はらのみこにおはします、いとうつくしくおはしませと、

叔父濟時扶養シ奉ル

あやしう御心はへそ、心えぬさまにおひいて給める、御おちの濟時のきみ、いまは宰相にておはするそ、よろつにあつかひ聞えたまひて、小一條のしんてんにおはするに、此宰相は枇杷の大納言延(源)光のむすめにそすみ給ける、母は中納言敦(藤原)忠の御女也、えもいはす美しき姫(娘子)君、さゝけものにしてかしつき給、かの八宮は、はゝ女御もうせ給にしかは、この小一條の宰相のみそ、よろつにあつかひ聞え給ふに、またおさなきほとにおはすれと、この八宮いとわつらはしき程に思ひ聞へ給へれは、ゆゝしうて、あへてみせ奉り給はすなりにたり、おさなき程は、うつくしき御心ならて、うたてひか〳〵しくしれはみて、又さすかにかやうの御心さへおはするを、いと心つきなしとおほしけり、宰相の御をいの實方の侍從も、この宰相をおやにし奉り給ふ、このひめきみの御あにゝて、おとこ君を長命(相任)君といひておはす、おはす北の方とりはなちて、ひは殿にてそやしなひたてまつりたまひける、そのきみたちも、たゝこの宮をそ、もてわつらひくさにしたてまつり給けれは、ともすれはうちひそみたまふを、いとゝおこかましきことにわらひたてまつり給へるに、にくさは、ひめ君をいとめてたきものに見奉り給ひて、つ

濟時ノ女姨子ヲ嘉ヒ給フ

實方等親王ヲ嘲弄シ奉ル

御馬ニ召サル

ねに參りより給けるを、宰相むけに心つきなしとおほしなりにけり、この八宮十二はかりにそなり給にける、この御心さまの心えぬなけきをそ、宰相はいみしう覺したる、實方侍從、長命君などあつまりて、むまにのりならはせたまへ、のらせ給はぬは、いとあしき事也、宮達は、さるへきおり〳〵は、馬にてこそありかせたまはめとて、御まやの御馬めしいてゝ、おまへにてのせたてまつりて、さゝとみさはけは、おもていとあかくなりて、むまのせなかにひれふし給へは、いみしうわらひのゝしるを、宰相かたはらいたしとおほすに、いたきおろしたてまつれ、おそろしとおほすらんとの給へは、さゝと笑ひのゝしりて、いたきおろしたてまつりたれは、むまのかみをひとくちくゝみておはするを、宰相いとわひしとみ給ふ、女房たちなとわらひのゝしる、かゝるほとに、冷泉院のきさいのみや（昌子）、みこもおはしまさす、つれ〳〵なるを、この八宮こにしたてまつりて、かよはし奉らんとなむのたまはするといふことを、宰相つたへきゝ給て、いと〳〵うれしうめてたき事ならん、かの宮は、たからいとおほくもたせ給へる宮なり、故朱雀院の御たから物は、たゝこの宮にのみこそはあんなれ、此みやは幸おはさる宮なり、たからの王になり給なんとすとて、よき日して參りそめさせ給へり、中宮さりとも、かの宮、小一條の宰相、をしへたてたらむ心のほと、こよなからんとおほして、むかへ奉らせ給ふ、宰相いみしうしたてゝ、ゐてたてまつりたまへれは、み奉り給に、御かたちにくけもなし、御くしなといとおかしけにて、よほろはかりにおはします、うつくしき御なをしすかたなりやゝかてよひいれ奉らせ給ひて、みなみおもてのひのおましの方に、かしつきすへ奉らせ給ふ、御ともの人々にかつけ物給ひ、御をくり物なとして、かへしたてまつらせたまふ、ものなと申させ給ひけるに、すへて御いらへなくて、たゝ御かほのみあかみけれは、かきりなくあてに、おほとかにおはするなめりとおほしけり、

中宮ニ參リ給フ

そのゝちとき〳〵まいり給に、なをものゝたまはす、あやしうおほしめす程に、きさいの宮なやましうせさせ給けれは、宰相宮の御とふらひにいたしたてまつらせ給、まいりてはいかゝいふへきとのたまはすれは、御なやみのよしうけたまはりてなんとこそは申給はめなと、をしへられて參り給へれは、れいのよひいれたてまつり給に、ありつることを、いとよくのた

中宮ノ御懺ヲ見舞ヒ給フ

まはすれは、みやなやましうおほせと、うつくしうおほしめして、さはのとかに又おはせよなときこえさせたまふ、まかて給ひて、宰相にありつる事いとよくいひつとの給へは、いてあなしれかましや、いと心つきなうおほして、いかていひつとは申給そ、それはかたしけなき人をときこえ給へは、をい〳〵、さなり〳〵との給ふ程、いたはりところなう、心うくみえさせ給ふを、わひしうおほす程に、天祿三年になりぬ、ついたちには、かの宮御さうそくめてたくしたてゝ、みやへまいらせたてまつり給、聞え給ふへき事を、このたひはわすれて、教へたてまつり給はすなりにけり、宮には八宮參らせたまひて、御まへにてはいしたてまつり給へは、いと〳〵あはれにうつくしとみたてまつらせ給ふ、心ことに御しとねなとまゐり、さるへき女房たちなと、花やかにさうそきつゝ、いてゐて、いらせ給へと申せは、うちふるまひいらせ給ほと、いとうつくしけれは、あなうつくしやなとめてきこゆる程に、しとねにいとうるはしくゐさせ給て、なにことをきこえ給へきにかと、あつまりて、あふきをさしかくしつゝ、をしこりてみな居なみて、かつはあな恥しや、小一條の姫君の御方のいみしからんものをなと、口々きこ

えあへる程に、うちこはつくりて申いて給ふことそかし、いとあやし、御なやみのよし承りてなん、參りつる事と申給ものか、こその御なやみのおりにまいりたまへりしに、宰相のをしへきこえ給ひしことを、正月のついたちのはいらいにまいりて申給なりけり、宮の御前、あきれてものもの給はぬに、女房たち、なにとなくさとわらふ、よかたりにもしつへきみやの御ことはかなとさゝめき、しのひもあへすわらひのゝしれは、いとはしたなく、かほあかみてゐ給ひて、いなやおちの宰相の、こその御こゝちのおりましかは、かう申せといひしことをけふはいへは、なとこれかおかしからん、物わらひいたうしける女房たちおほかりけるみやかな、やくなし、まいらしと、うちむつかりてまかて給ふありさま、あさましうおかしうなむ、小一條におはして、あさましき事こそありつれとかたりたまへは、宰相なに事にかと聞え給へは、いまはみやにすへてまいらし、たゝころしにころされよとのたまはすれは、いなや、いかにはへりつることそときこえたまへは、御なやみのよしうけたまはりてなんまいりつると申つれは、女房の十廿人といてゐて、ほゝとわらふそや、いとこそはらたゝしかりつれ、されは

世ノ第一ノしれもの

八宮ノ大饗

いそき出てきぬとの給へは、とのいとあさましういみしとおほして、すへて物もの給はす、いなや、ともかくもの給はぬは、まろかあしういひたる事か、こそまいりしに、さ申せとのたまひしかは、それをわすれす申たるは、いつくのあしきそとのたまふを、いみしとおほしいりためり、

〔大鏡〕三左大臣師尹　御むすめ（芳子）村上の御時の宣耀殿女御、かたちおかしけにうつくしうおはしけり、〇略中この女御の御はらに、八宮とておとこむまれ給へり、御かたちなとはきよけにおはしけれと、御心きはめたるよの第一のしれものとそきゝたてまつりし、世中のかしこきみかとの御ためしには、もろこしには堯のみかとゝ、舜のみかとゝ申、この國には、延喜天暦とこそは申めれ、延喜とは、たいこの先帝の御事、天暦と申は、村上の先帝の御事なり、そのみかとの御子は、小（師尹）一條大臣むまこにてしかしれ給へりける、いと〳〵あやしき事なりかし、その母女御の御せうと、濟時の左大將と申しゝ、〇略中御をいの八宮に大饗せさせたてまつり給て、上戸におはすれは、人々ゑひしてあそはんなとおほして、さるへき上達部たち、とく出るものならは、しはしなとおかしきさまにとゝめさせ給へと、よくをしへ申させ給ひけり、さこそ人からあやしくくしれ給へれと、やんことなきみこの大事にし給ふ事なれは、人々あまたまいり給へりしもこたひなりかし、されとおほやけことさしあはせたる日なれは、いそき出給ふに、まことさる事ありつとおほしいてゝ、大將の御方をあまたゝひ見やらせ給ふに、めをくはせ申給へは、御おもていとあかくなりて、とみにえうちいてさせ給はす、もものもえおほせられて、にはかにおひゆるやうに、おとろ〳〵しくあらゝかに人々のうへのきぬのかたもおちぬはかりとりかゝらせ給に、まいりとまいれる上達部は、すへの座まて見あはせつゝ、えしつめすやありけむ、かほけしきかはりつゝ、取あへすことにことをつけつゝなんいそきたちぬ、この入道（道長）殿なとは、わか殿上人にておはしましけるほとなれは、事するゑにてよくも御らんせさりけり、たゝ人々のほゝゑみていて給ひしをそ見しとそ、此ころおかしかりしことにかたり給ふなる、大將はなにせむにかゝることをせさせたてまつりて、又しかの給へともをしへ聞えけんとくやしくおほすに、御いろもあをくなりてそおはしける、まことにみこをは、もとよりさる人としり申たれは、人これをしもそしり申さす、この殿をそ、か

ゝる御心と見る〳〵、せめてなくてあるべきことならぬに、かく見くるしき御ありさまを、あまた人にみせきこえ給へる事とそしり申し、いみしき心ある人とおほえおはせし人の、くちおしくてそくかうとり給へるよ、

○永平親王、親王宣下ノコト、康保三年四月十九日ノ條ニ、御元服ノコト、天元二年二月二十日ノ條ニ、薨奏ニ依リテ、賀茂臨時祭延引ノコト、

本年十二月七日ノ條ニ見ユ、

十七日、庚午、季御讀經、

〔小右記〕十月五日、戊午、早朝參二條院、御讀經發願、（略）○中左府（雅信）被候陣、定季御讀經僧名、以右少辨俊賢（藤原）被奏定文、於射場殿令（脫アラン）攝政了、

發願

〔小右記目錄〕四季御讀經事　永延二年十月十七日、秋季御讀經事、

慈覺草庵ヲ結ブ

延曆寺首楞嚴院ノ堂塔ヲ新造ス、

鎭朝ノ修理

〔門葉記〕四十一○山城　如法經一　新造堂塔記

慈覺大師、去天長年中、初入當院、結草庵以爲室、修四種三昧、蓋絶人跡、端坐待終、坐禪之隙、滴石液以爲墨、抽草心爲（以脫カ）筆、手躬書寫妙法蓮華經一部、納之小塔、安于一堂、故座主鎭朝和尙、爲院家撿校之時、忽奉天綸、修營禪宇、自爾以來、星

源信ノ修理

大江爲基之ヲ助ク

諸佛像ヲ安置ス

尋禪故實ヲ復ス、願旨

讃

月推移、土木漸廢、院僧源信傷聖跡之影漂淪、倩（請カ）檀越攝州刺史江大夫爲基、勤力以修理焉、刺史夷隆鏟崕、增以堂（脫アラン）基跡、造以新塔之形像、云堂云塔功夫甫就、刺史請曰、我有新寫法華經一千部、安置之於塔中、以爲功德之張本、堂不容受者乎、恆（恐カ）信等又奉送（贈カ）立金色尺迦、多寶二世尊像、普賢、文殊、觀音、彌勒、四菩薩像、僧明禪造普賢、僧嚴久、僧聖全等造彌勒、源信造餘尊、但觀音本所安置、今加金色之飾、卽築二重壇、々上置白蓮華、々上起新塔、々裏處舊塔、兩塔中間安置二尊像、令四菩薩圍繞於寶塔、修餙多寶、倍於前紹隆、當時撿校座主權僧（尊禪）正大和尙、永遏余僧余經之交錯、諸人雜人之闖入、亦是故實矣、抑我等今有願、々以此功德、先開華報於極樂、遂拾實果於寂光、乃至末代衆生、以一花一香供養之者、以一音一偈讚嘆之者、但擧一手或復小低頭、令如是等輩皆成佛道、經云、若經卷所住之處、皆應起七寶塔、以一切花香瓔珞幡蓋伎樂歌歎（頌カ）、恭敬尊重讚嘆、若有人得見此塔禮拜供養、當知、是等皆近菩薩、佛語純一、我願捨（マヽ）諸、南无十方三寶、哀愍證誠、令我等之弘願、住大師之本懷、欲重結緣、以一偈、讚曰、

妙法蓮華經　難解難入門　普門衆生說　皆入佛知見　聲聞若菩薩

聞我所說法　乃至於一偈　皆成佛無疑　十方佛土中　唯有一乘法

无二亦无三　除佛方便說　諸佛從本來　常自寂滅法　佛子行道已
來世成佛道　或以歡喜心　歌唄頌佛德　乃至一小音　皆已成佛道
若人散亂心　入於塔廟中　一稱南無佛　皆已成佛道　於諸過去佛
現在或滅後　若有聞是法　皆已成佛道　末世諸世尊　唯說百千億
无數諸法門　其實爲一乘　諸佛兩足尊　知法常无法　佛種從緣起
是故說一乘　是法住法位　世間相常住　於道場知己　導師方便說
天人所供養　現在十方佛　雖亦種々道　其實爲一乘　今我亦如是
安穩衆生故　以種々法門　宣示於佛道　菩薩聞是法　疑網皆已除
千二百羅漢　悉立當作佛　我所有禍業　今世若過世　及讚佛功德
盡廻向佛道　願共說衆生　往生安樂國　我等與衆生　皆共成佛道

永延二年戊子十月十七日庚午記之、

二十五日、戊寅中宮季御讀經發願、

〔小右記目錄〕四季御讀經事　同廿五日、中宮春季御讀經發願事、（永延二年十月）

大宰府、筑前觀世音寺金堂仁王長講ノ佛僧供料等ヲ定ム、

〔東大寺文書〕六四十三號

府牒　觀世音寺　在合御判

應永勤行金堂仁王長講佛僧供等事

一佛供料米事　年料伍斛肆斗、三百六十日料、日別壹升伍合、

右以稅司納米、割大貳月粮內、永可奉下之狀、下知彼司已了、仍須寺家政所、

每旬請度(受カ)、每日炊備、令奉供之、

一常燈油事

右件堂常燈料、素有其儲、筑前國所下稻三百束、寺家請件稻、買備常料油(燈脂カ)、勿

致闕怠、

一僧供料米事　年料拾捌斛、三百六十日料、日別五升、

長講僧貳口　日別肆升　口別二升、

堂童子壹人　日別壹升

右檢彼寺代代進府用途帳、所載雜用已以有數、就中寺女奴婢(內カ下同ジ)多有其名、今

尋實情、已是無身、而稱彼常食、徒備立用、爲僧有罪、爲寺無益、方今爲鎭護國

佛供料米

常燈油

僧供料米

寺ノ奴婢名有リテ實無シ

奴婢ノ食米ヲ以テ僧供料ニ充ツ　把岐莊地子米

家、利益吏民、擇置僧二口、於件堂始修仁王長講事、卽以彼寺女奴婢食米內、可充件僧供料之狀、所定如件、寺察之狀、以筑前國上座郡把岐庄田地子米、全以充行、若地子有剩者、全以納置、可充閏月料、辨同堂香花炭松鋪設等料、勿割他用、致其闕怠、但納當年輸米、充明年八月以前料、

長講僧ノ衣服

一同僧二口衣服事

口別絹壹疋　直稻佰束

布貳端　直貳拾束　段別十束、

右衣服直、以同把岐庄田地子內、每年充行、取彼僧返抄、可立用途帳、

災咎ヲ攘ヒ榮樂ヲ期ス

牒、滅罪生善、最緣佛法、轉禍爲福、不如般若、今件堂佛像儼然、戶牖鎭鑠、已無開樞、豈挑燈明、故今修件長講、期之不朽、上奉爲聖朝、下□□黎庶、永攘災咎、將期榮樂、仍牒送如件、寺察之狀、始從今日、依件勤行、故牒、

大典日置宿禰在判

永延三年十月廿五日

大貳藤原朝臣在御判

○本書、觀世音寺印一顆ヲ踏ス、

廳判

廳

應以稅司納米、日別宛壹升伍合、永下行觀世音寺金堂仁王長講佛供料事、右佛供料米、割大貳月粮內、日別宛一升五合、隨彼寺長講所之請、可永下行之狀、所定如件、司宜承知、永爲例下、不待新廳判、依件宛下之、

大典日置宿禰在判

永延三年十月廿五日

大貳藤原朝臣在御判

○本書、觀世音寺印一顆ヲ踏ス、

公文所

勘申觀世音寺金堂仁王講佛供米例下子細事○中略

右引勘例文之處、去永延二年十月廿五日廳判、可下稅司米、日別一升五合、永下行件仁王講佛供料、以此爲本例文、次ニ府判明白也、○中略

康和元年閏九月十六日　案主史生高橋在判　○下略

○大宰府、把岐莊ノ地子米ヲ定ムルコト、正曆元年十二月十三日ノ條ニ、長講僧ヲシテ、同莊ヲ進退セシムルコト、同二年四月十三日ノ條ニ見ユ、

二十九日、壬午、圓融法皇、延曆寺ニ於テ、座主權僧正尋禪ヨリ、廻心戒ヲ受ケ

兼家ノ京極第ニ臨幸　一乘寺ニ宿御　御登山　御使ヲ花山法皇ノ御所ニ遣サル　手輿ニ御セラル　戒壇房ニ著御　戒師尋禪御戒牒

給フ、

〔日本紀略〕一條院　十月廿七日、庚辰、圓融寺太上法皇爲廻心、欲登台山、路幸攝政二條京極新造第、於馬場殿有走馬事、今夕宿御一乘寺、○扶桑略記同ジ、

廿八日、辛巳、太上法皇登台山、○扶桑略記同ジ、

廿九日、壬午、太上法皇於延曆寺戒壇院、有灌頂受戒事、○百練抄、一代要記等異事ナシ、

卅日、癸未、法皇差使於鎌藏、奉訪花山法皇、○扶桑略記、鎌倉ニ作ル、

〔小右記〕十月廿八日、辛巳、遲明歸參、奏御馬返事、其詞云、恐給者、別納所辨備上下饗饌、辰時許、登天台給、御々馬向給山脚之間、權中納言馳參、奏攝政申旨、即御々手輿、童女二人相遞持候、天台座主所奉、皆著褐衣、伊千比脛巾、公卿以下皆著狩衣、藁履、於水飲律師覺慶儲候御膳、及備侍臣等食、事了、赴給之間、中使左將伊周朝臣、於水飲上坂、傳奏途中安不、廼歸參、申時許、著給戒壇房、座主登時參入、山及別納儲饗、余宿內供慶圓房、

廿九日、壬午、巳時打大衆集會鐘、先是、被遣法眼於座主房、使別當左少辨扶義、判官代保昌、即向給戒壇、公卿以下僧侶祗候、戒和尙、座主尋禪、羯磨僧二人、大納言心、中納言重信、息廻公、季息今日依可有御戒牒、忽然式部權大輔々正作、參議誠信書、書青紙、御廻了之後、於戒壇

諸堂御巡幸　滿山ノ僧二千六十餘人ヲ供養セラル　御徒歩御下山　一乘寺ニ著御　圓融寺ニ還御

南門、公卿以下執祿、給之衆僧等、其法在別了、法皇向給座主假房、四王院、於簾內拜給云々、事了、御講堂、被修諷誦、布千端、公家之所被奉也、御導師成眞給大褂、了向給常行堂、被修念佛、了禮給法華堂、行懺法、事依卒爾、被取堂僧見參、追可給物、次禮給中堂、被修諷誦、布三百端、御導師慶算同給祿、了禮給文殊樓、了戌時許還御々房、今日被供養滿山僧二千六十餘人、各斗米、饗饌、山及廳共儲、早朝座主被奉三衣御筥、納三衣、御念珠二連、一連香念珠、納紫檀地螺鈿筥、以薄物裹、置花足短机、御共公卿三位合九人、大納言重信、右大將濟時、從東坂上、中納言公季、道長、參議時中、誠信、三位懐平、道綱、奉清、四位十人、五位十五人、六位十人、僧綱二人、僧都穆算、律師雅慶等也、曉更、差右馬頭實方、法皇奉遣花山帝御房、御蒲鞍云々、下御之間、奏御返事、

卅日、癸未、辰時許、供御膳、公卿已下饗皆山所儲、院廳御カ日儲、了法皇徒歩下山給、今般不用手輿、著御藁履、座主被候御共、於惣持院邊、依仰還給、右大將從東坂上、源大納言同、午時許到給一乘寺、此間所儲、又御雅信寺聊有其儲、御馬、供御膳、廳所儲、左大臣、藤原朝光、左大將、被參入、公卿以下三位、及僧綱等、給御衣及大褂、事依倉卒、隨有而已、了御々堂、被修御諷誦、布百端、唯付御誦經文、還御圓融寺、時申刻、各分散、

〔扶桑略記〕二十七一條天皇上　十月廿九日、太上法皇於延曆寺受灌頂戒、一云、於

東大寺ニテ御受戒トノ説

東大寺受灌頂戒、〇歴代編年集成、東寺長者補任、十三代要略等亦東大寺ニ作ル、共ニ誤レリ、

〔華頂要略〕百二十一天台座主記二　第十九權僧正尋禪　同二年（永延）戊子、十月廿九日、圓

廻心戒

融法皇御受戒、廻心向大、以和尚爲戒師、

〔東寺文書〕〇觀智院一　東大寺御受戒羯磨師先例

寛和二年三月、圓融院御受戒、〇略中　永延二年十月、於天台廻心受戒、

東寺ニテ御受戒トノ説

〔東寶記〕四法寶上　代々法皇於東寺御入壇例事

同抄云、圓融法皇〇略中　同十月廿九日、於東寺受三昧耶戒、〇皇代記、高野春秋等、亦東寺ニ作ル、共ニ誤レリ、（密教研究抄）（永延二年）

〇圓融法皇、東大寺ニ於テ、具足戒ヲ受ケ給フコト、寛和二年三月二十二日ノ條ニ見ユ、

群盜、猪熊殿ニ放火ス、

〔小右記〕十月卅日、癸未、〇略中　去夜群盜放火、燒亡猪熊殿、其盜五人射殺云々

此宅故道明（藤原）大納言爲相模介之時所造也、其後無盜火事、不幾有此事等（者カ）

十一月大甲申朔盡

一日、甲申、平野祭、

〔日本紀略〕一院　十一月一日、甲申、平野祭、

二日、乙酉、梅宮祭、

〔日本紀略〕一院　十一月二日、乙酉、梅宮祭、

三日、丙戌、僧綱ヲ任ズ、

〔僧綱補任〕三興福寺本　〇律師千到（朱書）十一月三日轉任權小僧都、

權律師仁覺、六十九、十一月三日任、已講勞、大安寺、法相宗、

已講勞

七日、庚寅、權大納言藤原道隆、攝政兼家ノ六十ノ算ヲ賀ス、

〔日本紀略〕一院　十一月七日、庚寅、於二條第、賀攝政算、（藤原道隆）

〔小右記〕十一月七日、庚寅、參內、次參攝政殿、今日權大納言賀攝政六旬算、兼日、

六十箇寺ニテ諷誦ヲ修ス、舟樂舞ノ遊アリ、

於六十ケ寺、修諷誦云々、其儀不似例賀、御前沈香懸盤六基云々、公卿以下饗云々、右大臣（爲光）

被參入、攝政以銀盃、土器形、指右大臣、受取以其盃流巡、甚無便宜、臨晚、有舟樂舞

御遊事、上下纏頭有差、公卿脫衣、懸舞人及近衞府官人、攝政脫衣、給左近將曹

纏頭

尾張兼時、有馬六疋、（片々五品、片々衛府六位、）贈物（琴笛等類歟、）等、今日事頗異例、賀事之最初、先有獻物六十捧、（獻物六十捧）權大納言以下諸大夫執之、民部卿文範（藤原）第一執之、若依時儀以壽考人令執之歟、右大臣同民部卿、不稱其人所獻由、只稱千鳥（今）何如、可尋、今日無御挿頭御裝束、唯儲屏風御座等云々、

○常寧殿ニ於テ、兼家ノ賀算ヲ行ハセラルヽコト、三月二十五日ノ條ニ見ユ、

十三日、丙申、吉田祭、

〔日本紀略〕一條院　十一月十三日、丙申、吉田祭、

十七日、庚子、大原野祭、

〔日本紀略〕一條院　十一月十七日、庚子、大原野祭、

〔小右記〕十一月十九日、壬寅、（略）中右近將監信（平）親位記請印云々、（使者位記請印）依勤大原野祭使也、

十八日、辛丑、五節、

〔小右記〕十一月十九日、壬寅、今明御物忌、（略）中亥終五節參上、（内御物忌）皇太后宮（藤原）大夫安親、左京大夫泰清（源）修、理權大夫誠信（藤原）侍從宰相（藤原）依御物忌、大歌人候射場、無名對面、（大歌人）

〔榮華物語〕三さま〳〵のよろこひ　（永延二年十月）この月もたちぬれは、五節なとを、殿上人はいつしかと、心もとなくおもふ程に、御卽位の年は、さるやむことなき事にて、ことしの五節のみこそは、ありさまけさやかに、おまへにも御覽し、人もおもひためるに、四條（遵子）の宮の御五節、又左大臣（雅信）殿の左兵衛督（源）時中のきみ、さては受領ともたてまつる、御前の心みのよなとは、（一條）うへわかうおはしませと、（懿子）きさいの宮おはしませは、そのふたまのみすのうちのけはひ、人のしけさなと、せう〳〵のまひひめなとの、すこしものゝこゝろしりたらんは、やかてたうれぬへうはつかしうて、おもてあかむらんかしとみえたり、なを宮（遵子）の御五節はいと心こことなり、とやかうやと、とり〳〵に女房いひさはきて、又のひの御らんに、わらはしもつかへなとの樣も、いつれも〳〵、たれかはかならすしも人におとらんと思ふかあらむ、心〳〵おかしうすてかたう、おほしめしさためさせ給、

十九日、壬寅、鎭魂祭、

〔小右記〕十一月十九日、壬寅、（略）中鎭魂祭所、差遣平子（今）、

二十一日、甲辰、豐明節會、

皇太后遵子舞姫ヲ奉ラル

南殿ニ出御

〔小右記〕十一月十九日、壬寅、〇中略豐明節會、早可出御之事、同仰外記政(多治)輔了、皆是攝政命也、

〔兵範記〕嘉應元年十二月十五日、丙申、〇中略

永延二年十一月廿一日、甲辰、豐明節會也、御南殿、〇下略

官歷

檀那院根本

十二月小甲寅朔盡

二日乙卯、少僧都興良寂ス、十二月二日、少僧都興良卒、

〔扶桑略記〕二十七一條天皇上

〔僧綱補任〕〇興福寺本權律師興良、寛和二年三月十一日任、天台宗、延暦寺、

御持僧勞(宋本)七十五上〇以上二、永延元年三月十日轉任權少僧都、同二年月日滅、七十七、〇以上三、

〔僧綱補任〕〇乾德川昭武氏本檀那院根本權律師興良元名千良天台宗、延暦寺、寛和二年丙戌十二月廿五日、年七十五、臘五十七、故延暦寺座主大僧正法印大和尚慈慧弟子、慈念僧正、幷慈慧大和尚受法、承平二年九月八日得度、受戒、天元元年十月十九日、依慈慧大僧正奏、爲延暦寺阿闍梨、天延二年二月十九日補內供奉十禪師、圓昭律師替、永延元年丁亥三月十二日任少僧都、同二年戊子十二月二日卒、七十七、檀那院根本、

〔護持僧次第〕一條院山阿闍梨內供奉興良寛和二年十二月廿五日任權律師、護持勞、永延元年三月十日任少僧都、同賞、同三年十月二日卒、年七十七、檀那院根本、

西塔ニ住ス

〔僧綱補任裏書〕乾　興良　興良本住西塔、惠高和尚門人、但師主不知誰人云、可尋、

慈惠ヨリ顯密ヲ學ブ

件興良、從年少之時、相從慈惠大和尚、祖學顯宗法門、幷不動十二天護摩等祕教、次從僧正延昌、受學兩部大法、後還於大和尚所、重以研學所授法、受習蘇悉地大瑜伽者、

延昌ヨリ兩部大法ヲ受ク

世評

四日、丁巳、權中納言藤原道長、恣ニ式部少輔橘淑信ヲ捕搦ス、尋デ、攝政兼家、道長ヲ勘當ス、

〔小右記〕十二月四日、丁巳、〇中略新中納言道長、放勇堪從者等、捕搦式部少輔淑信、不乘車歩行、將向彼家云々、是甘南備永資試事云々、天下之人所歎也、

五日、戊午、〇中略依式部少輔淑信朝臣事、攝政殿被勘當新中納言、

試樂

七日、庚申、賀茂臨時祭、

〔日本紀略〕一條院　十二月五日、戊午、賀茂臨時祭試樂、

七日、庚申、賀茂臨時祭、

〔小右記〕十月廿五日、戊寅、未旦從內參攝政殿、定申賀茂臨時祭事、被下給色色宣旨、小選罷出、

永平親王ノ薨奏ニ依リ延引ス

十一月十九日、壬寅、今明御物忌、〇中略故兵部卿親王薨奏以前、若可有臨時祭乎如何者、去天曆六年、依朱雀院御心喪、以十二月十五日可有臨時祭、而十四日誨子內親王薨、無官奏、已及天聽、仍停止臨時祭、以十九日被行云々、又可被延引之夢想、使內藏頭有所見、仍以保遠、吉平、令占延不、被延之者、仍以來月可被行、

兼家物忌ニテ參入セズ

十二月四日、丁巳、早朝罷出、入夜歸參、左大將今夜被候宿所、依明日試樂事、被籠御物忌也、

還立

五日、戊午、今日臨時祭試樂、申時事始、酉時舞了、依御物忌、攝政不被參入、左大將、權中納言、新中納言、三位中將、修理權大夫候御物忌、左大將去夕被候幣宿所、今朝有食儲、被籠御物忌之公卿、皆於宿所有飲食、

〔榮華物語〕三さま〳〵のよろこひ　五節もはてぬれは、臨時のまつり廿日あまりにせさせ給、〇本書十一月ノコトヽ爲スハ誤ナリ、試樂もおかしくてすきにしを、まつりの日のかへりあそひ御前にてあるに、攝政殿をはしめたてまつりて、さへき殿はら殿上人、のこりなうさふらひ給、このまひ人のなかに、六位二人あるに、藏人の左衞門の尉、うへの判官といふ源兼澄、舞人にてかはらけと

りたるに、攝政殿御覽して、まついはひの和歌ひとつつかうまつるへしと
おほせらるゝまゝに、よひのまにとうちあけ申たれは、けうあり〳〵おそ
し〳〵と殿はらの給はするに、君をしいのりをきつれはと、そへましたり、
大殿いみしうけうせさせ給て、おそし〳〵とおほせらるれは、また夜ふか
くもおもほゆるかなと申たれは、いみしうけうしほめさせ給て、攝政殿あ
こめの御そぬきてたまはす、

〔小右記目錄〕四臨時祭事　同（永延二年）十一月八日、臨時祭召物麗惡事、

召物麗惡

十日、癸亥、御體御卜、

〔日本紀略〕一院　十二月十日、癸亥、御體御卜、依内裏犬死穢、付内侍所奏之、

犬死ノ穢

十一日、甲子、月次祭、神今食、

〔日本紀略〕一院　十二月十一日、甲子、月次祭、神今食、

十七日、庚午、荷前、

木幡ニ奉ル

〔小右記〕十二月十七日、庚午、使博通、奉荷前於木幡、

圓融法皇、加擧文、及ビ無度緣文ヲ雲林院ニ下シ給フ、

〔小右記〕十二月十七日、庚午、略、中　次參内、依召參院、下給雲林院申加擧文、無

度緣文、

太政大臣賴忠、攝政兼家ノ六十ノ算ヲ賀ス、

〔小右記〕十二月十七日、庚午、略、中　太政官（大臣）今日賀攝政六旬算云々、

○常寧殿ニ於テ、兼家ノ賀算ヲ行ハセラルヽコト、三月二十五日ノ條ニ見ユ、

權大僧都圓賀ヲシテ、延曆寺總持院ニ於テ、熾盛光法ヲ修セシム、

〔小右記〕十二月十七日、庚午、略、中　自今日、於總持院、率十五口伴僧、修熾盛光法、僧都圓賀、

權左中辨藤原忠輔ノ勘事ヲ免ズ、

〔小右記〕十二月十七日、庚午、略、中　參攝政殿、次參右府（爲光）、申權左中辨忠輔（藤原）勘事免給之由、

十八日、辛未、中宮季御讀經、

〔小右記目錄〕四季御讀經事　同（永延二年）十二月十八日、中宮秋季御讀經事、

二十日、癸酉、御佛名、

〔日本紀略〕一院　十二月廿日、癸酉、御佛名、

〔榮華物語〕三さま〳〵のよろこひ　世中は、五節臨時の祭たにすきぬれは、のこりの月日あるこゝちやはする、しはすの十九日になりぬれは、御佛名とて、地獄ゑの御屏風なと、とうてゝしつらふも、めとゝまりあはれなるに、おりしも雪いみしうふりけれは、をくりむかふといひをきたるも、げにと覺えたるに、殿上人の菩提こゝろも、あやにくなるまて聞えたり、つき〳〵の宮なとのものゝしる、

二十二日、乙亥、權少僧都禪愉寂ス、

〔僧綱補任〕○興福寺本　權律師禪愉　貞元二年五月卅日任、天台宗、延暦寺、已講勞、信乃國人、「六十四」(朱書)天元二年十二月廿一日轉正、「六十八」(朱書)寛和二年十二月廿五日轉任權小僧都、「七十五」(朱書)○以上二、永延二年十二月廿二日入滅、○以上三、

是歳、中納言藤原道兼ヲ橘氏ノ是定ト爲ス、

〔玉葉〕安元三年六月五日、癸酉、午刻筑前守橘以政持來橘氏是定宣旨、吉服東帶也、○中略代々是定例、參議橘恆平朝臣卒去以後、○中略粟田關白、(道兼)永延二年宣下、中納言、○中略已上、以政注進狀、

清涼寺ニ戒壇ヲ建ツルコトヲ許ス、尋デ、延暦寺ノ訴ニ依リテ、之ヲ停ム、

〔歴代編年集成〕十七條院　同年、(永延二年)愛宕山(清涼寺)可立戒壇之由宣下、依山門訴訟改定訖、

〔延暦寺衆徒申狀〕

延慶二年六月廿日、惣持院三塔集會議曰、

可早成滿山一同議、有嚴密沙汰、大師號間事、○中略

一勅裁後、依山門訴訟、被召返宣旨、欲(歟カ)及衰亡旨含愁歎、雖有宣下、依當山訴、被召返宣旨、嘉例先規事、○中略

一條院御宇、永延二年、於愛宕山可建立戒壇之由、雖被宣下、依山門訴訟、被下改定之宣旨畢、○中略

延慶二年六月　日

○僧齋然、清涼寺ヲ建立センコトヲ請フコト、元年二月十一日ノ條ニ見ユ、

年末雑載

雷鳴晝夜數度勘文

閑院第ノ放火

蛇小野宮ノ南ノ池ニ立ツ

天文、變異、

〔柳原家記錄〕百五十四　暦圖

賀茂光榮永延二年二月勘文云、今月廿五日、壬子、晝夜數度雷鳴、自今月廿一日戊申、至廿六日癸丑、入卿晉卦、六日七分占云、此日天變怪異□祥卿相之人、以爻辭可占禍福云々、今案晉卦者、乾之遊魂也、爻辭云、九四晉如鼫鼠貞厲、象曰、位不當也、王弼注云、履非其位、上承於五、下據三陰、履非其位、又負且乘、無業可安、志無所據、以斯爲進止之危也、進如鼫鼠、無所守云々、和案、上承於五、下據三陰々々(云カ)、然則三卿相可慎哉、又本宮乾也、主上可慎御哉、乾宮主天子也、何者晉卦九四爻動爲剝卦之六四故也、又有兵亂歟、晉卦也(衍カ)、己酉用事之故也、己酉主兵之象也、

〔小右記〕三月十六日、癸酉、○中略依大將御消息、參閑院、良久清談、今曉、寢殿巽角簾下放火、及燃上之間、人々見付撲滅云々、

閏五月九日、甲午、○中略蛇立小野宮南池、

神社、

皇大神宮禰宜
熊野別當補任
書寫山圓敎寺六月會ヲ始ム
東寺結緣灌頂
總持院阿闍梨
大膳職官人代

〔二所太神宮例文〕第三　加補次第三員禰宜
敏忠(荒木田)　一門舅秋眞讓、永延二年九月十四日任、在位(任カ)八年、

〔熊野早玉神社文書〕三 熊野別當代々次第　第十一別當快眞　一條院御時、
永延二年十二月廿九日補任、泰救嫡男、男子一人、女子二人、治山卅九年、〇熊野別當次第ニ、二十八日ニ作ル、

佛寺、

〔書寫山圓敎寺舊記〕續遺集下　當山自草創至今時、佛事講演始行年記事　六月會卅講、永延二年始之、

〔東寺長者補任〕二　長者大僧正寛朝 法務、　十月十六日灌頂行之、

〔寺門傳記補錄〕十三 僧傳部丁 長吏高僧略傳上　法務前大僧正觀修 解脱寺、　十六世
觀修　永延二年補(補)摠持院阿闍梨、又經西塔院釋迦堂五禪師、

公家、

〔類聚符宣抄〕七 大膳官人代事
左中辨藤原朝臣在國傳宣、左大臣(雅信)宣、正六位上穴太村主道忠、宜爲大膳職官人代者、

文殿役
雅樂寮舞裝束ヲ衛門府ニ返納ス
伊豆田方郡少領
大膳少屬雜物ヲ上ル

永延二年四月十三日　左大史多米宿禰國平 奉

〔類聚符宣抄〕七 補史生使部事
左大辨藤原(懐忠)大夫宣、厨家案主村主正利、宜准民懐土例、令兼仕文殿役者、
永延二年五月十六日　左大史大春日朝臣 奉

〔小右記〕閏五月九日、甲午、〇中略 左右衛門府舞裝束各四具、先日依宣旨、度雅樂寮、而依本府之申、可令返納之由、仰彼寮屬、物□攝政所行也、參內候宿、

〔類聚符宣抄〕七 任諸國郡司事
太政官符　伊豆國司 內、他同之、
田方郡少領外從七位上伊豆直厚正
右去五月九日補任如件、國宜承知、依例任用、符到奉行、
辨　史
永延二年閏五月十九日

〔延喜式〕二十七 紙背文書 〇公爵九條道實氏所藏
上

粉熬一折櫃
生海松一折櫃
堅鹽一折櫃
穴薑一盛
心太二折櫃（卯カ下同ジ）
醬一瓶
味醬一盛

永延二年七月十五日　大膳少屬秦「（自署）」

上

粉熬一盛
功交（卯カ）一盛
心太（脫アラン）一（卯）戸
醬一瓶
御酒一瓶

出納ノ櫃ヲ檢封セシム
圓融法皇
藤原知光
藤原人ニ藏ヲ補スベキヨシ仰出サル
藤原實資
清水寺ニ詣ヅ
攝政兼家
御讀經發願
藤原文範
亡妻ノ忌日ニ佛事ヲ修ス
實資清水寺ニ詣ヅ
藤原道兼
不斷念佛ヲ行フ

永延二年七月十五日　大膳少屬秦「（自署）」

〔小右記〕八月十八日、壬申、〇略中瀧口著到、出納櫃加檢臨、可令封之由、有被定仰事、頗有狼藉聞、仍所被定也、卽仰出納奉親了、參東宮、小選罷出、

十二月十七日、庚午、〇略中依召參院、〇略中又藤知光明年藏人事等、被仰遣攝政許、歸參、

諸家、

〔小右記〕二月十八日、乙巳、參清水寺、奉御明如例、入夜參入、宿侍、

閏五月九日、甲午、參攝政殿、御讀經發願、〇略中民部卿（藤原文範）北方七々日法事、於石鞍修之云々、

六月十八日、癸酉、猪隈殿穢引來、仍不參清水寺、

八月十八日、壬申、不參清水寺、刻限參內、

卅日、甲申、早朝從內罷出、入夜參內、宿侍、〇略中未明參清水寺、奉御明、高信師施袈裟、

十二月十七日、庚午、〇略中依權中（藤原道兼）納言消息、三位中（藤原道綱）將同車、從內向彼家、爲聽聞不斷念佛、右衞門督、修理大夫、三位中將、雲上侍臣四五人、會合、有食物、入夜分

相續爭ニ就キテノ質義

散、

法制、

〔延喜式〕一〇紙背文書　公爵九條道實氏所藏

問

縱戸主甲之孫、兄乙早沒、弟丙爲戸主之間、去年死去□□□兄乙男丁、可領件戸之由、請職裁之日、二代大夫判、立戸隨上成、去年計帳已了、而丙女子異姓男戊、稱嫡男妨奪、□(兄カ)乙男丁所陳、已承昭穆、職立戸、主繼副、嫡相承、違法養□□類可改正、養異姓男可徒坐、而今有此論、誰得理法、如何、仍請明判、謹問、

永延二年六月八日　　栗□(花押)

問

假令、甲之男女子有數、爰一男乙出家入道、仍二男丙可進□(止カ)遺財雜物、而乙等之母丁、甲之服中、改嫁之後、乙丁幷令(今カ)夫戊等同心、退丙擬不令知件財物、又號不孝子、擬義絶、今一疑者、出家入道之男、可領財物哉、又父母之間、可有義絶之狀哉、未知法意、仍請明判、謹問、

大乘院十禪師基質疑文　延喜式卷一紙背
公爵九條道實氏所藏

原寸　縱〇・二七五

永延二年閏五月十七日

宮内史

大乘院十禪師其質疑文

延喜式卷一紙背
公爵九條道實氏所藏

原寸 縱〇・二七五

謹問

永延二年閏五月十七日

宮內史生□(花押)

大乘院十禪師某質疑文　延喜式巻一紙背
公爵九條道實氏所藏

原寸　縦〇・二七五米

問

今甲為国司并清公筆之間、所領庄公験、
寺家可清付物未之代入借書請取返物不返取公験之間立本書文返
返物代物不返取公験之間立本書文返
し、新巻文書与於し之後為令違立堂塔
身舞書仍寺家司就甲之後家敷
乙丁者而寺家更寺領之所勘
能和年令所数者件所墓度返物元是
和三年以来度度恩詔頻出

仍所請

永延二年三月廿五日天永元年

永延二年閏五月十七日　宮内史

大乗院十禪師基質疑文　延喜式卷一紙背　公爵九條道實氏所藏

原寸　縱〇・二七五米

謹問

永延二年閏五月十七日

宮内史生□（花押）

今甲為国司弁済公事之間、所領庄公験為質、度々
寺家可済財物未済代入借書請取返抄、度々不弁
返抄代物不返取公験之間、去年春文進所
々新券文、責与於山之後、為令違乱庄園礼
身摂者仍寺家司就甲方、後家親族之日所
乙丁者而寺家更寄傳領之所、勘事依無理
能和弁今所数者件所券度返抄代物元是官物請
和三年少来度度恩詔頻出
仍載仍請明判
永延二年三月廿五日大乗院十禪師

國司死亡後ノ質物辨償ニ就キテノ質義

永延二年閏五月十七日　　宮内史生□（花押）

謹問

假令、甲爲國司、辨濟公事之間、以所領庄公驗爲質、度行□寺家、可濟封物米之代、入借書、請取返抄、爰甲不辨彼返抄代物、不返取公驗之間、立本券文、追可度行□約束、以新券文、賣與於乙之後、爲令建立堂場、永何□□□甲其身卒去、仍寺家司就甲之後家、勘徵之日、可辨□□狀、約諾已了者、而寺家司更尋傳領之丙勘徵、事依無理□（不カ）能和辨、今所疑者、件所募受返抄代物、元是官物、請借返□和三年以來、度度恩詔頻出赦哉、仍請明判、謹□（問）、

永延二年三月廿五日　　大乘院十禪師（花押）

走湯山縁起

實資家歌合

學藝、

〔走湯山縁起〕（奥書）　五

永延二年戊子三月日、沙門延尋（好カ）記、

〔男女房歌合〕　永延二年（實資）七月廿七日

本云、同朝臣家歌合、一條院御時也、おとこ女の歌合は天德の例によりてなり、

永延二年雜載

二式卷一紙背
九條道實氏所藏
原寸　縱〇・二七五

題　暮花色　曉蟲聲　松下聞風　水邊待月

歌人　左　小持君　爲親朝臣（藤原）　茂賢　行願

右　加賀守友範　侍從　衞門君　右近君（藤原季縄女）

男女房のうたよみ、おの〳〵はけみて、題をいたしてよめる、

暮花色

左　露おきてあすもみるべき色なれとくれゆくをしき本の色かな（けふもあるかなし）　小持君

右（勝）　ほのかなるをかはわかねと花の色のきりたちまさる秋の夕暮　加賀守友範

曉蟲聲

左　爲親

秋の夜のあか月かけてなくむしは草の宿りもつゆけかりけり　侍從

右（勝）　聲絶えすあけゆく空になく蟲は秋のねさめのかすをしるらん

松下聞（○夫木和歌抄秋ニ作ル、風）

左　松の葉に秋ふく風のおときけはくもらぬあめに袖そぬれける（○夫木和歌抄、第四句ノ袖ヲ、袖のニ作ル、）　茂賢（○夫木和歌抄、藤原茂次ニ作ル、）

右（勝）　昔よりならふともなきことのねをひけはたかはぬ松のうは風　衞門君

水邊待月

左　おとは山流れていつる水の面にかくれてみえぬ月をしそまつ　行願

右　浪のうへにはなの色をはをかなめて水は曇らぬ月をこそまて　右近君

〔夫木和歌抄〕十七　秋部　永延二年七月七日實資朝臣家歌合、

鈴蟲　よみ人しらす

七夕にかしやしつらんすゝむしの雲井はるかに音そきこゆなる

疾病、生死、

〔中原系圖〕

致時

貞清　穀倉院別當、博士、主殿頭、少外記、正五位下、永延二年正月卒、中原貞清卒ス

賴成　淡路守、少外記、

重經　直講、少外記、從五位下、

資經　淡路守、博士、少外記、從五位下、

〔松尾社家系圖〕

忠雄

峯政　月讀宮長官、從五位下、永延二年三月六日卒、七十二、卜部峰政卒ス

峰守

〔小右記〕七月四日、戊子、今晩、小兒從義理宅還小野宮、今夜、晴明朝臣爲屋行（安倍）（小兒カ）鬼氣祭、未時許、向小野宮見小兒、又沐浴小兒、日者頗惱氣、仍自今夜、以濟救令打火爐芥子、

八月卅日、甲申、〇略中典藥頭滋秀眞人妻死去、差使合予（令帋カ）問、予（帋カ）爲信、

十月廿五日、戊寅、〇略中此四五日惱煩腰病、招證空師令加持、昨日堀晴（晴カ）空師令加持、入夜參內、候宿、

典藥頭滋秀眞人ノ妻死ス

藤原實資ノ小兒病ム

實資病ム

處分、賣買、

〔關戸守彥氏所藏文書〕〇張尾

勸修寺別當律師房充行家地事

合參佰步　在五條五里一坪之內、

右家地、依可領掌之由愁申、仍（ヤ）相副本公驗等、永充行慶泉大法師既畢、如件、

永延貳年三月十日

行事大法師（花押）

勸修寺別當家地ヲ僧慶泉ニ與フ

謹辭　賣買家地立券文事

合參佰步　在大和國添上郡京南五條五里一坪之內、

四至　限東海印寺座主御地、限南公田、限西公田井畔、限北僧敬湛地、

慶泉家地及ビ便宜田ヲ賣却ス

便宜田

五條四里卅六坪八段　五里一坪三百步　二坪一段

右家地勸修寺上綱御領地也、而依愁申、以今年三月十日充給慶泉已了、爰依有要用、充本直稻貳佰束、永賣進東大寺法春五師既畢、仍勒賣買兩人幷保證署名、立券文如件、

永延貳年四月十九日

賣人大法師「慶泉」（自署下同ジ）

買人大法師「法春」

保證刀禰

紀「式連」

大鳥

紀

縣

神服

散位高岡「滋行」

藤原「有正」

直稻

買人

保證

郡判

惣行事正六位上郡

〔根岸文書〕一

謹解　申賣買家地立券文事

合壹百貳拾步　四至（限西北公田、限南畔、限東縣犬養眞葛地、）

但貳段賣度許曾部安延已了、

在葛下郡廿四條三里廿五坪、（略）○中

天曆十一年八月十五日　專賣人置始（花押）（略）○中

件家地、源弟君、副便物代公驗、充行當地畢、

前下野掾藤原「基連」（自署）

件家地、桑原藤子、副便物代公驗、度行當地畢、

永延二年十一月廿九日　源おとゝ

前下野掾藤原基連等家地ヲ讓與ス

御物忌
後取
内辨爲光
立樂

永祚元年己丑

正月小盡 癸未朔

一日、癸未、小朝拜、節會、御藥ヲ供ス、

〔日本紀略〕一條院　正月一日、癸未、小朝拜、節會、

〔小右記〕正月一日、○此間闕文アリ、大相府甦候、○此間闕文アリ、攝政家子及諸大夫拜禮卽參內○此間闕文アリ、等事、今日右大臣及諸卿被參第、依明日明後日御物忌云々、依攝政命、先參入內、所令催行也、未終御參、左中將正清後取、而依遲參景春朝臣奉仕也、宮內輔不參、仍以侍醫爲代官、供御藥了、攝政率右大臣以下被參入、申終有小朝拜、攝政不著、右大臣以下如例、事酉、○此間闕文アリ、所司○此間闕文アリ、右方□有○此間闕文アリ、著兩三度被依同○此間闕文アリ、若可難堪、不可被參、奉度々仰、稱所勞退出、爲奇者、右府奉仕內辨、○中略節會事如恆、雅樂寮奏立樂、了之後天皇還御、時亥、

五日、丁亥、敍位、

〔公卿補任〕六正曆三年　參議正四位下平惟仲、四十九、同三年正月七日敍從四位下、辨勞、

永祚元年正月一日　五日

冷泉院御給

〔公卿補任〕六 正暦五年　非參議從三位藤隆家　永延三正七從五下、冷泉院御給、同日昇殿、

昌子內親王給

〔公卿補任〕六 寛弘五年　參議正四位下藤實成、三十四、同(永延)三正七從五上、一品ー(昌)子內親王給、

〔外記補任〕二

大外記從五位上大中臣朝明　正月七日敍從上、大外記勞、明法博士兼帶大外記始之外從五位下國雅重　正月敍外從五位下、

〔中古歌仙三十六人傳〕大江匡衡　永祚元年正月七日敍從五位上、

〔日本紀略〕一院　正月五日、丁亥、敍位議、

〔小右記〕正月一日、癸未、○中略　右府(爲光)奉仕內辨、但敍位議事、被仰左府(雅信)、來六日、五日、丁亥、從攝政早朝有召、卽馳參、被仰云、明日御衰日、今日可有敍位儀者、可撰人々申文者、左右大臣被參、敍位在別、○中略　敍位議、亥時了、

申文ヲ撰フ

執筆

〔敍位除目執筆抄〕永祚元年正月五日敍位、　執筆、左大臣雅信、

六日、戊子、御惱ニ依リテ、御占ヲ行フ、

〔小右記〕正月六日、戊子、早朝參攝政御直廬、被命云、主上頗有惱氣、就□□□

御惱ノ時勝算梅子ヲ獻ズ

□晴(安倍)明令奉仕御占、御膳○以下闕ク、

〔參考〕

〔寺門傳記補錄〕十三 長吏高僧略傳上　權僧正勝算修學院、千光院、十五世

勝算、永延中、天皇不豫、追日危篤甚劇、廢供御、好梅子、時維嚴冬、天下索而不得、馳勅使修學院告算、庭有梅樹、雪夜對樹持念、翌朝除雪見之、一枝青梅數十子纍々、勅使折歸獻宮、天皇嘗一兩顆、病立痊焉、勅曰、古孟宗者、雪中爲母拔紫笋、今勝算者、鉛粉爲朕折青梅、

七日、己丑、白馬節會、是日、十五箇寺ニ於テ、諷誦ヲ修ス、

〔日本紀略〕一院　正月七日、己丑、節會、

〔小右記〕正月七日、己丑、依帝可出御南殿、修御諷誦於十五个寺、不出御前、以晴(安倍)明令奉仕御禊、申刻出御、攝政被候御後、右(爲光)大臣內辨、公卿參□(入カ)、後俄雨降、仍用雨儀、妓女於南廂舞了、主殿女官執脂燭、女樂草墓立南簀子、敷御酒具等、立御屏風東、未供之間、還御本殿、依御心神不常、攝政□侍候御帳後、如御□侍、可取白馬奏、

御禊ヲ行ハセラル

出御

雨儀

舞御心神常ナラズ

八日、庚寅、御齋會、

内論義
公卿泥醉
僧侶參内威儀師如意ヲ進ム
公卿等御前ニテ喧嘩僧ニ被物ヲ給フ

〔日本紀略〕一條院　正月八日、庚寅、御齋會始、
十四日、丙申、同竟、

〔小右記〕正月十四日、丙申、參内、今日論義、其儀如恆、公卿□八省、秉燭被歸參、著右仗、三獻後、藏人被召、出陣喚上卿、良久不參、攝政殿再三被催、公卿泥醉不聞、此間僧等參入、良久徘徊射場、攝政被命云、公卿雖不參上、出居已候、僧侶可參内之由被仰也、仍僧侶參上校書殿、如意年來不置、依燒亡、仍威儀師進如意、藏人致(愈)方取之置、論者前南草塾云々、源大納言、重信、源中納言、保光、權中納言、道長、參議、安親、參上、其後良久之、左大將、朝光、權大納言、道隆、右大將、濟時、權中納言、道兼、左衛門督、重光、參議、時忠、右衛門督、伊陟、侍從宰相、濟信、等參上、有酒氣、於御前喧嘩、攝政(摂政)、大閤(關白)氣色不快、公卿執祿、被僧如恆、亥時事了、或公卿云、藏人頭、五位藏人等、兩人執祿、進殿上戶前、授公卿云々、上蔭大臣候時、依禮敬、藏人頭便執祿傳奉者也、而有此難、可奇々々、是右大將所被諫(陳カ)云々、若淵醉内所被難歟、不可鑒誡云々、

内御物忌、是日、仁壽殿及ビ職曹司ニ於テ、不動息災法ヲ修ス、

〔小右記〕正月八日、庚寅、○此間闕アリ、即歸、從内有召、○此間闕文アリ、仍所召也、可令奉

御禊
律師覺慶
前僧都覺忍
百箇日ヲ限ル
幼主ノ御時宿老ノ致仕然ルベカラズ上表ヲ返却ス
百部仁王般若經ヲ書寫セシメ大般若經轉讀セシメラル

仕御祈御禊等者、今明御物忌、仍以宮主、於御厨子所内膳司、令奉仕御禊、從今日律師覺慶率十五口伴僧、於仁壽殿奉仕不動息災法、前僧都覺忍率十口僧、於式、更奉仕不動息災法、各限百箇日、第十番十箇、○箇ノ下脫アラン、

左大臣雅信、致仕ヲ請フ、聽サズ、

〔小右記〕正月九日、辛卯、從内退出、依召參攝政殿、依御物忌、於□令申參入之由、被傳仰云、左大臣昨日上致仕表、今年七十歟、若可、○此間闕文アリ、依勅答之有無未勘得、還使右近少將宣(憲)方、至表令留、若可有勅答者、可仰公卿、若可無勅答者、差近衛次將可返也、其詞幼主之御時、宿老人致仕事、不可然、仍所返也者、前例令傳覽、依應和二年例、可表返(返表カ)者、即還參内、使右近少將相(藤原)尹、返表於左大臣第、得表先是給□文室如□令留案於彼所、了余罷出、

十一日、癸巳、圓融法皇、藤原實資ヲ石清水八幡宮ニ遣シテ、天皇ノ御爲ニ祈ラシメ給フ、

〔小右記〕正月十一日、癸巳、拂曉罷出、沐浴、辰時許、參石清水、院奉爲公家、有種々御祈、行神寶音樂東遊、院御志、書寫百部仁王般若經、又轉讀大般若經、於雅樂允望忠宅、著朝衣、參□御在所、先讀申祭文、次奉日御幣、了即歸、酉時許歸宅、

十二日、甲午、〇中略晩□(景)參院奏聞昨之御祈事、

〇コノ後、法皇石清水八幡宮ニ御幸ノコト、本月二十一日ノ條ニ、重ネテ祈ラシメ給フコト、五月二十六日ノ條ニ、天皇ノ御爲ニ、賀茂社ニ御祈請ノコト、四月二十二日ノ條ニ、尊勝法、泰山府君祭ヲ行ハシメ給フコト、二月十一日ノ條ニ見ユ、

十五日、丁酉、藏人、昇殿、檢非違使ヲ定ム、

圓融法皇藏人ヲ推擧セラル

〔小右記〕正月八日、庚寅、〇中略晩景依喚參院、被仰侍中事等、

十日、壬辰、參攝政殿、申承除目案內及藏人廷尉等事、來十五日許可定者、

十五日、丁酉、於攝政直廬召余、被定藏人昇殿檢非違使、藏人藤原知光、圓融院被擧奏也、昇殿、左兵衛佐登朝(明カ)、左大將(朝光)且(息カ)、檢非違使左衛門權少尉藤原通賴、文章生右衛門少尉藤原口風、無(脩カ)無所據、若是追捕歟、檢非違使宣旨仰權大納言、道隆、率任人等可停任之由、聞加仰之、攝政命云、依仰以知光補藏人之由、以余被奏院、即參院奏聞、聞食〇此間闕文アリ大相國御讀經發願事、了參攝政殿、申院御返事、

攝政兼家、左大臣雅信等ト會宴ス、

〔小右記〕正月十五日、丁酉、〇中略參攝政殿、〇中略左府晩景可被來之由云云、參內、〇中略歸參攝政殿、先是左府被參攝政殿、左衛(重信)門督、春宮(公季)權大夫、左兵衛(時中)督、修理(權カ)大夫、左京(泰清)大夫等候之、有酒饌儲、殿上侍臣五六輩候矣、有給物興、左府以下侍從以上皆有差、左府如(安カ)裝、三位侍從一疋、餘綾下疋、左府又有引出物、

源重信等參會

引出物

太政大臣賴忠、御讀經ヲ行フ、

〔小右記〕正月十五日、丁酉、〇中略大相國御讀經發願事、了參攝政殿、

十六日、戊戌、踏歌節會、

女踏歌

〔日本紀略〕一院　正月十六日、戊戌、女踏歌、

〔小右記〕正月十六日、戊戌、參內、攝政依御物忌、不被參內、仍主上無出御、南殿懸御簾如常、御帳東間北行立簾、懸御簾、又其西六間母屋、同懸大宋御屏風、制、東溝御藏、但不供御膳、黃昏右大臣(爲光)參入、內辨、秉燭後引陣云々、內辨宣命、見參、及內敎坊奏、依無別賞、內辨執奏、等挿書杖、進御簾下、東溝北簾南端、付內侍、更不經叡覽直返給、依攝政命、余所行也、子時事、(殷アラン)

出御ナシ

內辨爲光

內敎坊奏

十七日、己亥、射禮、

射遺

〔日本紀略〕一院　正月十七日、己亥、射禮、

十八日、庚子、射遺、

圓融院ノ判官代、藏人、昇殿ヲ定ム、

〔小右記〕正月十七日、己亥、早朝罷出、依召參攝政殿、次參大相府、被奏圓融寺藏人事、行資、參院、奏聞無許容、廼參殿申其由、晩頭歸蓽、入夜從院有喚、申障不參入、

十八日、庚子、○中略次參院、被仰云、昨日左大臣參入、定判官代藏人昇殿、判官代藤□如（原カ）□、藏人右衛門尉親□、昇殿藤原公經云々、依別當不候、所令召者、

十八日、庚子、内御物忌、

〔小右記〕正月十二日、甲午、依喚參攝政殿、○中略十八九日御物忌、中○略廿三日略○中又御物忌、

二十日、壬寅、賭弓、

〔小右記〕正月十二日、甲午、依喚參攝政殿、來廿五日有賭弓者、十八九日御物忌、廿日攝政大饗、（詮子）太后御忌日、有勝負、可無便宜、又廿二日左府大饗、物忌、廿三日右府大饗、又御物忌、廿四日御衰日、仍廿五日可被行者、即承仰罷出、

十五日、丁酉、○中略參攝政殿、○中略命云、○中略參内令催仰兵部射手等之後可歸參者、即參内、遣殿上人于兵部省、八人、歸參攝政殿、

十八日、庚子、○中略改廿五日賭弓、以廿日可被行者、早參内、誡仰四衛府所司等、可仰藤（國光）中納言、依奉延引之上卿也、

日時ヲ改ム

出御

四衛ノ奏

還御

廿日、壬寅、依召參内、攝政命云、今日賭弓、早可出□可催行者、左右大將（朝光）（濟時）昨日出觸穢假文、不參入、仍更不召射場殿、御裝束如恆、未三點御出、右大臣（爲光）小選參入之後、召公卿、出居右少將（藤原）公卿著座、主上入御々簾中、攝政被候、右大臣執左右近、左右兵衛奏、就簾下付内侍、還著座、内侍以奏、招大臣、又進給奏、經御前進簾下、自餘如例、御厨子所御菓物於簾中供之、攝政前辨備衝重、一度右勝、小數四二度三（脫アラン）度右勝、負一、被止了、右近奏聞（勢カ）蘇利、子終還御、右兵衛無射手尉、仍令奏其由、左兵衛又無尉、而不奏者歟、

左近引射手、而不觸可來由於祈（勢カ）（太カ）大違例事也、又不觸射手事、官人等相定令射、令（行カ）射奇怪事也、

廿一日、癸卯、早朝從内罷出、未時許參攝政殿、被命云、昨日右大臣給射手奏之儀似失誤、内侍以奏云、氣色於右大臣、々々權開射場北邊御屏風欲罷、仍高敎示者、又不問的付著座之後、令問的付如何者、黄昏罷入、夜參内候宿、

二十一日、癸卯、圓融法皇、石清水八幡宮ニ御幸シ給フ、

〔小右記〕正月十二日、甲午、○中略參院○中略被仰云、來廿一日欲參石清水、一尺鏡三面可奉之、可申（詮子）皇太后者、參内、以女房令啓御鏡事、依今明堅御物忌、不能

鏡三面ヲ奉ラル

皇太后御物忌

天皇慎ミ給フベシトノ御夢告ニ依ル

御諷誦物

令啓者、

十八日、庚子、〇中略参院〇中略仰云、公家今春可慎給由、有夢想告云々、仍爲祈其由、密々参石清水、此事可觸攝政者、参攝政殿、申院御消息、被奏承由、但御諷誦物、若可奉入者、可令運石清水之由、可加奏者、

十九日、辛丑、從曉更甚雨、早朝從内参院、奏御諷誦事、仰云、太佳事也者、参攝政殿、申案内罷出、

廿一日、癸卯、〇略中圓融寺法皇、今日令参石清水給、

〇法皇、藤原實資ヲ石清水ニ遣シテ、公家ノ御爲ニ祈ラシメ給フコト、

本月十一日ノ條ニ見ユ、

右大臣以下會ス

二十二日、甲辰、攝政兼家、二條第ニ於テ、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕一條院　正月廿二日、甲辰、攝政於二條第大饗、右大臣以下會、

〔小右記〕正月十二日、甲午、依喚参攝政殿、略〇中廿日攝政大饗、略〇中又廿二日左府大饗、略〇下

十八日、庚子、早朝從攝政殿有召、卽参入、〇略中被命云、〇略中來廿五日吉日、〇略中

仍彼日可行家大饗、

廿二日、甲辰、早旦罷出、今日攝政殿大饗、待尊者之間、於便所有公卿儲、人出給、

蘇甘栗使参入

牽出物

京外大饗ノ例

尊者ナシ

未終掌客使還参、左府不被参、大饗歟、右大臣以下被参、著座了後、蘇甘栗使藏人大舍人縣爲相参入、可謂遲引、權大納言相逢云々、三獻後、民部卿文範入自中門、進庭中、拜了著座、若是追致仕例歟、見者拭涙而已、戌時許事了、尊者牽出物馬一匹、自餘云々、於京極院有此事、京外大饗之例、未見事也、可尋、

〔榮華物語〕三さま〳〵のよろこひを、いみしう造らせ給て、〇略中よるをひるにいそかせ給ひし二條院大殿、十五の宮のすませ給ひし、いそかせ給明年正月に大饗あるへうおほしの給はせて、

二十三日、乙巳、右大臣爲光、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕一條院　正月廿三日、乙巳、右大臣家大饗、

〔小右記〕正月十二日、甲午、依喚参攝政殿、略〇中廿三日右府大饗、略〇下

廿三日、乙巳、参右大臣家大饗、申時許引列、無尊者、執三獻、盃了秉燭之間罷出、

民部卿又被参、三獻了、從腋参著、無拜、

二十五日、丁未、天台座主尋禪ヲシテ、禁中ニ於テ、熾盛光法ヲ修セシム、

〔小右記〕正月十八日、庚子、早朝從攝政殿有召、卽参入、〇略中被命云、奉爲公家、欲令奉仕熾盛光法、來廿五日吉日、從彼日、於禁中、以天台座主可行之由云々、

二十六日、戊申、内御物忌、

〔小右記〕正月廿六日、戊申、今明内御物忌、

二月大壬子朔盡

二日、癸丑、縣召除目、

〔公卿補任〕六　參議正四位下藤誠信、廿六、侍從、春宮權亮、正月廿九紀伊權守、

〔公卿補任〕六　參議正四位下藤懷忠、五十五、同三正四近江權守、（永延）（廿九カ）

非參議從三位藤遠度　正月廿九播磨權守、

〔公卿補任〕六　正暦三年　參議正四位下平惟仲、四十九、同月廿九日從四位上、治國、（永祚元年正月）

勢多橋造替ノ賞

〇辨官至要抄同ジ、

〔公卿補任〕六　長保三年　非參議從三位平親信、五十七、同三正廿八從四上、造勢田橋賞、（永延）

〔外記補任〕二

大外記從五位上大中臣朝明　正月任長門守、

致時任大外記兼大博士例　從五位下中原致時　正月任、兼大博士、如元、〇二中歷同ジ、

多治雅輔　正月轉任、

少外記大春日仲明　正月轉任、

權少外記小槻善言、四十三、元文章生、正月見任、

〔中古歌仙三十六人傳〕藤原道信　三年正月廿九日兼近江介、（永延）

〔日本紀略〕一條院　正月廿七日、己酉、於攝政直廬淑景舍、除目始、

廿九日、辛亥、同、

廿八日、庚戌、同、

二月一日、壬子、同訖、

〔小右記〕正月五日、丁亥、○中略、叙位議ノコトニカ、正月五日ノ條ニ收ム、受領功課、無可定申之人、

仍無其定、

十八日、庚子、○略中　參宿大內、受領功課、公卿於陣定申、民部卿（藤原文範）殊有宣旨、被召預、

廿三日、乙巳、○略中　有院召、卽參入、仰云、當年院受領可給判官代重文、國奉已爲上薦、而無事勤之由、重文居當職、兼致事勤、以此由可示攝政者、又有御書、歸早（之カ）々後、束帶參攝政殿、奉御書、次申御消息云、被獻御報、又被申奉御之由、廼歸參奏聞、

廿五日、丁未、今日依召參院、下給大學助有家申式部申文、幷左衞門志多米國

直廬淑景舍ニテ行フ

受領ノ功課ヲ定ム

院受領

圓融法皇御書ヲ兼ネ家ニ賜フ

圓融法皇大學助有家等ノ申

文ヲ下シ給フ院分

申文ヲ撰ブ

式部省造作ノ功

崇親院及賀茂社ヲ造作

神館造作ノ功

執筆道長

定申記（外記）外申文等、被遣攝政許、又院分加賀事、可無相違之由有仰事、卽申攝政、被奏云、加賀事、前日奉仰、又兩人事諸卿令議申者、依日暮不能歸參、

廿六日、戊申、○略中　於攝政御直廬、撰定人々申文、巳時許參院、奏攝政被申、頌（脫アラン）之罷出、

廿七日、己酉、遲明參內、於攝政御宿所、撰人々申文、並付短尺等、未時許除目議始之、左大臣（雅信）稱故障、不被參入、右大臣（藤原道長）以下被候、右衞門督（藤原公光）執筆、

廿八日、庚戌、早朝參內、於攝政御直廬、撰人々申文、從院有喚、卽參入、下給紀實材明法故人幷自解等、被遣攝政許也、又式部外記等事、同有仰事、卽歸參內、未時許除目始、今夜候宿、子時許、公卿退出、

廿九日、辛亥、終日雨降、申時許除目議始、兩丞相以仰（行カ）下被候、

二月一日、壬子、辰時許除目議了、乘方朝臣任越前守、是造作式部省功、又依大納言重信（源）卿懇奏云々、貞順朝臣任丹波、（從上）依造崇親院及賀茂上下御社神館等功云々、前明經得業生藤原尙方科試後六年、而漏除目、仍申攝政、追被任彈正忠、仰清書上卿道兼（藤原）卿了、

〔敍位除目執筆抄〕永祚元年正月廿七日、縣召、二月二日入眼、執筆、或右衞門督源忠清中納言右

永祚元年二月四日　五日

衛門督道（長）ノ御堂殿、小右記云、中納言右衛門督道（長）ノ、直廬儀除目之時、令候執筆、

〔魚魯愚別錄〕二宿廬除目中納言執筆例　綿書初夜、

一條院永祚元年、攝政兼家、宿所除目、中納言道長執筆、宿所除目云々、

○外記ノ補任、便宜合敍ス、

四日、乙卯、祈年祭、

〔日本紀略〕一院一條　二月四日、乙卯、祈年祭、

大原野祭、

〔小右記〕二月四日、乙卯、辰時許從權中納言御許歸宅、依例奉大原野幣、近衛府使右近將監興尉（時カ）、

五日、丙辰、尾張郡司百姓等、解狀ヲ上リテ、守藤原元命ノ非法ヲ訴フ、

〔日本紀略〕一院一條　二月五日、丙辰、○中略又定尾張國百姓愁申守藤原元命可被替他人之由、

〔百練抄〕四一條天皇　二月六日、諸卿定申尾張國百姓等訴申守藤原元命非法事、

〔尾張國郡司百姓等解〕

三十一箇條ノ愁狀

例擧ノ外ニ正稅ノ息利ヲ加ス徵

尾張國郡司百姓等解、申請官裁事

請被裁斷當國守藤原朝臣元命、三箇年內、責取非法官物、幷濫行橫法卅一箇條愁狀

一請被裁斷、例擧（之イ）外、三箇年內、收納加徵正稅卅三萬二百（千イ）卌（卅イ）八束、息利十二萬□□（九十三イ）百七十四束四把一分事

右正稅本穎、式數卌七萬二千四百束、除減省之遺、定擧廿四萬六千七百十（イナシ）束、明錄稅帳、是則一朝之輔弼、百姓之依怙也、然而則凋弊之民、負正稅而不耕田疇、富勢之竈（竈イ）、領能田以不請正稅、仍爲存公平、同以息利七萬三千八百六十三束、率於國內力田之間、當任守元命朝臣、三箇年所納、既以繁多也、輙以不可勝計、所以者何（何カ）、窮民之身、纔雖致究進之勤、或號見納、或稱未進、暗虜掠數多之財物、依此呵責、人民逃散、累彼騷動、土浪不靜、加之郎從之徒、如雲散滿於部內、屠膾之類、如蜂移住於府邊、此等寔雖隔山川之境程、爲思京洛之故鄉、猶貪當國之土產、因之郡司迷心神、百姓無爲方、更忘萬民之撫育、只存一身之利潤、經愁如此之間、專無判斷之心、彼憚權公之威、卷舌呑音敢不言、終無據於容身、將流（流カ）穴於他國、是以吏富國貧、物盡民失、夭（妖カ）蘖之起、莫不由

永祚元年二月五日

於斯、望請裁斷、停止件元命朝臣、被拜任良吏、將留人民之浮跡矣、

二

一　請被任官符旨裁斷(下イ)、不別租稅地子田、偏准租稅田加徵官物事

右兩種田、須任省符之旨、勘徵之、而爲横法、准租稅田加徵者、爲田堵百姓等、莫不愁痛、仍吏富民貧、薰蕕異畋、政濁淚澄、涇渭堺流、望請被裁定、以將任例所輸矣、

三

一　請被裁斷、官法外任意、加徵租穀段別三斗六升事

右租穀官法有限、是則代々之吏、雖愁陳於例損之由、猶乍本數勘納、或國宰者、徵納一斗五升、或國吏者、徵下二斗以下、而當任守元命朝臣、加徵三斗六升、更非承前之例、抑爲政之道、猶若煮魚、優民之心、豈盡馴鴆、而專絕東作之業、更成北民之計、專城(守ヵ)之吏、焉以可然哉、就中州縣之牧宰、偏有勸農之勵、若勸東澤之間、催南畝之日、遊手嬾農業、懲以劉寬之鞭、肆力誇業、賞以王丹之酒、而每年至四五兩月農時、令入部雜使等、其勘責云、先給例交易雜物直、稻穀早可春進者、爰郡司百姓、忽失爲方、難堪辨濟、仍春運濡種、辨濟於官庫、其間農夫抛鋤、嬾耕作之事、蠶婦忘桑、倦墮絲之業、豈非百姓之歎、還闕貢朝之備、望請官裁、將停止元命朝臣、被拜任良吏矣、

正稻不率ヲ率ヲ稅法ノ徵ノ外ノ稻ニス利

例數官法ノ稅准ニ地子ノ租稅外ニ田ヲ加ノ徵ス

四

一　請被裁斷、守元命朝臣、正稅利稻外、率徵無由稻事

右率稻、正稅利稻之外、段別二束八把、加徵國內、通計其積、尤多、抑件率稻者、不經臨時之公用、只充私謀之用途、或入滿於交易、或春運於京宅、如此之間、致人民之費、更不見官納之由、然則昨聞他州之愁、今當我上(上カ)之責、倩見氣色、國內之荒蕪、人民之侘傺、莫過於斯、望請官裁、被召糺、且省非巡加徵之煩、且知朝家憲法之貴矣、

五

一　請被裁斷、例數官(率分脫カ)法外、加徵段別租稅地子准穎十三束事

右謹案物情、例數率分官法有限、而代々國宰、正稅息利租穀率稻地子等、所徵或八九束、或十束也、爰當任守元命朝臣所徵、一年段別十三束二把也、卽通計一國、其積及百萬束、方今正稅官物、與私用相竝、百分之一也、抑件率分加徵物、或令春運米色、或宛負交易絹布絲綿漆油等、宛直、絹者疋別四五十束、手作布八束以上、信濃布麻布五六束以下、絲綿油漆苧等直不幾、其隨(既アラシ)卽徵使面々、所責取土毛供給料物等、過於本物、有於五六倍、仍有堪之輩者、乍歎辨濟、不堪之民者、削跡逃亡、亦進納於國庫之日、目代等號副物、疋別絹二尺二寸、卽所補下絹直、上品四十束以下、三十束以上、至于中下品者、尤勘所

返負、減直既以巨多也、是唯非一年、三箇年所爲如此、方今無郡司者、國宰政有誰、無民烟者、郡司何奉公、仍拾離散之烟、准留跡之烟、僅萬之一也、凡一國之衰弊、百姓之逃散、職而由之、望請官裁、任舊例被裁下、以將慰愁吟之意矣、

調絹ノ直減ジテ收納スル

一六 請被裁斷、所進調絹減直幷精好生絲事

精好ノ生絲ヲ私用ニ宛テ他國ノ蠶絲ヲ買進スル

右兩種貢進官物定數、具錄官帳、但疋別所當料田、先例二町四段、代米四石八斗也、然而絹質所進之日、所定納直、疋別一町一段也、亦至于精好之生絲者、責取當國之美絲、織私用之綾羅、買擧他國之蠶絲、備貢官之例進、抑蠶養之業、進退更不任心、或國吏令得蠶養、而不登年穀、或國宰令登年穀、而以不宜蠶養、而當任守元命朝臣著任以降、蠶養業不可也、是只絹減直、絲精好所致歟、專城之吏、忠節已空、分優之職、掌政永絕、所謂傾國之讎、害人蠹、豈過於斯、望請蒙裁糺、被召問其旨、兼又被改任良吏矣、

交易シテ絹等號ノ雜物ヲ取ルヲ誣ヒ

一七 請被裁斷、號交易、誣取絹手作布信濃布麻布漆油苧茜綿等事

右交易雜物等、於絹者、納官年料有限、而國內所加徵、漸及數千疋、卽始自五月中旬、以九月之內、令究進、爰所取絹直四五十束、手作布直八束已上、信濃布麻布直五六束也、自餘雜物直更不幾、又以減納殘號減直、如本宛結絹布直、加之勘徵之使、引率數多從類、所責取土毛、疋別米一石五六斗、布端別四五斗、自餘雜物、准本物過三四倍也、何況供給裝束費、敢不可勝計、辨濟如是非法物之間、沾却先祖之永財、滅子孫之存命、賣代夫妻之衣裳、失愛子之寒溫、凡依一身之貪利、遂絕百姓之世途、于時天朝人民、顰眉泣歎、部內浪人、歔踵悲愁、既見此由、不足國宰者也、望請被裁斷、以早被免許非法之强責矣、

死亡又ハ逃散セシモノ名ノ有無實ノ古新絹布米穎ノ責ヲ取ルメ

一八 請被裁斷、代々國宰分附新古絹布幷米穎等、自都司百姓烟責取事

右新古物等、寔雖錄載稅帳面、有名無實也、仍代々國宰更無責徵、其由何者、或負名死去、及四五十年、或負名逃散、已數千餘人也、而當任守元命朝臣、以去年三月中旬之比、撰幹了之使、差暴惡之人、令勘責如切如燒、往古舊代所不然也、而自郡司之手號部內負累、皆悉搜取、從人民之烟、稱所由差法、暗以寃凌、亂入一二家之間、致騷十二十所、濟進一兩種之日、取費於二三倍、國土凋弊、職而緣是、爰郡司百姓、雖經愁不安由、於國底彌施梟惡之政、曾無裁報之心、責使還成得水之龍、弱民倍類覆栖之鳥、望請官裁、且被召糺、且扶亡民矣、

每月借絹ト稱シテ諸郡ノ絹

一九 請被裁定、守元命朝臣、三箇年間、每月號借絹、誣取諸郡絹千二百十二疋、幷

使々副取土毛事（チ誣取リ土毛ヲ副ヘ取ル）

右絹等、八箇郡之内、三箇年之間、或號借絹、或稱見交易、所責取也、但件絹、或月一二度、或月二三度、毎月計其數如上件、其直准穎、疋別四十束以下三十束以上、僅有判定之返抄、三分一也、然而其直于今未下行、抑件絹更以難堪、因之買求於隣國之間、直米上品者六石以下、中下品五石以上、乍知其弊、損推而所減納也、進納之日、不放返抄、立用之時、還致覆勘、加之責使（敢イ）多連日、勘納（入イ）不隔月、面々色々、所取土毛、過絹直、故何者、徵一疋之處、重取二疋、何況供給裝束之費乎、更各爲蒙褒賞之譽、互好非法之責、凡破郡破國之謀、刼民刼物之機、尤有於斯、望請蒙裁許、早被召替、猶被拜（敢イ）任良吏矣、

十一　請被裁恤、毎年不下行物實立用官帳、在路救民三箇年料籾百五十石事（在路救民用ノ穀ヲ下行セズ）

右謹案物情、爲人之父者、不明父子之義、以教其子、則子不知爲子之道、以事其父、爲國之吏者、不竭國吏之職、以治其國、則國不知爲國之理、以不肯其吏、所謂上致敬則下不慢、上好讓則下不亂、上之化下、譬如大風之靡小枝、是以公家爲在路救民、故配置租穀、所恩救給也、仍流宍（穴カ）之民、跨跰之輩、不招而如子來、不呼而如鳩聚、來則如飢魚覓餌、聚則不異疲馬立攘（擬イ）、然而當任守元命朝臣、偏思京宅之貯、于今未下其料穀、忝稟國宰之名、何奪飢類之粮、是以鰥寡孤獨、半死半生、蓬叟孀嫗、若存若亡、望請裁恤、將令知慳固鄙悋之甚矣、

十二　請被裁斷、不宛行諸驛傳食料、并驛子口分田百五十六町直米事（諸驛傳食料及ビ驛子口分田ノ直米ヲ下行セズ）

右國內雖有重役、莫煩於驛傳之徭、自古至于今、以傳食料者、供給上下之官使、以田直米者、立用驛子之功粮、但一驛料田十二町、傳馬料田十六町、都年料五十二町也、而當任守元命朝臣、三箇年兩收納、曾無下符國土經營、豈莫過於斯、所謂御馬遞（迎イ）送之日、檢牧上下之使、强銜貢御之威、未知役民之弱、或號供給等閑、吹毛覓疵、或稱厨備疎略、銷（鑄イ）皮出血、飽爲得賄賂、貢馬飼秣徘徊、恣令得土產、走馬負鞭馳去、若有國宰之良吏、以不拘惜其傳食料者、何爲郡司百姓、致煩事哉、望請被裁斷、早成驛子之依怙矣、

十二　請被裁斷、不下行三箇年所（符カ）驛家雜用准穎六千七百九十五束事（驛家雜用ノ准穎ヲ下行セズ）

右彼國所在馬三十疋、直穀（籾イ）百五十石、秣籾廿四石、傳馬十五疋內斃損買替直籾五十二石五斗、并一年料籾二百二十六石五斗、惣計三箇年料准穎六千七百九十五束也、是則依式立用稅帳、而當任守元命朝臣、悉私用不宛把分、愁之中之爲愁、莫過於斯、就中使到著之日、費在郡司、經日之煩、不可勝計、

池溝幷ニ救急料稻ヲ宛行ハズ

調絹ノ旬法ノ符ヲ放タヅ縱ニ入メシテ部ニ使ヲ部セシメテ勘徵スメス

適以私馬遞送者、一度之弊、及數疋之駄、部內畜絕失、隣國重求借、恐將來國宰豈積習之哉、○恐將來以下十字、下ノ句ニアルベシ、仍爲人民多有損無益也、唯爲國吏獨無損有益ノ次ニアルベシ、望請被裁斷、以將省愁苦矣、

十三一請被裁斷、不宛行三箇年池溝、幷救急料稻萬二千餘束事

右庶民之業、稼穡爲宗、田疇之道、池溝爲先、而不下束把、只如知不知、仍以郡司之私物、縱堤堰千流之池溝、以百姓之乏貯、僅築固萬河之廣深、今檢案內、池溝料全載稅帳、言上於官庭、偏有用途之名、專無宛物之實、爲妻子之衣食、絕國土之農桑、旱魃之時、可治不治、霖雨之節、可塞不塞、如是之間、農業損害、此則池溝破壞之所致也、望請被裁斷、以早令懲矯餝之政矣、

十四一請被裁斷、不放御調絹旬法符、隔五六日、面々使々放入部內令勘徵事

右御調絹進國例定、自六月上旬、迄九月下旬究辨、是則承前例也、而不放旬法之符、忽入不善之使、始從五月中旬、未儲備經機之間、勘責尤甚、今須任舊例、放符徵之、而爲背官符、貪私利、以非理爲理、加之、入部之使、呵責之間、爲施面目、擅抽人眼到民烟者、自馬不下、不著于座、乍騎馬以郎等從者、破戶放蔀、令搜取雜物等、僅訴理非之人、忽與刑罰、强差賄賂之時、偸致阿容、一國凋廢、

田ノ直代トシテ號シテ麥ヲ徵納スス

雜使ヲ入部セシメテ正物以外ノ雜物ヲ責メ取ルル

百姓殘害、當有於之務、望請停止件元命朝臣、宜被遣修良吏矣、

十五一請被裁斷、守元命朝臣、號田直代、所部上中下徵納麥事

右謹承舊記、撫弱矜貧、分優之職、招逃扶亡、良吏之計也、至如奉公顧私、未無過於斯、牧宰莅境、問風、猶莫尙於分優、而元命朝臣所行不似例人、所以者何、要月居於京宅、不聞人民之訴、農時者著任國妨、所部之業、奪郡司之例作、爲郎從之作、掠百姓之財物、成府邊之饒、加之春莪秋菓、無不召乞、夏麥冬莽、莫不徵取、取集此物、以致運送之煩、量納彼麥、而號任後之食、豈以幾計之政、謂國宰之端哉、望請被蒙天裁、停止此由、將知貪利之甚矣、

十六一請被裁斷、令入部雜使等所責取雜物事

右件使等、每郡巨多也、所責取土毛供給、正物之外已以三倍、或淪貪欲、取而又取、或致威猛、責以猶責、就中檢田之政、以任用國司、須勘注之、而或郡放濫惡之子弟郎等、或郡入不調之有官散位者、爰不論町段步數、不辨條里阡陌、只任己狂心、以一段之見地、注二三段、乃至町滿損害、皆付熟田勘益、是則爲思段米之利、不知公田之損、所勘注也、亦供給調備之外、一日料所徵取黑米白米、或郡二三十石、或郡絹七八十疋、米六七石、思此利潤、可勘一日之鄕、已

舊年用殘ノ稻穀チ京宅ニ春運ス

藏人所ノ召ト號シ例貢ノ外

以經廻數日、計其積、及數千石也、此外亦號國定、一段別所勘納、段米一升二合、以不法斗升、收件米、如此費都在於田堵百姓等、抑勘益出田之使、長官與祿田五六町、因之彌誇無道、更寃部內、又收納使等之子姪郎等、有官散位、爰受配符、入部之日、先所行有樣、已背以往之例、自郡司之手、號鄉分之絹、所取絹一鄉五六疋也、但一郡所在六七鄉、漸(ヤウヤク)計其所得、動以及四五十疋、亦自田堵五六人之手、所責取絹三四疋、又一二疋也、一鄉所注田堵僅四五十人也、(イナシ)各計所輸、數及百疋也、人民之流宍(ルカ)、尤依此事、今檢案內、國宰須加巡察、依恪勤行之者也、而爲宥子姪伴類、不知法條所差、只任貪欲之催、無狀顧狂心、以(之歟ヵ)是謂之元命朝臣(所行ヵ)、爲吏不能者也、望請且被召糺、且慰愁吟之甚心矣、

十七
一請被裁斷、以舊年用殘稻穀、令春運京宅事

右用殘官物、非當時之所納、已舊代分附之者、須以如此之物、下符借貸、宛下農料者也、而猶思生活之便、及五六月之比、令春運郡司百姓等、所春得米、束別三四合(ヤカ)所塡米、全五升法也、然則貧弊之人民、无賴之郡司、抱愁爲枕、費國之吏、煩民之謀、無過於斯、望請裁斷、以將令知貪利之恥矣、

十八
一請被停止、號有藏人所召、例貢進外、加徵漆十餘石事

馬津ニ渡船チ備ヘズ所部ノ小船幷ニ津邊ノ人チ以テ渡サシム

ニ漆チ加徵ス

右漆丹羽郡土產也、卽例貢進藏人所召三四斗也、然而所徵已以巨多也、所辨進、以一升納四五合、以一斗減四五升、辨之塡之間、非無欠失、就中以去年三月十三日、號有未進、放幹了之使、令呵責、不令旋踵、仍有漆民以漆辨、無漆民以絹辨、漆一二斗減納(收ヵ)四五升、絹五六疋補取一二斗之代、一樹所出汁僅夕撮、爰自木所出者已以少、自國所責者甚以多、此間人去薗荒、爲野火燒亡、木倒枝枯、爲國土大損、纔見立則如塗漆之柱、適搔殘則乏絃露之滴、而守元命朝臣不知其枯朽、誣以勘徵、望請裁斷、以將省貢進之外責矣、

十九
一請被裁定(斷ヵ)、依無馬津渡船、以所部小(少ヵ)船、幷津邊人令渡煩事

右從船放死者、其誤誰有、溺水以泥者、其憂何歸、國內之事厄(危ヵ)當任刺吏難遁、因之近則泥途、遠亦津邊、可置渡船等也、就中馬津渡、是海道第一之難處、官使上下之留連處也、爰大勢之船被買渡者、爲郡司百姓何事煩哉、而乍立用於官帳、都無其心、兼不蒙官裁者、若致不意之恐歟、其由何者、編小(少ヵ)船以渡官使之間、擬細梶以漕海路之日、或黑風吹枝、或白浪忽起、任身於鯨鯢之脣、曝骸於鰐鮪之鰓者歟、而當任守元命朝臣、不知其浮沉、何以謂國吏哉、望請官裁、且渡舟航、且越江海矣、

三分以下ノ國司等公廨俸料稻不下行セズ

二十一請被裁定、三分以下品官已上國司等公廨俸料稻不下行事

右任用國司等、或附藝業拜除、或運勞贖以補任、然而不宛月俸料、空過日限、旋踵之計易絕、留身之思難期、衣食之祿、進退惟谷、飢寒之甚、世途如山、咸歸城則把笏尤貴、忽廻國則不預公廨、仍奉公之始、開熙怡之靨、任限之中、彈喟然之爪、天下之恐懼、國內之亡殘、只依此事、望請裁斷將召問其旨、令償數年之公廨、

雜色人ノ食料ヲ下行セズ書生并ニ

二十一請被裁糺、不下行書生并雜色人每日食料事

右書生雜色人等、或儒轍之人、弃私奉公、或繼跡之者、離宅順國、斯中書生、是勾勘之職、凌寒燠以疊老、雜色人、亦遐邇之使、走都鄙以積年、防如此之飢寒、唯懸於酒食、而守元命朝臣、奪留其飲食、以顧己之郎從、能治之化、無始無終、兇濫之政、繼日繼夜、仍部內窮民、悅任限之早往、府邊雜人、愁秩滿之晚來、望請裁定、以將令知皇恩之貴矣、

不法ノ賃京宅ニ以テ米雜物等ヲ運パシム

二十二請被裁斷、以不法賃、令運上京宅白米糯黑米并雜物等事

右當國之例、運賃轆轤之法也、而略下府(符ヵ)石別三斗九升餘、殘六斗一升餘、更不宛下、於是納所目代等、責取米百石者絹二疋、乃至四五百石者隨其程、抑國土之興衰、只有吏情、正政則鴉馴庭、亂政則犬吠門、而當任守元命朝臣之時、國土騷動、人民不靜、加之、擔夫痛踵、泥都鄙之中間、負駄抽肩、塞遼遠之路頭、此外子姪郎從面々、借取所之費、甚以巨多也、雖觸愁不安之由、曾無寬宥之心、動科笞杖之罪、更弃蒲鞭之政、依一身之榮耀、將滅百皇之黎元、以彼謂之、不當於國宰、望請裁斷、早以停止矣、

國ノ井ニ雜色部內人民等ノ夫馬ニ賃ヲ擔ヲ雜物ヲ運送セシメテ

二十三請被裁斷非舊例、國雜色人并部內人民等、差負夫馬、京都朝妻兩所令運送雜物事

右夫馬之用途、國例有限、而或寒月或農時、不隔月無欠旬、鎭以運上、但向京之程、郊亭過於十舍、歸國之間、雲巖阻於千里、是以擔夫爛肩、置悲於朽下、役駄傷蹄、擧痛於鞍上、絕粮屈力之日、本國難歸、枯草凍水之時、途中易斃、于時一國之內、擔夫悉盡、百姓之烟、負駄無遺、所輸賃米、夫者一石二斗、駄者二石餘也、人煩獸斃、不可勝計、望請裁斷、以官物運送(惡ヵ)之外、遁非順夫駄等之責矣、

國分尼寺修理料ヲ下行セズ

二十四請被裁斷、不下行國分尼寺修理料稻萬八千束事

右國分尼寺者、是爲朝家鎭護吏民快樂、所建立也、而爲神火燒亡已畢、佛像成炭(灰ヵ)、示寂滅之理、堂塔遺燼、飛閣維之煙、所修御願已失其便、所供香華亦無

講讀師ノニ衣供幷ニ布施僧尼ノ稻ヲ下行セズ

其儲、爰講師玄好、須國宰相共早建立者也、而國宰件修理料稻拘惜、不下宛、因之雖企草創之計、更無建立之期、自送年月、空積觀念、然間四天護法、時々致示現、十八善神、度々爲夢想、于時守元命朝臣、乍驚纔始造立之事、然而致百姓之煩、無一堂之構、齋會之時、造借屋以修御願講演之程構片庇而爲讀經、仍二十口之僧、尋便企六時之急(怠ヵ)、四部之衆、居私成五輪之勤、如此之間、國土亡弊、人民逃去、災難發、職而依是、望請裁斷、被召問國宰、令下行件修理料稻、造立國分尼寺、奉祈聖朝、興復國土矣、

二十五
一請被裁斷、不下行講讀師衣供、幷僧尼等每年布施稻萬二千餘束事

右禳災招福、懸佛法之威驗、護國利民、緣於賢哲之祈禱、就中講讀師是練行座禪之人、衆僧尼、則彼御願勤修之侶、朝嘗白露、而傳佛法王法之教、暮飡丹霞、以勵眞諦俗諦之觀、初後夜入堂、朝夕禮拜、五輪著地、二羽結花(脫ヵ)、懈怠之僧、見之發心、不信之俗、感之讚歎、然後奉祈帝皇於億歲、誓願黎元於遐年、撰其才行、所被補任也、而當任守元命朝臣、悋惜彼衣供、既成自酒食、因之六年六夏之間、持鉢底空、三寶三衣之資、補綴永絕、昔聞五月之宵、霜雪白露、古傳三年之旱、雲霞赤霏、是尤孀嫗之孤獨所歎也、況僧尼之共歎乎、望請被裁定(斷ヵ)以

廳務無キニ依リ愁訴シ通シ難シ

元命ノ子弟等百姓ヨリ雜物ヲ誣ヒ取ルチ

將令下其料稻矣、

二十六
一請被裁定、守元命朝臣、依無廳務、難通郡司百姓愁事

右國宰之吏、是既分優之職、屢々巡檢部內、常須問風俗、然而守元命朝臣、專營京洛之世途、無優黎元之愁苦、忝有國宰之階、猶不異夷狄、雖敵、爲政之日、廳頭不挺首、致愁之時、館後猶祕身、參集之人、暗聞音罷還、郎從之輩、合眼恪勤、窓內藏形、常稱在京、門外立札、頻號物忌、因之郡司百姓、朝擊簡來、夕懷愁還、通夜終日、積歎爲枕、昔作何罪報、今會此國宰、嗚呼將來吏豈積習之哉、望請被裁斷、以早慰胸意矣、

二十七
一請被裁斷、守元命朝臣子弟郎等、自郡司百姓手、乞取雜物事

右子弟郎等爲體、不異夷狄、猶如犲狼、屠人肉則爲身體之粧、奪民物則運京洛之宅、見目好物、莫不乞取、聞耳珍財、放使誣取、抑元命朝臣息男賴方、其所爲不似例人、召集美酒、一日所飲五六斗也、是只非獨身之飲用、還成諸人之泥醉、朝歌暮儛之輩、是酒狂之上、非尋常之心、不知父之亂國、只任己無道、爲府中之官人、已成恥辱、爲部內之郡司、亦及亂罰、未見古今如此之人、就中件賴方所部郡司百姓等所貯牛馬、稱有要毛、隨宜乞取、隔一二日之後、卽沽付

子頼方國内ニ夫駄チ宛テ其功物ノ絹チ責メ取ル

元命并ニ郎等等誣テ佃チ作ラシム

所部之人、絹一二疋所當馬者、定五六疋、至于牛者、任意乍立野取領、只存市夫之衒心、曾忘大夫之行操、望請裁斷、早被禁制懲後代矣、

二十八

一請被裁斷、守元命朝臣息男頼方國內宛負數匹夫駄、其功物以絹色强責取事

右頼方、須入部領部、借用件夫駄者也、然而號家子、國內諸郡宛負令誣進(徵イ)、爰人民之烟、無有夫駄、僅所遺馬牛、依年々不諾、新古交易絹直責、沽却隣國他境也、雖陳不堪之由、放入不善之使、毆縛蹂躙爲宗、因之爲脫身耻、舊領田地、沽成絹色辨進、卽以一疋補納駄一二疋功物、亦計三箇年之積、雖(雖イ)知其數多、疋責駄使者、疋別號土毛、米一石以下五六斗以上、各從者等、人別隨分乞取、是則父元命朝臣之所遺取物、子頼方掃底搜取、終爲一任之吏、失五家之財、望請裁下、被判制止矣、

二十九

一請被永停止、守元命朝臣并郎等、每郡司百姓、令誣作佃百町料獲稻事

右子弟郎等到著之初、交替之日、不漏一烟、以令預作、佃滿國內、就中息男頼方之佃、或郡四五町、或鄕七八町、惣八箇郡令宛作、佃其數甚多、出擧之日、不宛營料、以令誂佃、收納之期、不聞承諾訟、以徵穎、卽奪所辨之官物、爲所誣之

京ヨリ有官散位ノ不善ノ徒類チ引率シ來ル

獲稻、況乎徵使土毛段別米四五斗、計如此積、已倍正官物、暫經一稔之間、各成久年之貯、是只摧人之骨髓、爲己之永財、隨分之樂、已以足之、無道之甚、歎而有餘、望請裁斷、早被停止矣、

三十

一請被裁斷、守元命朝臣、自京下向、每度引率有官散位從類同不善輩事

五位一人天文權博士惟宗是邦

内舍人二人 橘理信 藤原重規

同孝廉 同朝佐 大原弘春 良峯松林(村イ) 伴兼正

右五位以上諸司官人以下、輙出畿外、禁遏已重、而嗜今日之溫潤、竊屬當任之國吏、各無歸京、而皆有留國、在京之日、揚名於上官、退承(長追イ)之時、(脫アラン)交情於下列(烈イ)、亂入如雲、騷動同風、暗求方術、地搜土產、如此間、人物共失(黃イ)、猶難期將來、就中檢田使等、一郡二人也、其所張行、無可爲喩之物、所以何者、一段之田者、勘注三四(二三イ)段、五六段者、付帳(張イ)七八段、何況四五(十イ)町者、及七八(無イ)(九イ)十餘町也、但一日可勘之田者、三四日巡檢、三四日可注之鄕者、七八日經廻、卽供給之日、垸飯之外、一度之料白米八九斗、黑米五六石、每郡(無イ)鄕絹十疋、其外號段米、町別一斗二升、況乎一宿借屋鋪設、不遺塵芥、然則耕田工人、皆悉逃亡、作畠之民、僅以留

諸國ニ下ス官符九箇條ノ内六箇條ヲ下知セズ

跡者、内雖有此愁、外難表其由、望請裁斷、將以休愁吟矣、

三十一　請被裁許、(四イ)以去寛和三年三月(五イ)七日(ムイ)、諸國被下給九箇條官符内、三箇條令放知、六箇條不令下知事

一條、制止擅帶兵仗横行所部輩事

一條、追討陸海盜賊事

一條、制止王臣家設庄薗田地致國郡之妨事

未下符六箇條

一條、調庸雜物合期見上事

一條、調庸雜物違期未進國司任格解却見任事、

一條、停止敍用諸國受領吏殄(殘イ)滅任國輩事、

一條、禁制諸國受領吏多率五位六位有官散位新賓趣任殄滅國輩事、

一條、全付公帳前司塡納已分差官物事、

一條、制止納官封家幷王臣已下庶人已上不用錢貨事、

右官符、以去永延元年七月八日、諸郡下符、其旨偁、應重制止兵仗横行、陸海盜賊、及院宮王臣家設莊薗田地、放三箇條、則今六箇條未放知、是只爲横法

原寸　縱〇・二六七

官府猥成私乱之計就中牧宰之職
朝委已重撫民興國非無賞進而當
任守元命朝臣不顧國土之凋弊無
恩人民之散亡一任之間忽貯永代
之財產三年之程徒買數所之家園
國亡民散職而由此何況有官散位
[illegible]司官人職宰已異而忘把笏之嚴
只執鞭之營為隱如此等之嚴制所
不令被知也若觸禁國司無心優免
之所勅遂訴言上如件望請被載
[illegible]

非行所拘惜也雖然依勅宣之嚴所々普散僅案其九箇條內應停
領吏國殄滅(殄イ)并五位六位有官散位新賓率來禁制重嚴背如此官
亂之計就中牧宰之職朝委已重撫民興國非無賞進而當任守元
顧國土之凋弊無思人民之散亡一任之間急貯永代之財產三年
數所家園國亡民散職而由此也何況有官散位諸司官人職宰已(掌カ)

原寸　縱〇・二六七

官府猥成私乱之討就中牧宰之職
朝奉已宣撫民興國非無賞進而當
任守元命朝臣不顧國土之凋弊無
愚人民之散亡一任之間急貯永代
之財産三年之程俄買數所之家園
國亡民散職而由與何況有官散位
諸司官人職宰已異而忘把笏之嚴
只執鞭之營爲隱如此等之嚴制所
不令被知也若觸愁國司無優
之心其勅遣訴言上如件望請被裁
行條是勅之旨矣

非行所拘惜也雖然依勅宣之嚴所々普散僅案其九箇條内應停止諸國受領吏國殄滅并五位六位有官符猥成私散位新賓率來禁制重嚴背如此官符猥成私亂之計就中牧宰之職朝委已重撫民興國非無賞進而當任守元命朝臣不顧國土之凋弊無思人民之散亡一任之間急貯永代之財産三年之程俄買數所家園國亡民散職而由此也何況有官散位諸司官人職宰已異而忘把笏之嚴只好執鞭之營爲隱如此等之嚴制所不令放知也若觸愁國司無優

原寸　縱〇・二六七米

官府猥成私乱之計就中牧宰之職
朝委已重撫民興國非無賞進而當
任守元命朝臣不顧國土之凋弊無
思人民之散亡一任之間忽貯永代
之財産三年之程徒買數所之家當
國巨民散職而由此何況有官散位
諸司官人職宰已異而忘把笏之儀
只執鞭之營為隱如此等之巖制所
不令教知也若黷愁國司無心優行
之心其勅趣謂言上如件望請被載
所行懸違勅之心矣

非行所拘惜也雖然依勅宣之趣所々書改條案其九條併內侍
領吏國殄滅并五位六位有官散位新賓率來禁制重嚴背如此宮
亂之計就中牧宰之職朝委已重撫民興國非無賞進而當任守元
願國土之凋弊無思人民之散亡一任之間急貯永代之財産三年

原寸 縱〇・二六七

官府猥成私乱之計就中牧宰之職
朝奏已重撫民興國非無賞進而當
任守元命朝臣不顧國土之凋弊無
思人民之散亡一任之間忽貯永代
之財産三年之程俄買數所之家園
國亡民散職而由此何況有官散位
諸司官人職宰已異而忘把笏之嚴
只執鞭之營為隱如此等之嚴制所
不令被知也若竊愁國司無心優免
之心具勅趣訴言上如件望請被裁
所將懲違勅之心矣

非行所拘惜也雖然依勅宣之嚴所々普散僅案其九箇條內悉停止諸國受領吏國殄滅并五位六位有官散位新賓率來禁制重嚴背如此官符猥成私亂之計就中牧宰之職朝委已重撫民興國非無賞進而當任守元命朝臣不顧國土之凋弊無思人民之散亡一任之間忽貯永代之財産三年之程俄買數所家園國亡民散職而由此也何況有官散位諸司官人職宰已異而忘把笏之嚴只執鞭之營為隱如此等之嚴制所不令被知也若竊愁國司無心優免之心具勅趣訴言上如件望請被裁所將懲違勅之心矣

非行所拘惜也、雖然依勅宣之嚴、所々普散、僅案其九箇條內、應停止諸國受領吏國殄滅(殘イ)、幷五位六位有官散位新賓率來、禁制重嚴、背如此官符、猥成私亂之計、就中牧宰之職、朝委已重、撫民興國、非無賞進、而當任守元命朝臣、不顧國土之凋弊、無思人民之散亡、一任之間、急貯永代之財產、三年之程、俄買數所家薗、國亡民散、職而由此也、何況有官散位諸司官人、職宰(掌カ)已異、而忘把笏之嚴、只好執鞭之營、爲隱如此等之嚴制、所不令放知也、若觸愁國司、無優免之心、具勒(錄イ)越訴者、言上如件、望請被裁斷、將懲違勅之心矣、

以前條事、爲知憲法之貴、言上如件、抑良吏莅堺之日、虎負兒以却(去イ)、黎務忘風之時、蝗虫振羽而集、而當任守元命朝臣、魚奪(集イ)在心、不知窮民之榮(采イ)色、屠膾銘肝、猶失分優之蒲鞭、昔依六王之誅戮、熾七國之災孽、今懸一守之濫絲、致八郡之騷動、因之弃國欲避是、如背皇命、越境擬退、亦似闕課役、僅過三年、不異步虎首、若遂一任者、盡被害蠹、仍囊(案イ)愁於腹內、則儲逃亡之粮、聞責於慮外、則貯(佇イ)離散之餞、今須郡司百姓、早錄元命朝臣不治之由、蒙官裁者也、而郡司之職、不遑公事、百姓之身被絆國役、爲劇外國四度之務、難侍中花萬(聊イ)機之底(庭イ)、爰纔離己國、既陪官底(庭イ)、猶若俎上之魚移於江海、刀下之鳥翻於林河、望請停止

永祚元年二月五日

件元命朝臣改任良吏、以將令他國之牧宰、知治國優民之褒賞、方今不勝馬風鳥枝之歎愁、宜裔龍門鳳闕之綸旨、仍具勒三十一箇條事狀、謹解、

元命ノ加舉稲班給ノ功過ヲ定ム

〔北山抄〕十東途指南古今定功過例　尾張守元命、當任加舉不度見稲、依例班給之、新司臨秋著任、未到以前班給可然、但本穎之中久分付見稲、彼此之間、事似不同（可ヽ）、就中當任所加舉何謂前例乎、然而件見稲藁芥秕惡云々、仍不班給乎、至于諸寺燈分料、依實班給之由、已有所見、因之後日所被定許也、

〔尾張國郡司百姓等解〕○尾張圓成律寺所藏　地（奥書）藏靈驗記、尾州鳴海地藏縁起下、　尾張國鳴海ト云所ニ住ケル俗アリ、當國ノ守護ニテ下向シケルニ、自ラ根性不道ニシテ、貪欲厚ク極重惡人ナリ、藤原元命朝臣トテ、近代世ニカクレナキ仁ナリ、當國官領ノ後ハ、公田ヲ掠メオトシ、寺社本主ノ所帶ヲ押領シテ、後家女子等ヲ沒收シケレハ、公物費多クシテ、私ノ用意巨多ナリ、乃至國民ニ訴ラレテ、終ニ所帶ヲ召上ラレ、京都ニ上リシニ、術ツキテ東寺門ニテ乞食シケルカ、終ニハ餓死シタリケリ、

極重惡人

後家女子等ヲ沒收ス

東寺門前ニテ乞食シ餓死ストノ說

〔尾張名所圖繪〕前編愛智郡五　當寺もと鳴海の小高原にありて、青鬼山と號せしが、康平二年、尾張守元命朝臣の家臣爲家、草堂を營み、地藏の大像を安置せしを、應安五年、長母寺の無住國師中興し、應永四年、今の宗になりて、瑞泉寺に屬す、尾張六地藏のうちにて、和歌によめる鳴海寺是なり、驛中相原町にあり、曹洞宗瑞泉寺末、

鳴海ニ住ム

地藏靈驗記に、藤原元命朝臣は、凶惡の人にて、鳴海に住けるが、忍びて通ふかた有て、夜な〳〵行けるに、霜月廿日あまりの夜明がたに、彼方より歸るとて、地獄澤といへる小川にかゝりけるが、氷はりつめて渡りかねければ、召つれたる若もの二三人して、高き卒都婆の有けるをとり、橋に架しけるに、此そとはに地藏菩薩を彫付たりしを踏て渡りけるが、ほどなく元命朝臣大病をうけ、從者爲家と共に卒して、焰王の前に至り、罪業をたゞされけるを、彼地藏尊出給ひ、さま〴〵わび給ひて蘇生しけるに、元命朝臣は猶惡事やまずして、國人ににくまれ、終りをよくせざりしとぞ、爲家は罪業をおそろしくおもひて、六角二階の伽藍を營み、閣上に十八體の地藏を安置し、中尊に丈六の地藏の大像を造り、東海道の側に安置し、鳴海の地藏と稱せしが、年つもりて破壞せしを、一圓上人再興せしよしにしるせり、

地藏ノ罰ニテ病ヲ受クトノ說

從者爲家伽藍ヲ營ミ地藏ヲ安置ス

〔尊卑分脈〕藤氏魚名公孫

佐高

世系

冊 經臣 正五下、肥前守、
母上毛氏、
藏文 國風

國隣

元命 從四下、尾張守、或國隣子云々、
母周防守源致女、

賴方 從五下、石見守、
母、

〔延喜式〕二十七紙背文書
○公爵九條道實氏所藏

自署

永延二年七月廿四日尾張守

○尾張ノ郡司百姓等、元命ノ非法ヲ訴フル日時ヲ、百練抄、六日ニ作ル、今、日本紀略ニ據ル、元命ノ式部丞タルコト、寛和元年二月二十八日ノ條ニ、尾張守ヲ停ムルコト、本年四月五日ノ條吉田祭ノ奉行タルコト、ニ長德元年四月二十四日ノ條ニ見ユ、元命ノ世系及ビ自署、便宜合敍

ス、

七日、戊午、內御物忌、是日、左大臣雅信ノ女、著裳ノ儀ヲ行フ、

〔小右記〕二月七日、戊午、○中略依兩度御消息、參左府女人著裳所、亥時許了、有給物事、被物有差、今明內御物忌、

九日、庚申、春日祭、

右大臣爲光參詣ス

祭使

近衛府使

右馬寮使

〔日本紀略〕一條院　二月八日、己未、右大臣爲光春日祭事、參詣彼社、近衛使左中將正清朝臣、俄申穢由、以左衛門權佐藤原方正、令勤祭使、

九日、庚申、春日祭、

〔小右記〕二月七日、戊午、依召參攝政殿、春日近衛府使左近權中將正清、忽依遠國子喪、申故障、但有申代官、仍召左衛門權佐方正、□□代官、又右馬寮使權□近信、申故障、無裁許、被催遣了、

八日、己未、早旦出河原、奉例幣於春日、今日右大臣被參春日、依召參院、黃昏罷出、

〔春日祭歷名部類〕春日祭

上卿右大臣爲光　近衛使左中將正清、依穢申代官、左衛門佐藤原方

正參仕、

十日、辛酉、内藏寮權曹司燒亡ス、下人燒死ス

〔小右記〕二月十日、辛酉、〇中略未時許、内藏寮權曹司燒亡、下人燒死云々、

十一日、壬戌、列見、

〔日本紀略〕一院二月十一日、壬戌、列見、

皇太后御惱、是日、圓融法皇、天皇ノ御爲ニ、天台座主尋禪ヲシテ尊勝法ヲ、安倍晴明ヲシテ泰山府君祭ヲ行ハシメ給フ、

〔小右記〕正月廿九日、辛亥、〇中略今日公家□御之由、去夕從后宮仰、仍兩所（所カ）御修法阿闍梨了、

二月十日、辛酉、早朝退出、依喚參院、尊勝御修法、焰魔天供、代厄御祭等、奏事由、可令奉仕者、日來奉爲公家、自他夢想不宜、仍所示仰也者、即罷出、

焰魔天供代厄御祭

夢想宜シカラザルニ依ル

十一日、壬戌、參内、皇（陛カ）太后俄有惱御、攝政被馳參、昨日院仰由、今日申攝政、令勘申尊勝法、太府君祭日、御修法事、□遣天台座主許、御祭晴明奉仕、曉頭罷出、今夜於南庭祈申南山、是上事也、

藤原實資金峯山ヲ祈ル

十二日、癸亥、〇中略又出南庭、祈申金峯山、如昨日、

十三日、甲子、〇中略深更祈申金峯山、

〇法皇、天皇ノ御爲ニ、藤原實資ヲ石清水八幡宮ニ遣シテ祈ラシメ給フコト、正月十一日ノ條、及ビ五月二十六日ノ條ニ見ユ、

十三日、甲子、藏人ヲ補ス、

〔小右記〕二月十三日、甲子、〇中略菅原永頼候藏人所之宣旨下之、

十六日、丁卯、圓融寺ニ朝覲行幸アラセラル、

〔日本紀略〕一院二月五日、丙申、〇中略定來廿六日圓融寺行幸事、

廿六日、丁丑、〇中略是日也、天皇幸圓融寺、拜覲太上法皇、〇本書、二十六日ニ作ルハ誤ナリ、

〔小右記〕二月五日、丙辰、參内、攝（藤原カ）政被奏院云、元三日間、依無宜日、不令參給、仍來十六日、可有御對面、〇中略今夜左府（藤原信）於左仗、定行幸雜事、

行幸ノ雜事ヲ定ム

十五日、丙寅、〇中略明日行幸□（秘）束等、所司并院相□（共カ）奉仕、晩景罷出、

鈴奏

十六日、丁卯、早朝參内、是日有圓融寺行幸、巳時於南殿奉仕返閇、□有鈴奏、□（御カ）同（與カ）經月華、宜秋、藻壁等門、自西大宮御道登北、自殷富門大路西折、於圓融寺大門、先以余被奏事由、早被申入御之由、又被奏拜禮之狀、仰云、更不可然也、臨時行幸也、非朝賀行幸者、仍無禮、直參給畫御座、□小選歸御直廬、又

御巡路

臨時行幸ニテ朝賀行幸ニ非

ズ拜禮無シ　著給御直衣御指貫、參給例御座所、仍有御消息、還御、法皇又出御畫御座方、又

御前供　主上令參上、（著御裝束）□即召公卿、有御酒事等、法皇及主上御前、供御高坏六本、（於例御座、有御對面之間、有此事、）有管絃興、主上給御盃於攝政及左（雅信）府云々、此間事、慥不見、攝政

管絃ノ興　攝政及ビ左大臣ニ天盃ヲ給フ　於板敷拜舞云々、臨晚被奉御馬二疋、太皇太后宮亮兼理被聽昇殿、（取御片々）第二

兼理ニ院ノ昇殿ヲ聽ス　御馬悪駕（ヤ、）不騎、仍攝政隨身左近番長秦氏則應召騎之、太雄、仍攝政可任府生之由、仰左大將、晚景乘輿歸京、於途中秉燎、戌時許、即有鈴奏及名謁等、御馬各

還幸ノ鈴奏及ビ名謁　給左右寮、余仰之、

〔榮華物語〕（三さま）〈のよろこひ　年號かはりて、永祚元年といひて、正月

道長ニ天盃ヲ賜フトノ説　（○本書、正月ニ作ルハ誤レリ、）には院に行幸あり、院も入道せさせたまひにしかは、圓融院にすませ給へは、その院に行幸あり、例のさほうの事ともにて、院つかさなと、よろこひさま〈〉にて過もてゆく、

〔花鳥餘情〕（二十七寄生）賜天盃例　永祚元年二月十六日、朝覲行幸、（道長）御堂殿賜天盃、

二十三日、（甲戌）權大納言藤原道隆ヲ內大臣ニ任ズ、

〔公卿補任〕（六）內大臣正二位藤道隆、（三十七）二月廿三日任、

昇殿　權大納言從二位藤道兼　二月廿三日任、

公任ヲ藏人頭ニ補ス　權中納言從三位源伊陟　右衞門督、近江守、二月廿三日任、止督、

兼宣旨　參議正四位下藤實資、（廿三、）三月廿三日任、元藏人頭、（○職事補任同ジ、）

任大臣節會　〔公卿補任〕（六正暦二年）參議正四位下藤伊周　同（永延）三二廿七備中權介、

〔公卿補任〕（六寛弘二年）參議正四位下源經房　同（永延）三二、昇殿、

〔職事補任〕（一條院藏人頭）左近權中將正四位下藤公任　永延三二廿三補、（○公卿補任同ジ、中古歌仙三十六人傳二十日ニ作ル、）

〔日本紀略〕（一條院）二月三日、甲寅、權大納言藤原道隆卿參內、蒙可任內大臣之宣旨、

日時定　廿三日、甲戌、任大臣節會、內大臣藤原道隆、權（中）大納言源伊陟、參議藤原實資等也、天皇出御南殿、於內大臣第有饗祿事、右（繼光）大臣以下向之、

〔小右記〕二月三日、甲寅、參內、攝政（兼家）被命云、以權大納言藤原朝臣（道隆）可任內大臣、其日可擇申事、可仰大納言者、即於左仗、仰權大納言、令申恐奉之由、即申攝政、小選參院奏攝政之被申旨、

任大臣ノコトヲ院ニ奏ス

圓融法皇藤原實資ニ參議ヲ推擧シ給フ

四日、乙卯、○略中詣權大納言御許、爲賀內大臣御經營、謁談之後參內、小選罷出、
五日、丙辰、參內、攝政被奏院云、○略中以權大納言道隆、可任內大臣之由、此兩三
年、左(雅信)大臣有催奏事、爲所不信容也、兼家年老位高、且暮難期、近習臣猶可居大
臣、仍殊可任給之由仰宣了、來廿三日可行其事者、參院奏聞、仰云、此三事□
□者、歸參內、申御返事、
十七日、戊辰、入夜參院、被仰云、八座事、昨行幸間示攝政、已有許容、且所善思也
者、深更罷出、向權中納言(俊賢道雅)御許、小選歸、
十八日、己巳、參攝政殿、○略中又被仰□(云カ)猶以余可被□(任カ)八座之由仰事也切(切也カ)云々、
十九日、庚午、早朝參院、暫罷出、權中納言依院參(仰殿カ)入云々、是余八座事也、昨日攝
政被奏云、加任事猶可難歟者、今日院仰云、此般事、爲他人可無謗難□在於吾
者、卽歸參申攝政者、入夜遇權中納言、聞案內、已有許容者、
廿日、辛未、遲明參院、奏身事則退出、參攝政殿、被命云、院仰已重、難固辭申、今日
可令奏聞、可在有四中(マヽ)、全依此事、人々怨□歟、偏依院仰、所可加也者、以權中納
言被奉院(奏カ)(マヽ)、是被奏御返事、被有可許、余參內、次參院、良久候御前、奉攝政之仰奏
趣、既有可許之趣、小選罷出、向大納言家、向權中納言家、爲慶賀也、

任內大臣儀

出御ナシ

宣命

慶賀ヲ奏ス

后宮及ビ東宮ニ慶ヲ啓ス

任大臣ノ饗宴

廿一日、壬申、依召參攝政殿、廿三日有可任內大臣事、彼日雜事及宣命等事、可
被行之由、可申左府(雅信)者、卽參左府申其由、謹且奉□、可仰所司、但去夜自車罷下
之間、亂足所勞、侍夜間相被(マヽ)宜者可參行者、卽歸參申御□(返カ)事、次參內、令催行廿
三日事等、小選罷出、參攝政殿、黃昏罷出、可有慶賀之事、付女房令申其由於后
宮、
廿三日、甲戌、午時參內、今日有任內大臣之儀、南殿懸御簾如例、余依承可被任
參議之氣色、隨身隱文帶參入、在宿所、右(發光)大臣參入、行之、依入夜不出御、攝政獨
坐南殿云々、夜漏有此儀、權大納言進爲內大臣、權中納言道兼爲權大納言、參
議右衞門督伊陟(爲脫カ)權中納言、大藏卿時光十三年、余年勝之、而反依勤勞被抽任、伊陟云、余加任參議、公卿矣、今般廿人□、○ヨ
ノ註文、誤脫アラン宣命了、余自宿所向化德門邊、待內大臣、自藤壺來會同門、相共入自
左靑璅、宣仁等門、經南殿階下、進射場殿、此間右大臣以下皆在□座、以藏人頭左近權中
將公任、今夜補藏人頭、令奏慶賀、相共拜舞、內大臣以藏人左小辨扶義(源)、令奏饗事、勅許
後、經初道退歸、饗事扶義、右大臣□□相共參后宮、令啓慶、次參東宮、令啓、權大納言□御前列、不令奏慶賀、了歸陣腋、內大臣相率公卿、出自敷政、陽明等門、依夜入無儀式、向內大臣第、攝政家、號南院、
大臣先列於家下、立南院下、次公卿入自中門列立、其儀如例、余在列、其座儲南廂、

藤原懐忠怨アリテ参ラズ

圓融法皇ニ慶チ奏ス

公任院ノ昇殿チ聽サル

中宮ニ慶チ啓ス

冷泉上皇ニ慶チ奏ス

實資皇太后宮ニ慶チ啓ス

實資ノ前駈

道隆等著陣

辨少納言座在西廂、外記史座在西、對廂、攝政閑座、坐簾中見給、三獻了歸給二條院、丑時許、事了、公卿辨少納言□如例、不遣祿使、又初任例也、但公卿祿史（使カ）如例、今夜召伶人有管絃、無左右大辨（藤原懐忠也）、左大辨有怨不參、右大辨有病云々、不遑記、

廿四日、乙亥、參權（道隆）大納言御許、新（伊陟）中納言相會、三人相共參內大臣御許、相率參攝政殿、新任公卿四人於御□（前カ）勸一盃、卽出參圓融院、中將（公任）令奏慶、頗□之間、又被聽昇殿、令奏慶賀、有召候御□（前カ）、有貴仰事等、小選罷出、參大相府、召御被敷圓座等、續參中宮、以女房被給仰事、次參冷泉院、令奉（奏）慶賀、此間入夜、仍歸宅、

廿五日、丙子、早朝向左大將（朝光）御許、被參內、仍歸次、參右大將（濟時）御許、被謁、參皇太后宮令啓慶、卽召御前、以女房被仰慶由、次參左府、被相逢、□（敷カ）敷圓座于敷出敷（マヽ）□、次參右府、內大臣、權大納言參會、卽被謁有事、有殿上人前駈等饗、三四巡之後、有□內大臣權□余也、內大臣有牽出物、依甚雨間、不列御前、乘車間進奉、秉燭後歸、余三箇日前駈、五品四人、六位六人、是過差法追近代例、

三月十三日、甲午、初著宜陽殿左仗座之日也、辰時參入、々自化德門、巳時吉時、暫徘徊陣邊、此間權大納言道兼參入、巳一點先著宜陽殿、次著陣座、了余著宜陽殿、次著陣座、（同大納言在陣座、依可有申文、○中略）內大臣道隆巳二點初參陣、有申文云々、（○中略）新中納言伊陟巳三點著陣、無申文云々、

○藤原伊周ヲ備中權介ニ任ズルコト、便宜合敍ス、

內大臣以下參向殿上人ニチ舞人トス

試樂

和歌

公任ニ禁色ヲ聽ス

二十四日、乙亥、園韓神祭、

〔日本紀略〕一條院　二月廿四日、乙亥、園韓神祭、

二十六日、丁丑、祈年穀奉幣、

〔日本紀略〕一條院　二月廿六日、丁丑、奉幣諸社、爲祈年穀也、

二十八日、己卯、攝政兼家、賀茂社ニ詣ヅ、

〔日本紀略〕一條院　二月廿八日、己卯、攝政自二條第參詣賀茂社、內大臣（道隆）以下參向、以殿上人爲舞人、四位二人、五位八人、○八人、小右記七人ニ作ル、

〔小右記〕二月廿七日、戊寅、參攝政殿、明日賀茂試樂、有公卿已下饗□、右大臣（藤光）被參入、黃昏發歌笛聲、舞人列舞、右大臣脫衣、給文信朝臣、陪從、次攝政脫衣、給齊信、自余云々、入夜有和歌事、是（題）翫前庭櫻花、右大臣以下皆有祿、舞人等祿、舞了退入之間給之、右大將（濟時）□、內馬足、一頭中將（公任）禁色宣旨下、被給下襲袴、中將執之進庭中、拜了隨便歟、

廿八日、己卯、攝政參賀茂、有公卿、殿上人、舞人、陪從、諸大夫饗、內大臣、道隆、左大

下御社ニ詣ツ　金銀御幣神寶ヲ奉ルル　上御社ニ詣ツ

將朝光、權中納言、道兼、中納言、顯光、重光、保光、公季、伊陟、道長、參議、安親、余、三位、□、道綱、泰□、舞人四位三人、正光、伊周、信、五位七人相尹、行成、明理、經房、登朝、朝經、頼親、陪從云々、內大臣及他公卿皆騎馬、申時許、到下御社、被奉金銀御幣神寶等、神寶、公卿執之、有東遊舞等、後既儲饗云々、馳御馬、此間主人乘車、左大將同車、他公卿立車下、內大臣同立見、頗無威儀、次被向上御社、及秉燭、其事如下、禰宜等給祿上御社又有饗、亥終歸給、又於彼殿有饗、舞人、陪從等給祿云々、

〔賀茂注進雜記〕乾　行幸官幣御幸附祈願靈驗等

永祚元年二月廿八日、又攝政二條の第より、當社に詣給ふ、內大臣以下參向あり、殿上人を舞人として、舞樂を奏し給ひ、神たから品々あくるにをよはす、四位二人、五位八人、供奉に具せられける、

三十日、辛巳、圓融法皇、西河ニ御シテ、河臨御禊ヲ行ハセラル、

〔小右記〕二月卅日、辛巳、參院、出御西河、有御禊、河臨御禊、余騎馬扈從、修理（懐平）大夫、左京大夫（道長）、兩三品同扈從、還御、卽罷出、

三月　小壬午朔盡

三日、甲申、御燈、

〔日本紀略〕一條院　三月三日、甲申、御燈、

四日、乙酉、直物、小除目及ビ僧綱召、

〔公卿補任〕六

權大納言從二位藤道兼　三月四日皇太后宮大夫、

權中納言從三位藤道長、廿四、三月四日右衞門督、

參議正四位下藤時光　大藏卿、三月七日從三位、超安親、

〔公卿補任〕六　永祚二年　參議正四位下藤道頼、廿、（永延）同三三四轉左中將、

〔公卿補任〕六　長德二年　參議從四位上藤濟信（轉ス）　同（永延）三三四右中將、

〔公卿補任〕六　寛弘二年　參議正四位下源經房　（永祚元年）三、二日昇殿、三四左少將、

〔公卿補任〕六　寛弘五年　參議正四位下藤實成、三、四、十　（永祚元年）三月四侍從、

〔公卿補任〕六　寛弘八年　參議從四位下藤通任、三、九、十　同（永延）三三四左兵衞佐、

〔中古歌仙三十六人傳〕　藤原道信　（永延三年）三月四日兼但馬權守、

〔僧綱補任〕乾　○德川昭武氏本

權少僧都勝算　三月四日任、四十九、
權律師實因　天台宗、延曆寺、三月四日任、年四十五、臘十八、故延曆寺座主
僧正慈念弟子、私師阿闍梨弘延云々、
仁覺　法相宗、大安寺、同日任、三會勞、年六十八、臘四十四、故令辰少僧
都弟子、天元三年講師、

〔日本紀略〕一院　三月四日、乙酉、乃略中　攝政被參內、依可有直物及小除目事也、余候依
未著陣、不能參內、
五日、丙戌、昨日有直物小除目、以播磨守景□任伊豫守、以伊豫守清遠任播磨
守、□□召聞也、權中納言道長任右衞門督、伊陟任中納言替、但伊陟又中納言也、更以同納言所被任未得其心、右近
中將道賴任左中將、余替也、以左近少將齊信任右將、中晩力、左近少將伊周爲上臈、而以下臈所被任如何、依少將勞
歟、自余云々、乃略中　除目、次有人々加階事、從四位上永賴朝臣、惟仲朝臣、從五位
下清道、此加階中惟仲、清道無所據云々、又有僧綱召、權少僧都勝算、權律師仁
覺朝恩歟、僧綱員數今度滿廿人、同公卿員數歟、
○藤原時光敍位ノコト、便宜合敍ス、

加階

僧綱ノ員數二十人ニ滿ツ

攝政兼家、御讀經ヲ行フ、

〔小右記〕三月四日、乙酉、參攝政殿御讀經發願、任參議後、未預佛事、仍不列行
香座、午時許事了、
七日、戊子、參攝政殿御讀經結願、事了罷出、

結願

六日、丁亥、參議藤原實資ヲ、元ノ如ク、圓融院ノ別當ト爲シ、內昇殿ヲ聽ス、

〔小右記〕三月五日、丙戌、乃略中　今日晩景、參攝政殿、以左中將道賴、被仰不相逢
之由、令申內昇殿事、
六日、丁亥、參院、良久候御前、院別當如元、宣旨可下由有仰事、候院之間從內小
舍人來云、被昇殿可參入者、
十三日、甲午、乃略中　向射場、以藏人擧直令奏昇殿慶、拜舞了、候雲上、

昇殿ノ慶ヲ奏ス

七日、戊子、前參河守大江定基入道寂照、入宋センコトヲ請フ、

〔日本紀略〕一院　三月七日、戊子、入道前參河守大江定基、法名入空、上狀請
入唐、
○寂照入宋ノコト、長保五年八月二十五日ノ條ニ見ユ、

九日、庚寅、圓融法皇、東寺ニ於テ、大僧正寬朝ニ、兩部傳法灌頂職位ヲ受ケ給

フ、

〔日本紀略〕一條院　三月九日、庚寅、圓融寺法皇御幸東寺、御灌頂、左右大臣（雅信、醍醐）乘車候御後、大納言以下殿上僧等前駈、左右近衞、左右兵衞、御駕輿丁等、一如行幸、

殿上僧儀仗行幸ノ如シ

〔小右記〕三月九日、庚寅、早朝參院、於東寺有御灌頂事、法皇渡御東寺、余參會途中、仍下自車候、騎馬扈從、公卿多參會途中、

〔圓融院御灌頂記〕○東寺寶菩提院所藏

第七代僧正法務寛一朝付十七人、

寛和元年八月

第三圓融法皇御諱覺一、如御年卅、師位法務大僧正、落髮後四箇年、

廿九日落髮（三）

右、永延二年三月九日、庚寅、水、於東寺灌頂院授與之、色衆八十三口之中、僧綱三口、色衆爲體、

堂莊嚴

先一日堂莊嚴事　當日、午刻、渡灌頂院、支分（度カ）沙汰了、當日法皇御筵帳御車懸青色御簀、下簾等、供奉御前、自始（自）（無僧）左大臣、卿（公脫カ）十四人、自餘散位公達數十騎、又僧殿上、始自穆算僧都、阿闍梨內供（御脫カ）等數十騎、是則天台僧也、東南門闈外、自御車下、御步行、自東室馬道出御、入西院、御時事等、午刻鐘行事、色衆引八十人、著烈（列カ）

西院ニ入御

如例（下同ジ）、灌頂儀式、於西院、法皇令受加持給、其後行烈爲體、大阿闍梨、仁和寺大僧正寛朝、持金剛衆廿人、著檜皮色袍裳裙、持香呂權大僧都元杲、權律師雅慶、法橋育然、次々專寺定額僧也、持花衆卅二人、著同色袍裳櫨色甲、東寺末寺別當供僧、幷七大寺名僧等也、次讚衆廿四人、鈍色袍裳甲也、本寺末寺修學僧也、乞戒別當阿闍梨熙樣、持幡僧殿上二人、因幡守常陸守子也、大阿闍梨於大馬道乘輿、三綱學頭二人、維那一人、十弟子等、如例供奉、次法帝步行、敷長筵上步御、其筵、往前展敷、彼（後）方卽卷、以他人不令踏也、以殿上人、令供奉件筵也、次御從僧、所謂天台南京僧綱、內供八人、次左大臣幷諸卿、一々供奉之、自大馬道御灌頂院之間、道左右立龍頭舍幡、南庭立絹握（幡）、安御誦經物、信乃布五百段、兼又有大道（金）供米百斛、引斑幕隱引（之カ）大馬道打平張、東西面僧房講堂、張褰斑幕、灌頂持金剛三迺著座、次々如例、但乞戒師熙樣、入幕著禮盤、散花師乍八十人、自石階大行道、權大僧都元杲供一壇幷護摩、然後作法了、次法帝御輿、引色衆入御西院、卽著掃下御座、持幡二人、立東西石階、色衆南庭、首東尾西四重烈、諸卿東西、自南階指北烈、權大ゝ（僧都）一人、御階前出、乍立嘆德、法皇令持五古、勅答詞甚多、詞了色衆諸人、皆以奉三拜、次諸卿各取被物、賜色衆僧綱白大褂各一重、乞戒以

加持ヲ受ケ給フ

灌頂院ニ御ス

作法了ツテ西院ニ御ス

被物

下引頭已上、合七十九口、自（合カ）袈裟各一重、持幡以下三綱已上五口、黄合袈各一條、學頭二口、維那一口、絹各一疋、十弟子各平重細長一領、御誦經物、信乃布五百段、可立幄一宇、大堂供米百斛、

雜事定

定御灌頂雜事

御誦經物

一御誦經事　信乃布五百段可立幄一宇、行事別當扶義、（マヽ）判官代橘義懐、

大堂供米

一大堂供事　米百斛行事同上、判官代同上、

色衆僧綱以下ノ齋食

一色衆僧綱以下八十三口時事　僧綱二口衝重各九合、乞戒師一口　持金剛衆廿六口　持花衆卅口　讃衆廿口　引頭二口已上衝重各六合、　持幡二口

三綱已上衝重各四合、　學頭二口　維那一口已上衝重各二合、　十弟子衝重各六合、

行事別當實資（藤原）朝臣　判官代重（藤原）文

一阿闍梨前事　行事公任（藤原）朝臣

一同房裝束事　行事別當輔正（藤原）朝臣　判官代平季信

御在所裝束

一御在所御裝束事　行事別當正（藤原）清朝臣　判官代藤、邦昌　番頭藤、長忠

一僧殿上饗事　机卅前（摩訶下同ジ）广可儲、

俗客饗

一濫僧供事　米卅斛　行事正方（藤原）　主典代多米國定

一俗客饗事　公卿廿前　殿上人六十前已上广可儲、

後朝雜事

件行事別當公任朝臣　判官代藤邦昌

一職掌五位以下、駕輿丁已上饗事、广可儲、　行事同上、

一後朝雜事　一阿闍梨前事　十弟子衝重各六合　行事別當輔正

朝臣　判官代平季信

一三綱學頭維那粥時事同上、　行事同上、

色衆以下ノ饗祿

一色衆以下饗祿事　僧綱二口、白大褂各一重　乞戒師以下引頭已上、合七十九口、白大褂各一領　持幡以下三綱以上五口、黄袈各一條　學頭二口　維那一口　絹各一疋　十弟子各平重細長各一領

行事別當實資朝臣　判官代重文　番頭藤、有家

一僧殿上饗事　机卅前

一俗客饗事　公卿幷殿上人机同上、

一職掌等饗事同上、

行事別當公任朝臣　判官代藤原邦昌

永延二年十一月九日

僧前所備事　阿闍梨折敷十二枚　右大臣爲光、

僧綱二口衝重各九合　大納言源朝臣重信、　權大納言藤、朝臣道兼、

已上各一前

乞戒師以下引頭以上七十九口、衝重各六合　左大將藤原朝臣朝光、

右大將藤、朝臣濟時、

以上各三前

民部卿藤、朝臣文範、　中納言藤、朝臣顯光、

權中納言藤、朝臣（脫アラン）　左衞門督源朝臣重光、

中納言源朝臣保光、　春宮權大夫藤、朝臣公季、

權中納言源朝臣伊陟、　左兵衞督源朝臣時中、

右衞門督藤原朝臣道長、　勘解由長官藤、、佐理、

式部大甫高階成忠、　修理大夫藤、、懷遠、

右近權中將藤、、道綱、　左京大夫源、、泰清、

參議安親朝臣（藤原）　參議時光（藤原）、、

參議誠信（藤原）朝臣

已上各二前

正清朝臣（藤原）　懷忠（藤原）、、　高遠（藤原）、、　實資（藤原）、、　致方（藤原）、、

理兼（藤原）、、　正光（藤原）、、　忠信（藤原）、、　在國（藤原）、、　伊周（藤原）、、

任（藤原公任カ）、、　憲定（藤原）、、　實方（藤原）、、　□信（藤原齊信）、、　師衡、、

遠信　景舒（藤原）、、　親信、、　遠資（藤原）、、　惟仲（平）、、

景齊（藤原）、、　時明（藤原）、、　知章（藤原）、、　伊相（藤原）　扶義（藤原）

方正（藤原）　俊賢（藤原）　相尹（藤原）　實正（藤原）　行成（藤原）

經方（藤原）　爲良（藤原）　相如（藤原）　弘量（藤原）　宣方（藤原）

方澄（藤原）　安隆（藤原）　時明　登朝

已上各一前

十弟子、衝重各六合、

業方（藤原）　爲任（藤原）　重時（藤原）　道方（藤原）　實成（藤原）　通任（藤原）　朝任（藤原）　季隨（藤原）

說孝（藤原）　光尹（藤原）

已上各一前

持幡以下維那以上六口、衝重各四前(合)

緣理　致言　圓擧　重(脱)文　橘義懷　藤邦昌

以上各一前

永延二(三)年己(戊)丑(子)十一月九日

或記云、永延三年乙(己)丑三月九日、庚寅、星(水)!!、於東寺、修朱雀院(圓融)之傳法灌頂、○(中略)諸卿各取被物、給色衆、而退出、有御非時、大僧正進參西院、奉法帝三拜、卽返給本房了、又法帝出御自西院、更御僧正御房、自其御出返了給委曲可有別記之、

貞和四年九月廿日、於東寺書寫了、記者可尋之、

此記、天台穆算僧都云々、僧綱補任可引見之、　賢寶記之

或記云、永延二年八月三日、圓融院法皇、於圓融寺御灌頂、金剛界、

永延三年三月九日、於東寺御灌頂、胎藏界、兩年阿闍梨寛朝僧正云々、此說無子細歟、永延三年御灌頂之時、元杲僧都供一壇云々、片壇供養法事歟、可准例結緣灌頂等也、

應永二年八月上旬比、馳筆了、　堅濟

〔眞言傳法灌頂師資相承血脈〕○(上山城)

寛朝ノ房ニ御スル御

御齋會ニ准ズ

(朱書)「寛空弟子」

大僧正寛朝　遍照寺、付法十七人、

圓融法皇覺如、金剛法、

同(永延)三年己丑三月九日、庚寅、星宿、水曜、於東寺灌頂院、傳授兩部傳法灌頂職位、御誦經信濃布五百端、立幄一字、

大堂供米百斛

色衆僧綱以下八十三口

僧綱二口大僧都元杲、律師雅慶、　乞戒師一口熙樵大法師、入幕內著禮盤、　持金剛衆廿六口

持花衆卅一口　讚衆廿口　引頭二口　持幡二口　三綱　學頭二口

維那一口　十弟子

色衆以下給祿事

僧綱二口白大掛各一重、　乞戒師以下引頭以下上(脱)合七十九口、白大掛各(脱カ)領、　持幡以下三綱以上黃衾各一條、　學頭二口、維那一口絹各一疋、　十弟子各平重細長各一領、

〔三僧記類聚〕六　主上御灌頂事

永延三年三月八日、己丑、大納言朝光卿、於仗座召仰大外記致時云、明法皇(中原)(日脱カ)御灌頂、准御齋宮(會)、催誡諸大夫幷所司、又准行幸、差進左右近左右兵衞、御輿長、駕

輿丁等者、御寺中御輿料也、

九日、庚寅、法皇自圓融寺御幸東寺、有御灌頂事、左右大臣已下扈從、

〔東寶記〕四 法寶上　代々法皇於東寺御入壇例事

同抄（密教相承抄）云、圓融法皇○中略 永祚元年己丑三月九日、庚寅、星宿水曜、於東寺灌頂院、以法務大僧正寛朝爲大阿闍梨、傳受兩部灌頂職位、○中略

私云、永延三年八月二日、改永祚元、仍御灌頂年號、舊記永延永祚互載之、色衆八十三口、元杲權大僧都雅慶權律師、肩然法橋等也、嘆德元杲者前第三長護摩衆行、乞戒別當阿闍梨熙樣內供也、教授誰人乎、不見記錄、若雅慶歟、于時二長者、式部卿親王敦實息、寛朝舍弟也、寛朝僧正受法灌頂資也、尤當其仁歟、可尋之、左大臣雅信公以下、公卿十四人、自餘散位公達、盡員供奉、穆算僧都爲首、天台南京僧綱內供八人、勅別扈從矣、

〔ཏ ཁ 要祕鈔〕七 灌頂印可　問、灌頂印可諸家異說傍正有之耶、○中略

寛朝大僧正

朱雀院法皇進傳法灌頂兩部印信

「胎藏界　外縛五股印

印信

滿足一切智々五字明

ཨ ཏ ཁ ཧ ཨ

金剛界　大轉都婆印

普賢一字密明

ཏ」

私云、永延三年己丑三月九日、星水、於東寺灌頂堂御傳受也、此說又不違香隆（寛空）寺印信、圓成（叡信）寺以來四代嫡々傳受、全同不交餘義、稟承異他、仰而可信察、就中圓成遍照（寛朝）兩和尚、奉授寛平圓融二代之上皇灌頂、宗極之大事如斯、誰敢爲輕乎、此印信文、朱雀法皇者、圓融院御事也、約今御住名之（號アラシ）寛平法皇又用此之事有之、非常朱雀院御事、可悉之矣、

○百練抄、傳法灌頂日記、灌頂記、東寺王代記、仁和寺御傳、眞言傳等、異事ナキヲ以テ略ス、寛朝ヨリ、兩部灌頂ヲ受ケ給フコト、永延二年八月三日ノ條ニ見ユ、

十三日、甲午、石清水臨時祭、

〔日本紀略〕一條院　三月十三日、甲午、石清水臨時祭、

還立
舞人定

十四日、乙未、同還立、

〔小右記〕二月十八日、己巳、參攝政殿、定申石清水臨時祭舞人、○中略使新(源伊陟)中納言、被奏圓融院是事也、爲□仰者、

攝政穢ニ依リテ參入セズ
祭使

三月十三日、甲午、○中略是日石清水臨時祭、其儀如恆、攝政不被參入、去十一日彼殿有馬甕□、依其穢不被參云々、被馳御馬當門扉甕云々、御禊間、內(道隆)大臣候御後、祭使藏人頭公任朝臣、余被催、上達部執重盃參入、公卿內大臣、大納言、重信、朝光、道兼、中納言、顯光、重光、保光、伊陟、道長、參議、安親、余、未終事了、公卿各退出、

〔石清水文書〕五　田中家文書附錄宮寺緣事抄臨時祭下

(一條)同永祚元年三月十三日、甲午、石清水宮臨時祭也、

使左近衞權中將藤原公任朝臣○下略

大宰府、觀世音寺ヲシテ、僧明延ノ杷岐莊司職ヲ停メシム、

〔東大寺文書〕六第四十三號

府牒　觀世音寺

應停止僧明延杷岐庄司事、

牒、件庄金堂仁王長講佛僧供料永割充畢、仍須隨彼堂進退、早運納者也、而明

長講所ヲシテ莊司ヲシテ進退セシム

延號庄司、任心執行、曾無辨濟、加之、橫行庄內、苛責庄男等、庄田荒廢、尤在此妨云々、仍停止明延庄司職了、寺察之狀、永令長講所進退庄司等、令彼堂補任、事在與法、不得違失、故牒、

永延(三)四年三月十三日　少典秦在判

大貳藤原朝臣在御判

○大宰府、觀世音寺金堂仁王長講ノ佛僧供料トシテ、杷岐莊ヲ充ツルコト、永延二年十月二十五日ノ條ニ見ユ、

十九日、庚子、位記請印、中宮御讀經、

〔小右記〕三月十九日、庚子、參內、著陣、源(伊陟)中納言行位記請印事、具記在別、參宮御讀經發願、以參內、

北野天滿天神ノ託宣ニ依リテ、宣命使ヲ遣シ、音樂ヲ奏セシム、

〔小右記〕三月十九日、庚子、○中略左中辨在國(藤原)出陣、仰中納言云、只今北野天滿天神寄託皇(經子)太后宮、似庶幾行幸、其詞云、春日行幸神明已有歡悅、但宮中俄可有火者、若加護助、可攘災殃云々、攝政調備音樂可參入之由、可載宣命者、其使在國者、

行幸ヲ希フニ似タリ
內裏ノ火災攘フベシ

右大辨正四位下源致方卒ス、

〔小右記〕三月廿日、辛丑、右大辨致方朝臣去夜卒、明日上辭退大辨之狀云々、

四月十日、庚申、詣六條大納言殿、弔故右大辨事、依被於河原相逢緇悲朝臣、其次七々日法事、申置可奉堂達前之由、

七々日法事

十一日、辛酉、從大納言御許、使緇悲朝臣被來、昨日來弔之由、有仰前善詞、

五月九日、戊子、○中略右大辨致方七々法事、於圓城寺修之、令○此間闕文アリ送七僧前一前、有所惱不參入之由、差雅樂允守正、令申大納言御許、

官歷

〔職事補任〕圓融院五位藏人　右少辨從五位上源致方　貞元二二九補、天元三正四從四位下、

東大寺俗別當

〔東大寺別當次第〕俗別當從四位下行右中辨源朝臣致方　永觀二年三月七日符、寛和二年三月五日還著、于時左中辨云々、永延元年十二月五日又還著、于時右大辨、

世系

〔尊卑分脈〕源氏　宇多

重信

致方五歟　右馬助、拾作者、右大辨、正四下、一男也、母、朝忠卿女、永延三（三十九）一一卒、卅九歲、

致方ト實資

〔拾遺和歌集〕雜賀十八　中將に侍りける時、右大辨源致方の朝臣のもとへ八重こをはいををりて遣すとて、　右大將實資

流俗の色にはあらすうめのはな（うカ）　致方朝臣

珍ちようすへきものとこそみれ

行事藤原時光

二十一日、壬寅、仁明天皇國忌、

〔小右記〕三月廿日、辛丑、今朝喚使云、外記善言（小槻）令申云、明日國忌所可參入者、令仰云、初任之人、先行神事之後、可勤國忌役也、參內、相逢右少辨俊賢（源）之次云、今朝外記善言令申攝政云、昨今依物忌、坐飛香舍、明日國忌上（之カ）散用令書之由、令申之次、申汝申旨、仰云、新任人著國忌事、可無便事也、大藏卿（藤原時光）早可著行之由、可加仰者、即參飛香舍、觸示孝道（惟）朝臣、依御寢間、不能執申者、

行幸ノ事ヲ定ム

二十二日、癸卯、春日社ニ行幸シ給フ、明日、權大僧都元杲ヲ大僧都ニ任ズ、

〔日本紀略〕一條院　二月五日、丙辰、定春日行幸事、權中納言道兼（藤原）、參議安親（藤原）、左中辨在國等也、

大祓

三月十六日、丁酉、大祓、依春日行幸也、

還御

廿二日、癸卯、天皇行幸春日社、

春日行幸ノ始

廿三日、甲辰、天皇還御、今日凶會日也、

〔打聞集〕（下）○山口光圓氏所藏　春日ノ行幸、前ノ一條院御時ヨリ始ヱ、永延三年三月廿二日、

〔百練抄〕（四）一條天皇　三月廿二日、始行幸春日社、○（歴代編年集成、一代要記、柱史抄同ジ、）

行幸ノ事ヲ圓融法皇ニ奏ス

〔小右記〕二月五日、丙辰、參内、攝政被奏院云、○（中略）又來月廿三日可有春日行幸、依前年御願也、人々夢想早可被遂之由、頻有其告、仍可被果、

行幸不快ノ勘文

十三日、甲子、早朝參攝政殿、來月春日行幸不快之由、光榮（加茂）朝臣進勘文、以余被遣左府（藤原実資）、被定申旨無一定、但陰陽家進不快勘文、無指期、被退出（ヲ）間、如何者、又有御占、依可下奉之宣旨、又參左（藤原実資）、

御占ヲ行フ

十八日、己巳、參攝政殿、定申○（中略）春日行幸舞人等、使新中納言（源俊賢）、被奏圓融院是事也、

舞人定

三月十二日、癸巳、參院、良久候御前、仰云、春日行幸日御物忌重疊、猶不快事也、就中兩度夢想不宜、仍可被延彼日之由、示送攝政許了者、

法皇行幸ヲ延引スベキ由仰出サル

十四日、乙未、傳聞、春日行幸停止事、昨日被下宣旨、上卿左府（藤原実資）辨扶義（源）奉下宣旨

行幸停止ノ宣旨ヲ下ス

不快ノ夢想アリ

云々、

十五日、丙申、參攝政殿例講說、（講師清胤、同律師寛因）内大臣（道隆）以下公卿多參入、攝政被命云、春日行幸、依御物忌相重、可停止之由、有院仰事、仍下宣旨了、而有不快之夢想、又有如示現怪（異カ）暴事、猶可有行幸歟、依有事疑、問陰陽家、所申縱横、又令問可令奏院也者、公卿不被申一定、黄昏罷出、

行幸ノ由ヲ法皇ニ奏ス

十六日、丁酉、○（中略）攝政使頭（道綱）中將、猶可有行幸之由、被奏院云々、

試樂

廿日、辛丑、參内、春日行幸試樂、舞人八人、舞□□（道綱）二人不參、一舞四位二人、（左馬頭正光、右少弁道信）不出御御座、藤中納（廉光）言、源中納言、三位中將（隆光）候御前、

廿二日、癸卯、今日春日行幸、卯時參内、先是右大臣（隆光）、源中納言（安親）、修理大夫候陣、自今曉天霽雲收、神感揭焉、辰一點（陰陽家擇申卯時云々）乘輿（皇太后同輿）、經日華、宣陽門、更自中隔經承明門前、出給自宜秋、藻壁門、自大宮大路南行、更東折經二條朱雀等大路、到給美豆頓宮（午刻）、桂河淀等結橋（諸國所造）、自御舟渡給、御輿居舟、舟上敷板供御膳、公卿及諸司就食、午終、乘輿起頓宮、於奈良坂中、所司執燎、乘輿比到東大寺之西面大門、各發亂聲（北大門南高麗、唐）、奏音樂（北大門南高麗、唐）、東大、興福寺等大門、及其道至鹿苑院、皆立柱松、照臨幸道、戌奏音樂、又山階寺東面二大門、又發亂聲、

行幸ノ由ヲ法皇ニ奏ス

試樂

行幸

皇太后御同輿

御順路

美豆頓宮

奈良坂ニテ所司燎ヲトル

三刻、著給社頭御在所、著到殿、假敷板敷、構高欄、所司裝束不具記、此間余在公卿座、御前儀不見、傳聞、有御禊事、舞人引御馬、並發歌笛聲、此間召公卿、次第參入、各執花勝、（樺）給使（權大納言道兼也、）及舞人陪從等、（乍立給之、）各歸宿、（余宿內藏寮季太原庄、）使□

社頭ノ御座所ニ著ク　御禊　御禊ノ公卿藤花ノ使ヲ舞人ニ等ニ與フ興福寺ノ別當眞喜ノ前物ヲ送ル

及舞人陪從等、參向社頭、其間事不知、被奉神寶音樂東遊神樂等歟、山階寺別當僧眞喜送前物、（高器六本、）衝重廿前、屯食一具□草、（每上達部送件物、右大臣前十二枚、內大臣九、大納言、參議六本、衝重又有等差云々、屯食卅具、有可行諸陣之思、然而依無便宜、令申事由於攝政、作解文奉攝政殿、從彼殿有被宛行云々、后宮女房又有送物等云々、）今夜神主禰宜等加一級、給位記云々、右大臣奏宣命、

神主禰宜等ニ一級ヲ加フ　右大臣宣命ヲ奏ス

廿三日、甲辰、辰時自宿所、參攝政殿御休幕、（是興福寺所儲、）先是右大臣、內大臣被候也、小選公卿侍臣參著、權大僧都眞喜候矣、公卿以下僧綱皆有饗、饂飩女廿人、（理髮著威儀裝束、尼、草、不似例儀、徒被□申件女裝束於氏皇后公卿、或許容、或不給之、）打了之間、朝大夫等執祿被之、擧□樂有大唐高麗各二曲舞、（賀王恩童四人、蝶童四人、）此間攝政喚藏人頭公任、仰云、以權大僧都元杲爲正、以權少僧都眞喜爲大（元杲轉正之慶、還非賞進、眞喜依山階寺別當、殊所被抽賞歟、）者、公任朝臣蒙仰、寄右大臣後仰此由、大臣目元杲、隨進丞相許、仰此由、余被催右大臣、獻盃於攝政、攝政放盃右大臣之後、余請間、申昨今天氣朗明、實似有神感之由、攝政曰、心中欣悅不少、又往代有如此之事乎、帝后相率參賀茂社、猶可謂大幸、汝向

攝政等御座所ニ參入ス　大臣以下氏花ノ藤ヲ下頭ニ挿シテ舞フ人ト　饂飩女ニ祿ニ給フ和歌ヲ詠ズ　還幸鈴奏及ビ名謁　兼家ノ述懷

後有如之事、可參賀乎如何者、若是神告歟、心底欣々、敢不語人、卽攝政相引公卿參入御在所、氏大臣以下挿藤花於頭、兩丞相以下六人、四位本舞人二人、列立御前、（陪從發歌笛聲如例、）主上卷簾覽之、攝政候御前、舞畢、召公卿於御前、此間有勅喚饂飩女廿人、令打之、給祿、了攝政以下公卿五六輩、於御前讀和歌、次當國河內獻物、右大臣問云、（此間不聞、慥、）次公卿以下扈從、諸衞給祿、有差、了寄御輿、（巳時、）申時著美豆頓宮、山城國獻物、了寄御輿、始有警蹕、亥時還御、（經陽明、建春、宣陽、日華等門、）有鈴奏、次公卿名謁、今日右大臣、內大臣車、左大將（御光、）淵醉不扈從、右大將（御時、）素依穢不候、右大臣昨日從七條邊乘車候之、於車中夢云、乘馬可扈從者、仍驚騎馬候之云々、攝政乘唐車、（新造也、）供奉上達部、右大臣、內大臣、大納言朝光、（大將、）道兼、（行事、）中納言顯光、保光、公季、伊陟、道長、三位懷忠、參議下官一人而已、參議安親先行幸向社頭、依行事也、右中辨在國同向社頭、今日兩人扈從、左大辨懷忠一日俄爲行事、左少辨扶義依右大辨喪假停替、或人云、非氏尙書、神明所被停歟云々、廿四日、乙巳、扈從行幸之後、心神不宜、然而左右相扶參院、奏行幸雜事、早參入之由、再三有被仰事、遼遠行幸平安令遂給事、又々參入可祈申者、過三品（遼覺）服可參入之由奏聞、

供奉ノ上達部行事　藤原實資行幸ノ雜事ヲ院ニ奏ス

〔中右記〕承德元年三月廿九日、癸未、○中略　春日行幸九ヶ度

一條院　永祚元年三月廿二日、癸卯、同廿二日別當眞喜任大僧都、元少、社司三人、

〔京都帝國大學所藏文書〕狩野亨吉氏蒐集文書七

神社行幸條々

五位史二人相並時、下臈五位史奉行例

一條院

永祚元三廿二行幸春日社、

左大史正五位下大春日良辰

右大史從五位上多米國平

國平、四月五日拜正五位下、春日行幸行事賞、

行事ノ史

〔春日社行幸歷代記〕○千鳥祐順氏本　御神寶種種調

一條天皇始、

永祚元年己丑三月廿二日行幸、

造宮預外從五位下中臣殖栗連助滿

社司ノ勸賞

神宮預外從五位下中臣殖栗連時理

神主從五位下大中臣朝臣兼興

各賜榮爵、○春日社行幸御幸部類、代々行幸記、春日社行幸記同ジ、

〔僧綱補任〕○三興福寺本　權少僧都眞喜　三月廿三日任權大僧都、春日行幸之次、兼法務、

兼家藤原氏ノ繁榮ヲ希ヒ行幸ヲ奏請スト、ノ說

〔行幸並長者御下向引付〕○內閣記錄課所藏　續敎訓鈔第十四卷第三云、

春日行幸錄

而ヲ一條院ノ御時、御祖父兼家藤ノ末葉ノサカヘム事ヲネカヒ、代々此氏ヨリ、御門后ヲモヲシタテマヒラセムノ御志マシ〳〵ケルニヤ、永延三年ニ始テ申行ハセ給キ、○上略

代々行幸次第

一條院　永祚元年三月廿二日始之、

別當寂園院眞喜權別當

此行幸ノ御トキ、勝明（時カ）ニ月日ノ吉否ヲ可勘申ノ由被仰下ケルニ、年中ニハ、九月廿日ノ外ハ不宜ト奏申タリケレハ、御門キコシメシテ、次年ノ二月ニ整春ニ延引ス

行幸ノ月日ヲ勘申ス

道長ノ反對

行幸ハ可有トテ、其年ヲスコサセ給ケルヲ、御堂（道長）ノ大殿、コハ心ヘヌ御事カナ、ナトカ勝算（晴明カ）カ注申旨ニマカセテ、九月ニハミユキナカラムトサセ給タリケルニ、太子（居貞親王）ノ給フ事アリ、春夏ハ農夫ヲツカウヘシ、秋冬ハツカウヘカラス、イトマナキヲリフシナリトイマシメ給ヘリ、シカルニ九月ニ行幸アラハ、古吉例ニシタカヒテ召仕ハヽ、農夫ノ數イカハカリトカ思給、サレハ彼需ニモ當スヘキナレハ、明年春ト思召ルヽナリト、仰ノアリケルトキ、殿御衣ノ御袖ヲ御面ニヲヽイテ、重テ申サセ給事モ侍ラテ、ナク〳〵御退出アリケリ、返々アリカタキ御メクミナリケリ、

皇太子ノ御意見

○春日社記、濫觴抄、二十二社註式、十三代要略、拾芥抄、異事ナキヲ以テ略ス、行事人、禰宜等ノ位記請印ノコト、四月五日ノ條ニ見ユ、

二十四日、乙巳、從三位藤原遠度薨ズ、

〔日本紀略〕一條院　三月十二日、癸巳、從三位藤原朝臣遠度出家、廿四日、乙巳、入道從三位藤原遠度薨、號北野三位、○一代要記同ジ、

出家

北野三位ト號ス

〔小右記〕三月十三日、甲午、○略中今夜北野三位、遠度出家云々、廿四日、乙巳、參院、○略中早參入之由、再三有被仰事、○略中過三品服可參入之由奏聞、○略中昨日寅時許、遠度法師逝去云々、過行幸事、人々感悅感悅、云行幸以前、已而家人祕不漏云々、難知眞僞耳、

四月二日、壬子、○略中戊時出東門著帶、（右北野三位服、）今日請從父弟暇三箇日、

官歷

〔公卿補任〕六　非參議從三位藤遠度　故右大臣師輔公七男、母常陸介公葛女、永延元年七月十二日敍從三位、元右兵衞督止之、永祚元年正月廿九任播磨權守、同三月十三日出家、廿四日薨、

世系

〔尊卑分脈〕藤氏北家

師輔

- 遠度（五／從三位、右馬頭、播磨守、春宮亮、右兵衞督、／母常陸介公葛女、永祚元三廿四薨、號小（北カ）野三位、）
  - 高賴（從五下、遠江權守、／母從三季（位脫カ）兼女、）
  - 尋空（少僧都、妙香院、／母、少僧都、）
  - 朝源（仁／母、粟田關白妾、）
  - 女子（母、參議廣業（兼ヶ）室、）
  - 女子

二十八日、己酉、季御讀經、

永祚元年三月二十八日

結願

〔日本紀略〕一條院　三月廿八日、己酉、季御讀經、

四月二日、壬子、御讀經竟、

見參

伊賀追捕使以忠犯人ヲ逮捕ス文信鎭西ニテ正國ノ父母同胞ヲ殺ス

四月小　辛亥朔盡

一日、辛亥、旬、平座、

〔日本紀略〕一條院　四月一日、辛亥、旬、今日平座、見參、

安倍正國、藤原文信ヲ斬ル、

〔小右記〕四月四日、甲寅、文信朝臣、從南山歸退間、於朴尾、爲敵以太刀被打損頭云々、仍送使於彼宅、令問勞、稱未還之由、事已有實、然而非重瘡云々、

五日、乙卯、〇中略　文信朝臣、去月參金峰山、退歸之間、於朴尾、去朔日、爲敵以劔被打損兩所、然而不及終命、

六日、丙辰、〇中略　及傷文信朝臣、安倍正國、伊賀追捕使以忠朝臣捕獲云々、則右衞門尉惟風（藤原）、被切左右手指、並折足云々、件男爲文信朝臣、於鎭西、被殺父母兄弟姉妹、爲報其事、伺隙云々、

七日、丁巳、差使、訪尾張守文信朝臣、〇文信、尾張守ニ任ズルヲト、本月五日ノ條ニ見ユ、疵殊非可痛者、

〔參考〕

〔尊卑分脈〕藤氏長良卿孫忠轉

〔文信〕（ノリアキラ）鎮守府將軍、從四上、尾張守、右馬權頭、母讃岐守子高女、イ義ー、

〔惟風〕（俗ー藏）從四上、備中、武藏等守、母筑前守清原中山女、

四日、甲寅、廣瀨、龍田祭、

〔日本紀略〕一條院　四月四日、甲寅、廣瀨、龍田祭、

五日、乙卯、敍位、除目、

〔公卿補任〕六

權大納言從二位藤道兼　四月七日（五カ）正二位、春日行幸行事賞、超顯光、

參議正四位上藤安親　四月五日從三位、春日行幸行事賞、

正四位下藤懷忠、五十五、左大辨、近江權守、十月（四カ）〇一代要記、十二月ニ作ル、五日從三位、去三月春日行幸行事賞、進所敍也、

〔公卿補任〕六　永祚二年　非參議從三位藤在國　同（永祚）三四五正四下、春日行幸行事賞、同日右大辨、

〔公卿補任〕六　正曆二年　參議正四位下藤伊周　四月七日（永祚元年）（五カ）右中辨、

〔公卿補任〕六　正曆三年　參議正四位下平惟仲、四十九、同年（永祚元年）四月五日正四位下、造淀浮橋賞、同日轉左中辨、近江介如元、依加階超權左中辨忠輔、同日昇殿、

春日行幸行事賞

淀浮橋ヲ造ル賞

昇殿

〔外記補任〕二　致時任大外記兼大博士例、大外記從五位下中原致時　四月五日敍從五位上、春日行幸行事賞、

〔日本紀略〕一條院　四月五日、乙卯、除目、

〔小右記〕四月五日、乙卯、〇中略今日有敍位、除目云々、春日行幸上卿參議史外記等、又彼所檢非違使、造浮橋國々司云々、其中有保遠朝臣加級、未知其由、又有除目、右大辨在國右中辨惟仲、近江介如元、右中辨伊周、左少將如元、右少史肥田維延、齋院主典高橋爲陳、中宮大進正信、圖書權頭大江爲基、元召放、攝津守、而被不知其由、攝津守高橋敏忠、左衞門權佐如元、尾張守（藤原）文信、元命朝臣依百姓愁停任、〇尾張ノ郡司百姓等、元命ノ非法ヲ訴フルコト、二月五日ノ條ニ見ユ、

尾張守藤原元命ヲ罷ム

五月廿九日、戊申、參內、新源中納言（俊賢）、勘解由長官（藤原佐理）、修理權大夫（藤原安親）參入、春日行幸行事人、禰宜、及觸其事人々、又他位記等、合廿卷捺印、中務卿不參入、仍以左近中將正（源）清、爲輔代、以中將爲輔代事、非無先跡、源中納言、以外記令申攝政殿、所被行也、秉燭之後、請印了、退出、

位記二十卷

請印

〔京都帝國大學所藏文書〕狩野亨吉氏蒐集文書七

神社行幸條々〇中略、全文ハ三月二十二日ノ條ニ收ム、

右大史從五位上多米國平　國平、四月五日拜正五位下、春日行幸行事賞、

八日、戊午、灌佛ヲ停ム、

〔日本紀略〕一條院　四月八日、戊午、止灌佛、依神事也、

〔小右記〕四月八日、戊午、今日內御灌佛停止、依杜平等使立也、不奉布施錢、但奉院錢二貫、杖頭、早朝灌佛賜布、未時出河原除服、

神事ニ依ル　布施錢ヲ奉ラズ　圓融院ノ灌佛

十日、庚申、平野祭、

〔日本紀略〕一條院　四月十日、庚申、平野祭、

〔小右記〕四月八日、戊午、今日內御灌佛停止、依杜平等使立也、〔略〕下

杜本平野等ニ使ヲ遣ス

十一日、辛酉、擬階奏、

〔日本紀略〕一條院　四月七日、丁巳、擬階奏延引、

延引

十一日、辛酉、擬階奏、

〔小右記〕四月六日、丙辰、〔略〕中　外記史生持來擬階奏、挿書狀、

十四日、甲子、吉田祭、

〔日本紀略〕一條院　四月十四日、甲子、吉田祭、

〔小右記〕四月十三日、癸亥、〔略〕中　喚使來傳、外記正輔仰云、明日吉田祭分配右

分配

大將（藤原）也、而被仰云、下官初可著行神事之由、一日有消息、仍可令申事由者、則令仰可行之由了、

十四日、甲子、時微雨、早朝外記（小槻）善言來云、今日吉田祭事、有令催行、而內侍有障、不可參入者、罷逢藏人知光、又々可觸宣、如此之間、上先令著社給、不具時自引（脫アラン）、時刻、事具了間、令著給可宜者、事具了後、可申案內、隨則可著之由仰之、未時許來云、內侍已下參入之由、藏人知光申者、仍未終向社頭、先著々到殿、西面座後立

□（冊）風二帖、敷高麗端疊茵等、權左中辨忠輔（藤原）及氏大夫外記史等參著、氏人等南北對座、辨外記史北座、勸學院別當及六位以下座、在西一間、東面、先辨備饗饌、用臺盤、上前又同、是皇太后宮儲也、被儲、南廡西第一二間敷疊、爲氏六位無官座、此間使々參來著座、南座、忠輔朝臣申上云、以其々、令奉仕所掌者、余揖、辨稱唯、召勘解由判官惟文、宮內允師範、稱唯、仰云、所掌奉仕者、稱唯、木工寮進置簡二枚所掌前、官掌進硯筆等、有官無官氏人等令著到、惟文申著到人數於辨、々帖取、惟文稱唯、了辨申上、余揖參、辨稱唯、此間宮司勸盃、外記善時持來神主卜串、納筥、先著膝突、余仰云、開、外記置筥地、開卜串、乍筥進之、三枚、以爲度朝臣、仰可令奉仕之由、卽返給也、歸座仰云、忠輔朝臣仰惟文、令定申倭舞六位二人、定申々辨、々帖取、惟文稱唯、辨獨點（豫カ）

皇太后饌ヲ儲ケ給フ　卜串　倭舞

定五位二人、相加申上、余揖、稱唯、令召仰、各稱唯、三獻了居、□物立箸、了忠輔朝臣定錄事申行之、余令召勸學院學生等、已申不參之由、黃昏近衞府使來、此饗在著到殿南座、內侍遲參、仍敷座令催、戌時許參入、仍起於垣內洗手、余昇御棚□下、氏人等昇、此間小雨、仍不著庭中座、改敷於御幣殿余座者、在前半疊、氏大夫六位座云々、此間內侍掌侍藤原儀子、下自車、參御社內、小選歸、余及氏人等取幣帛、兩段再拜、神人來授御幣受趣了、神殿門前敷神主座、爲度朝臣著座、讀祭文、以木綿纏□此間馬寮御馬牽立、次氏人兩段再拜、拍手四度、次著直會殿、南向、氏大夫等座絕廉同南向、其後有□六位座、神主外記史座、在南廂、東向、此間引廻御馬八箇度、大炊寮立机、后饌、造酒司獻酒三度、余敢飲、即返給盃、以外者、如例流巡、了立箸、近衞府使供歌舞、無琴、依未儲社頭、五位二人、六位二人、進庭中座、倭舞也、五位二人先進、次六位也、了余召々使二聲、召使稱唯進立、余問云、難召史、申職姓名、宜召宮內者、喚使稱唯退出召之、宮內允師範進立、同問、申官姓名、依夜也、仰云、御物堅良仁加給、稱唯退歸、召膳部、召仰、先是皆差饌、外記插見參於書杖持來、取之被見、了自忠輔朝臣進來、則下見參、辨目史、肥田維延起座、就辨後、給見參、了余起座退出、皇太后宮不被儲祿、官掌一人、召使二人、相送之、儲小饗、各給疋絹、時亥終、今曉夢想內有春日明神感應告、今日初就神事也、

幣帛
祭文
獻酒
歌舞
見參

二十日、庚午、齋院御禊、

〔日本紀略〕一條院　四月廿日、庚午、賀茂齋王（斎子）禊、上卿不參、參議行之、

〔小右記〕四月十九日、己巳、參內之間、大外記致（中原）時朝臣來宅云、攝政殿仰云、明日御禊並祭日、參齋院、可令催行雜事、就中明日上卿皆有障、不可著行也、右大將一人無指障也、而從昨日有犬死穢、不可著行、他上卿皆以輕服、明日參院、可催御禊事、但祭日右大將可參入、相俱可行者、則傳置仰事、退去云々、

廿日、庚午、早朝參攝政殿、令申昇著齋院之由、被仰云、無懈怠可催行者、仍參齋院、已時許、著客殿座、東向、以北爲上座、後旋斑幔、上卿座高麗端疊上敷圓座、今日上卿有障不參、先是右大辨（藤原）參議座同端疊敷圓座、在國在座、件座在母屋坤角間、迫柱敷高麗疊圓座、末□件座了被定敷歟、大辨座不□大相府（道長）爲大辨之時、被行此事、是自中辨被行齋院事之間、俄通、祭間被任大辨、依有事煩、所被行也、其外無他例、今彼例（脫アラン）、又所被行也、而其座不詳、上卿皆在西庇、大辨在母屋、無便、當前駈座坤□□□前駈座在母屋、其饗用臺盤、南北相對、高麗端疊敷圓座四枚、垣下殿上人座在北庇、所衆座在東庇、外記座在南庇、于時從藏人所被送左府（藤原）牛、肥牛等、山城、近江、即令引廻見之、各令頒行、藏人所前駈參入著座、雜色右近將監源信參著、次第使右馬允文寶（宗方）重基下、右大辨在國上、前々有論事也、藏人所前駈六人、著衞府前駈下、然而雖藏人所前駈、又是公家之所被差遣也、雖衞府前駈、事又相同、何更著次第使下乎、邑上

先皇御時各有所論、仍著垣下藏人所衆座、信可著垣下座之由、大辨敎喩、仍起座著垣下座、今廻廬行事人非可仰事歟、午終事具了、未始寄御車、余及辨列立、御於梅樹下、藏人所前駈寄御車乘給、了余及辨史等相率退出、余見物是先跡也、行事人爲見糺次第之違□、未終許齋王度給、見了卽歸、今日饗內藏寮、上達部前高坏、大辨以下皆執之、

齋王渡御內藏寮饗饌ヲ備フ

二十二日、壬申、圓融法皇、藤原實資ヲ賀茂社ニ遣シ、天皇ノ御爲ニ祈ラシメ給フ、

實資奉幣

〔小右記〕三月廿四日、乙巳、〇略中參院、〇略中又有仰事、賀茂、石清水等御祈願等事、先日依仰作祭文、所令申之、重々御願、是奉爲主上、

實資御祭文ヲ作ル

四月廿二日、壬申、〇略中丑時許參賀茂、騎馬密々參入、法皇奉爲公家、以下官爲使、有被祈申事等、事趣在祭文、余所作也、先日令奏覽了、參御社、先讀申祭文、次奉私御幣、禰宜等給膝突料布、

〇法皇、實資ヲシテ、石清水八幡宮ニ祈ラシメ給フコト、正月十一日ノ條、及ビ五月二十六日ノ條ニ見ユ、

二十三日、癸酉、賀茂祭、

警固

〔日本紀略〕一條院　四月廿一日、辛未、警固、〇小右記、二十二日ニ作ル、

左大臣雅信警固ヲ行フ

廿三日、癸酉、賀茂祭、

解陣

廿四日、甲戌、解陣、

祭使行事

〔小右記〕四月十九日、己巳、〇略中大外記致時（中原）朝臣來宅云、攝政殿仰云、明日御禊並祭日、參齋院可令催行雜事、〇略中但祭日右大將（齊時）可參入、相俱可行者、則傳置仰事、退去云々、

廿二日、壬申、早朝參太相國（賴忠）、見行明日祭使雜事、晩頭罷出、今日左府（雅信）被行警固事、納言以上皆輕服、右大將一人非服、而至今日有穢觸、仍所被參行云々、

廿三日、癸酉、早朝參太相府、頭中將（公任）爲祭使、出立自西對、未終使陪從著座、先是勘解由長官（佐理）、修理權大夫（安親）、修理大夫、余在座、余爲齋院行事、可早參彼院、而依太相國命、暫在此座、執二獻盃、參齋院、自茲以前、右大將被參齋院、□見餝馬肥牛等、未終許、寄御輿、右大將、余進御前、列立梅樹西頭（在御前巽方）、藏人所陪從等、懸手於御輿乘給、了右大將、余、行事、辨、史等、相率出、將軍余見物、未終齋王渡給、傳聞、祭使所民部卿（文範）、左兵衞督（時中）訪到、

齋院渡御

廿四日、甲戌、早朝參太相府、午時使中將還來、四位五位等、執迎盃如例、使陪從

祭使還立迎盃

舞

飯先居（有權議所居也）著後一獻了、居粉熟、今日只舞求子、自餘事如恆、左衞門督、右衞門督、勸解由長官、修理大夫、三位中將在便所、攝政殿御馬口付舍人男、給絹二疋云々、頗過差也、

十番

馬出勅使

標勅使

舞

負態

馬ヲ撰ビ遲速ヲ試ム

二十五日、乙亥、攝政兼家、二條第ニ競馬ヲ行フ、

〔小右記〕四月廿五日、乙亥、（略）中從攝政殿有召、即參入、出給馬場殿、有競馬十番、內大臣（道隆）、左大將（朝光）、左右頭、公卿以下、殿上侍臣相分、馬出勅使伊賀守陳（藤原）政朝臣、少納言時方、標勅使方基、左勝負一、倉卒左近府生秦氏則舞龍王、攝政被命云、廿八日有負態事者、入夜罷出、

廿七日、丁丑、依召參攝政殿、公卿多參入、明日駒競、左右方公卿等也、各有相定事等、內大臣、藤中納言（顯光）、右衞門督（道長）、修理權大夫（安親）、余相俱向馬場殿、撰定人々馬、試遲速、入夜罷出、

廿八日、戊寅、（略）中今日競馬事、右衞門督、修理大夫、余方人々相率、向北御厩、令行方雜事、此間攝政出給馬場殿、公卿及侍臣座、在馬場殿、諸大夫在北廊、未時左馬十疋、騎者著末額打懸袴等、（左近府）經馬場殿後向馬出、良久之、左右兩丞相被參入、此間時々微雨、攝政著直衣下襲、御前物左大將所儲、（銀器、列鏤餝折櫃四合、許、青打敷等、

毛付文

勝負

被物

兼家直衣布袴ヲ著ス

法仁辭退ノ替

丞相以下諸大夫以上、皆負方設饗、攝政不用前物、令立懸盤二脚、兩丞相前脚也、此間左方頭中將（衍）將公任、取毛付文奉攝政了、籌指左府生久明、依雨居階下地、（帶弓箭、有權議、不用胡床、唯用圓座、）良久右方毛有（付カ）文、辨少將伊周奉之、右籌指著座、左右御馬北上了、次召馬出標勅使等如例、（陳政朝臣實正標政歟、）一番、（左、近將曹御春清助勝、右、近將監下毛野重行、）二番、左、近將曹尾張兼時勝、右、近府生下毛野公助、左府脫衣給兼時、此間右衞門督道長、更喚清助、脫衣被之、是一番者也、事頗延廻如何、三番云々、

〔日本紀略〕（一條院）四月廿八日、戊寅、攝政二條第競馬、

〔裝束抄〕（直衣攝家）（布袴）永祚元年四月八日、（廿脫）法興院攝政、（兼家）競馬ニ直衣布袴ヲモチユ、（有職抄、異事ナシ、）

傳燈大法師位貴慶ヲ東光寺座主ニ補ス、

〔朝野群載〕（十六補東光寺座主官牒）（佛事上）

太政官牒　東光寺

應補座主權少僧都法仁辭退替事

傳燈大法師位貴慶、（年廿三、萬十六、）天台宗、延曆寺、

右得彼寺去三月十一日解偈、件座主職、善祐大法師門徒、補任既經數代也、今

貴慶ハ平景ノ弟子

件貴慶爲門徒之内、故座主平景大法師之受法弟子也、顯密相兼、足爲貫首、望請官裁、因准舊例、以件大法師、補任座主權少僧都法仁之辭退替、將令執行寺務者、權中納言從三位兼行右衞門督藤原朝臣道長宣、奉勅依請者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

永延三年四月廿五日　　正五位下行左大史多米宿禰（國平）

二十六日、丙子、官符ヲ下シテ、榮山寺領ヲ不輸租ト爲シ、元ノ如ク、同寺ノ常燈修理料ニ充テシム、

〔榮山寺文書〕（色川三郎兵衞氏本○常陸）

太政官符　大和國司

應任公驗永令領掌榮山寺田畠等事

十市郡捌町參段陸拾步　四至東限畔、南限卯酉畔、西限河、北限近江河、

十市郡ノ田

西十六條五里七坪一町　八坪一町　十七坪一町　十八坪一町

十九坪一段　廿坪一（○天喜二年寺牒、二ニ作ル、）百卌步　十七條五里十一坪一

町　十二坪一町　十三坪一町　十四坪一町　廿三坪三百步　廿

四坪二百卌步

尙侍藤原鮒子ノ施入

宇智郡ノ田

僧觀軌ノ施入

宇智郡ノ畠

尙侍藤原鮒子施入、去寶龜十一年正月十三日、卽書云、件田是去寶龜九年十一月廿七日奉勅被省符所給也、卽省符偈、被太政官去八月四日符偈、件地勅授尙侍正三位藤原朝臣鮒子者、右大臣（大中臣清麿）宣、奉勅、省宜承知、依宣行之者、國宜承知、授行之、符到奉行者、而今鮒子勞膳陟日月、仍上奉爲聖朝寶祚、下爲鮒子滅罪生善、副省符、永燈明料、施入於氏（武智麻呂）大祖建立伽藍榮山寺者、

宇智郡田伍町陸段

河南三條六里廿五坪五段　廿六坪一町　廿七坪一町　廿八坪一

町　廿九坪一町　卅坪四段　卅一坪七段　卅二坪五段

僧觀軌、去延長二年三月十一日施入、卽狀云、以先祖治田、永修理料、施入氏伽藍榮山寺者、

同郡畠貳町玖段

阿陀條四里三坪一町　四坪六（○天喜二年寺牒、三ニ作ル、）段　十三坪五段　十

六坪四段　二里二（○二里二、天喜二年寺牒ヲ以テ補フ、）段　三坪四（○三坪四、天喜二年寺牒ヲ以テ補フ、）坪九段

永祚元年四月二十六日

廣湍郡ノ田畠

右大臣豐成ノ施入

土人妨ヲ致ス

廣湍郡壹町貳段田畠

十七條二里六坪四段　十八條二里十二坪七段三百歩

右大臣從二位藤原朝臣豐成、去天平神護元年三月廿三日施入、卽書云、依大祖(武智麻呂)贈太政大臣公遺宣、永常燈修理料、施入建立伽藍榮山寺者、

右得彼寺去寛和二年三月二日解偈、件田畠施入之後、年序久、因茲土人致妨、稱己治田領畠、不辨地利、仍難叶本願之企、望請官裁、賜官符於大和國、爲不輸租田、省國宰收公、去土人妨、如本願充常燈修理料、將鎭護國家者、正三位行中納言兼左衛門督源朝臣重光宣、依請者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

左少辨正五位下源朝臣(扶義)判　　右大史正六位上尾張連判

永延三年四月廿六日

奉行　同年(永延三)五月廿五日

守藤原朝臣判

宇智郡奉行

行事內判

分配

(別筆)「右有大朱印六ヶ所、小朱印九ヶ所」

二十九日、己卯、贈太皇太后安子國忌、

〔小右記〕四月廿八日、戊寅、召使紀吉村來云、外記善言(小槻)申云、明日國忌、分配侍從宰相(誠信)、而日者煩痢病、不可參入、仍申事由於攝政、余早可著行之由、可令仰者、余仰云、分配人若有故障者、可相讓他人歟、而今有指仰、不可申障由仰了、卽參攝政殿、以修理權大夫(安親)、令申案內、被仰云、外記不申其由、隨又無所依者、仍召外記善時(言力)、問其案內、申云、無令申攝政殿、只依侍從宰相殿障、以召使令申其由、召使申誤歟者、仍不可著行由仰宣了、

圓融法皇、御齋食ヲ設ケサセラル、

〔小右記〕四月廿九日、己卯、參院、左大臣(雅信)、左大將(朝光)、春宮權大夫(公季)、余候御齋食座、大(寛朝)僧正及僧等侍臣同候、晚景退出、

五月（大盡 庚辰 朔）

五日、（甲申）復任除目、

〔小右記〕五月五日、甲申、參攝政殿、（道長）權大納言、修理（安親）權大夫、頭中將、（公任）是彼候御前、匠作相公相共參內、右大將（實資）源兩中納言、（保光）左兵衛督（時中）侍從宰相等、先是在陣、小選將軍武衛拾遺退出、中納言（保光）召外記（小槻）善正（宮下何ヶ）仰云、復任也、候之哉、申候由、卽召也、此間起座、著南座、善正持復任文、納筥、參入間二省候、不申試之由、上卿一々見了、以外記令奉攝政殿、良久之歸參召硯、善正取硯、納筥、置修理權大夫前、納言目匠作、進給外記書出文、還著本座、書折□如除目、（太政官奏其國々）只一人也、件紙同入硯筥、書了□書出文、返入硯筥、取召名奉上卿、召外記、仰可召式部之由、頃外記進小庭申云、式部司候者、上ミ召ミ者、稱唯出、又申如初、上詞同、又申如初、上詞同、（三度）式部丞擧直著靴、入自敷政門、立小庭、上云、持來、こう、稱唯著膝突、上卿（北面）以左手給召名、擧直置笏給之、退立本所、上云、任給（たまへ）者、稱唯退出、（召名須書、又□而此事□頗有猶氣、）奉攝政殿、了脫靴、擧直又入自敷政門、進自小庭、著膝突、上給宣旨、擧直給之、直退出、（兼脫カ）京官復任者也、是彼云、外記隨上儲、可令參入歟者、外記進申云、兵部司候者、上詞同、式部外記又申上同、又外記參入、外（記說カ）欲申是彼云々、重給宣旨之時、唯一度申

外記復任文ヲ進ム

式部候ス

召名ヲ給フ

宣旨ヲ給フ

兵部候ス

召名ヲ給フ

而重申不可然也、仍不申退歸、卽兵部丞參入、如式部、又給召名、了退歸、又喚外記、令披覽筥等、了兩納言、匠作、余等退分（出カ）時及黃昏、

七日、（丙戌）祭祀國忌ノ日、勤役ヲ闕怠スル公卿ノ處罰ヲ定ム、

〔壬生文書〕（○宮內省圖書寮所藏）

諸祭幷大祓國忌等公卿事、

正二位行權大納言藤原朝臣仲光宣、奉勅、祭祀國忌者、是朝家之所重也、敬神尊親之義、既存禮經之故也、而諸卿動稱故障、不勤分配、爲臣之道、豈可然乎、自今以後、若故障不明、當役空闕者、依永延三年五月七日宣旨、一年封戶半分停之、（○中略）

應永二年正月廿八日　大外記兼博士中原朝臣師豐奉

○是ヨリ先、處罰ヲ定ムルコト、寬和二年十二月五日ノ條ニ見ユ、

僧綱ヲ任ズ、

〔僧綱補任〕（○三興福寺本）

小僧都陽生　五月七日轉任權大僧都、

權小僧都穆算　五月七日轉正、

封戶ノ半分ヲ停ム

律　師　勝算　五月七日轉任權大僧都、
　　遲賀
律　師　覺慶　五月七日轉任權小僧都、
權律師　信慶　同日轉任權小僧都、
　　法忍　同日轉任權小僧都、
　　元眞　五月七日任、眞言宗、東大寺、

〔僧綱補任〕○乾德川昭武氏本　權律師眞惠　天台宗、延曆寺、五月七日任、年、
臘、故延曆寺座主大僧正大和尚弟子、(慈惠)

〔日本紀略〕一條院　五月七日、丙戌、任僧綱、

〔小右記〕五月七日、丙戌、○略中　傳聞、於陣有僧綱召事云々、元杲僧都辭退替、以
律師覺慶爲權少僧都、以眞惠爲權律師、有轉任等云々、

法性寺ニ阿闍梨二人ヲ增置シ、極樂寺ニ同三人ヲ置ク、

〔日本紀略〕一條院　五月十一日、庚寅、加置法性寺阿闍梨、

〔小右記〕五月七日、丙戌、○略中　法性寺被加置二人阿闍梨、極樂寺被置三人、

〔僧綱補任〕○乾德川昭武氏本　權律師清胤　同三年五月十一日、依座主正
算僧都奏、爲法性寺阿闍梨、(永延)

○日本紀略及ビ僧綱補任、十一日ニ作ル、今小右記ニ據ル、

諸國司申請ノ雜事ヲ定ム、

〔小右記〕五月七日、丙戌、早朝召使來稱、大外記致時(中原)仰云、今日左府(雅信)被參內、有
可被定事、可參入者、○略中　被定諸國司申請雜事等云々、

八日、丁亥、參議藤原實資ニ東宮昇殿ヲ聽ス、

〔小右記〕五月八日、丁亥、○略中　入夜東宮出納俗、權大進陳政朝臣仰云、有被聽
昇殿、可參入者、昇殿事所不申、而有此恩、不知其由、
十九日、戊戌、參內、次參東宮、令啓昇殿慶、依御物忌、不昇殿上、
廿日、己亥、參攝政殿、令申被聽東宮昇殿之慶、依被惱不被謁、小選罷出、

慶ヲ啓ス
東宮御物忌
兼家病ム

十三日、壬辰、左右兩獄ノ未斷ノ囚人ヲ原免ス、

〔小右記〕五月十三日、壬辰、○略中　今日有勅、原免左右獄未斷囚人云々、

十七日、丙申、太政官及ビ左右辨官ノ廳直、抄符史生等ノ外官ニ任ズルヲ停
メ、內官主典ニ任ゼシム、

〔類聚符宣抄〕七　左右辨官史生可任內官事

應太政官幷左右辨官廳直抄符史生等依其勤功成績永改年官外國拜任

内官主典事

右得太政官去四月十四日奏狀偁謹檢案内當局史生十一人之内見任九人、其殘二人自去永延元年依無所望之人于今不被補任謹案職員令史生十人掌繕寫公文行署文案者所職之重已異他所就中所成之印文二百張以上三百張以下或連日不絶或隔一兩日其所書寫之長案猥積如山方今件長案日記等先寫注草案預史生等爲致功績以私紙清書納於文殿永備後鑒土代清書之役暫無可休爰大外記中原朝臣致時拜任之後搜尋局中文書以往文簿或以破損或紛失所遺不幾何況寛和二年以後長案日記等無有其實尋問由緒史生等申云空疲十餘年之勤勞僅拜最下國之二分適勵隨分之節雖仰採擢之仁年齡已傾朝恩難及見任之者彌倦於前途未達之輩無進於當局仍年來之間自所緩怠也若逢恩賞何無其勤者所申雖乖故實其旨又以可然抑局中文書每有朝議已備據勘尤爲要須而偏倦出身之眇焉更忘奉公之忠節縱責彼怠何無優恕重見傍例稱諸司官人代者依本司請奏悉以轉任已無奔營之勤唯爲昇進之媒至于當局史生所職有限其勤揭焉是以不經外任直任内

史生ヲ望ム者ナシ

書寫ノ長案積デ山ノ如シ私紙ヲ以テ清書ス

局中ノ文書破損シテ紛失シテ遺ス所少シ

見任者前途ニ倦ム

外任ヲ經テ内ニ直任ズ官ニ任スル例

官之者已以巨多近則漢部長實寛和二年八月任中務少錄大春日晴遠天元四年正月任主殿少屬但波惟貞天祿四年三月任中務少錄肥田維延同三年閏二月任隼人令史等是也縱雖無先蹤尤可有時議何況於有例哉然則停所給外國被改任内官公家新施鴻慈之恩局中長遂鶴望之志望請特蒙天恩被下宣旨改年官外國永被任内官主典傳之於來葉俾知勤公之貴者右大辨藤原朝臣在國傳宣左大臣宣奉勅依請左右辨官廳直抄符史生等勤功成績之輩亦宜准此者

永延三年五月十七日　左大史兼備中權介大春日朝臣良辰奉

二十三日壬寅臨時仁王會

〔日本紀略〕一條院　五月廿二日辛丑大祓依仁王會也

廿三日壬寅臨時仁王會

〔小右記〕五月七日丙戌早朝召使來稱大外記中原致時仰云今日左府種信被參内有可被定事可參入者○中略被定仁王會事○下略諸國司申請ノ雜事ヲ定ムルコトニカ、ル本月七日ノ條ニ收ム、

廿三日壬寅參内仁王會也巳時朝講公卿起陣參清涼殿最下蔭中納言道長參議誠信留陣朝講了間大雷雨鳴公卿歸陣有侍從厨饗八省朝講了撿校中

大祓

定

朝講

大雷雨

夕講　納言公季、參議安親在陣、打夕講鐘、此間公卿又參上、殿上一兩公卿參入、(經子)皇太
皇太后宮香ヲ行ヒ給フ　后宮行香了、晩景各退出、呪願權左中辨(藤原)忠輔候、

二十五日、(甲辰)村上天皇國忌、

〔小右記〕五月廿五日、甲辰、參內、次參院(圓融)御國忌、頃之罷出、

攝政兼家、童子五十六人ヲ剃髮セシム、

〔小右記〕五月廿五日、甲辰、○(中略)參攝政殿、公卿多被參入、今日童部五十六人
出家剃頭之間、敷長筵庭中、頗無便宜、可令出家數百人、而先隨發心、且令出家
歟、被差酒饌于卿相、晩景余罷出、

酒饌

二十六日、(乙巳)圓融法皇、藤原實資ヲ石清水八幡宮ニ遣シテ、天皇ノ御爲ニ
祈ラシメ給フ、

〔小右記〕五月廿六日、乙巳、早朝參石清水、午時許參著、於宿院邊人宅、著朝服、
參上御在所、先讀申法皇御祈祭文、偏公家御息災之由也、私幣祈申子孫事、殊
立大願卽歸、申時許歸宅、後大雨大雷、
廿七日、丙午、早朝參院、申昨日返事、卽仰云、無殊障、四季可參八幡賀茂者、其由
可令啓皇(冷泉)后者、

御祭文實資ノ奉幣　季毎ニ八幡賀茂ニ參ルベシ　大雷雨

○圓融法皇、同宮ニ祈ラシメ給フコト、正月十一日ノ條ニ、賀茂社ニ祈
ラシメ給フコト、四月二十二日ノ條ニ見ユ、

二十八日、(丁未)賑給使ヲ定ム、

〔小右記〕五月廿八日、丁未、參攝政殿、次參內、先是左府(雅信)、新中納言(伊陟)被候陣、○(中略)諸
社奉幣使定ノコトニカル、六月七日ノ條ニ收ム、次召大外記(中原)致時、被仰可奉賑給使定文之由、則盛
筥持參、舊差文、補任帳也、隨命書定文了、

僧綱ヲ任ズ、

〔僧綱補任〕○三興福寺本　權律師(朱雀)清胤「左京人大江氏」　五月廿八日任、內供勞、

〔僧綱補任〕○乾德川昭武氏本　權十六佛事上補法務官符　權大僧正(都)眞喜　五月廿八日兼法務、

〔朝野群載〕太政官符　治部省

應令權大僧都法眼和尙位眞喜共知行法務事

右左大臣(雅信)宣、奉勅、僧綱庶務、觸事繁多、宜令件人相共知行之者、省宜承知、依宣
行之、符到奉行、

正四位下行右大辨藤原朝臣(在國)

正五位下行左大史兼備中權介大春日朝臣(良辰)

內供ノ勞　眞喜ヲシテ法務ヲ兼ネシム

永延三年五月廿八日

〔東寺文書〕興○觀智院三山城　權法務相續次第

權大僧都眞喜　永祚元五廿八任、元杲辭替、

〔小右記〕五月卅日、己酉、昨日以阿闍梨清胤任權律師、眞惠依病辭退替、明普內供、清胤辭退替、件明普補、

元杲辭退ノ替

眞惠辭退ノ替內供ヲ補ス

○興福寺別當次第、釋家初例抄等、異事ナキヲ以テ略ス、

二十九日、戊申、清涼寺ニ阿闍梨一口ヲ置ク、

〔小右記〕五月卅日、己酉、昨日○略中義藏法師爲五臺山阿闍梨、此度始宣旨一人、前大僧都元杲、

元杲齋然等ノ奏請ニ依ル解文

法橋齋然等解文云々、

六月四日、癸丑、義藏來談云、五臺阿闍梨、法橋申請五人、其外又□別解文申置

義藏、件解文前僧都元杲、法橋齋然加署之、元杲彼山撿校云々、

〔傳法灌頂雜要鈔〕三（裏書）太政官牒　五台山清涼寺

應補任阿闍梨大法師康靜死闕替事○略中

右太政官今日下治部省符偁、入唐歸朝故法橋上人位齋然、爲彼寺座主、去長

齋然ノ奏狀

保元年潤三月十三日奏狀偁、齋然以去永延三年奏聞、因准延歷（曆）元慶寺例、給五人阿闍梨於清涼山、勤修三密教法、可誓護國家之日、且給一人、○略中

寛仁三年三月十五日○略署名ス、

延歷元慶兩寺ノ例ニ准ズ

〔朝野群載〕十六佛事上　攀七高山阿闍梨

阿闍梨法印權大僧都經範誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩任先例被下宣旨愛宕山五臺峰（中ヵ）清涼寺阿闍梨狀

傳燈大法師位忠範年、薦、東大寺

右謹檢案內、入唐法橋上人位齋然、依奏狀、愛宕山五峰、因准大唐五臺峰、奉爲鎮護國家、每年於神宮寺、可修文殊祕法、卽使奏聞、申置阿闍梨先了、○略中

康和五年八月廿二日○略署名ス、

文殊祕法ヲ修セシム

○齋然、清涼寺ノ建立ヲ請フコト、永延元年二月十一日ノ條ニ、重ネテ

阿闍梨ノ加補ヲ請フコト、長保元年閏三月十三日ノ條ニ見ユ、

花山法皇ノ女御藤原姚子薨ズ、

〔小右記〕五月廿九日、戊申、○略中左大將（朝光）女御、午時許逝去云々、于時年十九、

六月十六日、乙丑、詣左將軍御許、訪女御之事、

〔一代要記〕花山天皇後宮　女御無位藤姫子（姫）　大納言朝光一女、母式部卿重明親王五女、永觀二年十二月廿五日爲女御、

〔尊卑分脈〕藤氏北家　大納言、正二位、朝光（大納言、號閑院大將、）

御世系　堀川女御ト號セラルル

〔女子（姫）子、花山女御、號堀川女御、母、

六月小　庚戌朔盡

一日、庚戌、彗星出現、

〔日本紀略〕一條院　六月一日、庚戌、其日、彗星見東西天、

○コノ後、彗星出現ノコト、七月是月ノ條ニ見ユ、

二日、辛亥、僧綱凡僧ノ從僧童子等ノ員數ヲ定ム、

〔政事要略〕七十紙彈雜事十從者員數事

太政官符　治部省

應停止僧綱凡僧乖違法式多率弟子童子事

今定

僧正各從僧陸口　童子拾人

僧都各從僧伍口　童子捌人

律師各從僧肆口　童子陸人

凡僧各沙彌貳口　童子肆人

右檢案內、僧綱凡僧、弟子引率之數、載在格條、非有改定、何得過差、而今近年之間、奢僭之輩不愼憲法、所率之從類、各二三十人、以多爲樂、以少爲耻、志乖禪定、

沙彌

奢僭ノ輩從類ノ多キヲ樂ム

奇服ヲ著ク　短兵ヲ挿ミテ闘亂ナス

旨渉放逸、其尤甚者、好著奇服、間挿短兵、恣耀威武、動致闘亂、非唯忘皇憲之嚴重、還亦致佛法之澆醨、仍可加禁遏之狀、下知左右京職、左右近衛府、左右檢非違使先了、左大臣宣、奉勅、宜加炳誡依件定行者、省宜承知、依宣行之、不得違越、

符到奉行、

右大辨藤原朝臣在國　　左大史兼中權介大春日朝臣良辰

永延三年六月二日〇朝野群載二年ニ作ル、

七日、丙辰、大神宮以下十一社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕一條院　六月七日、丙辰、奉幣伊勢以下十一社、

〔小右記〕五月廿八日、丁未、〇中略　參内、先是左府（雅信）新中納言（伊陟）被候陣、被定臨時諸社御幣使、十一社、先召舊差文、大外記致時（中原）持參、差文、歴名帳等、盛筥、次外記仲明（大春日）執硯、居參議座、依大臣氣色、余（實資）揖南進居□、隨彼命書定文了、伊勢、石清水、賀茂上下、松尾、平野、稲荷、春日、大原野、住吉、吉田、北野等也、取副笏於（脱アラン）進上卿前奉之、上卿取之置前、揖復座、次上卿取定文披見了、次召外記令披筥、了陰陽寮日時勘文權左中辨忠輔令覽上卿、〇中略、賑給使定ノコトニカヽル、五月二十八日ノ條ニ收ム、了奉之、其儀如初、以權左中辨忠輔、被奉兩事定文日時勘文等、納本筥被

日時勘文

奉幣使定

宣命

奉、但舊定文補任帳等、整取出置座云々、春宮權大夫（公季）、右衛門督（道長）皆是輕服、定御幣使之間、覽所著陣、座定之後著座良久後忠輔歸來、々月七日可立御幣使者、御幣等事、仰忠輔朝臣了、此間右大將參入、丞相召致時朝臣、可給兩事定文舊差文等、納同筥頃之左府起陣、出自敷政門、諸卿政（マヽ）官相從、辨少納言不候、仍無御前云々、或公卿云、猶雖辨少納言可有（不候脱カ）御前歟者、各到陽明門、相揖退出、其儀如恆、

御幣ヲ給フ雨儀

六月七日、丙辰、□時參内、先是新源中納言在陣、見宣命等、令入使々、了以大内記佐忠（三善）朝臣、令奉攝政殿、未時許歸來、返奉宣命、使參議安親遲參、仍上卿云、先向八省、可催行者、則喚内記給宣命、次上起座、余及辨、外記、史、内記等相從、經階下、月華、陰明、修明等門、著八省院嘉喜門西腋座、南北對座、公卿著南、余又著南、先是上前置式筥、此間降雨、小安殿□置（安カ）伊勢幣、了上卿召外記、問伊勢使及他使々具不、占部不參、兼延（卜部）朝臣雖載差文、依御體御卜、籠候神祇官、召遣他官人、未參同者、以代官且可令給御幣之由、仰神祇官、申云、尋訪先例、無取代之例者、仍又重遣召、申時許適以參向、即令給御幣、依雨儀、經大極殿北壇上、自渡殿進小安殿、給御幣、上卿云、或說神祇具了之由、外記申時、上直起向東廊、召使王給宣命、或說令給御幣、了起座給宣命者、今日上卿未給御幣之前、召伊勢宣命、則

伊勢使ニ宣命ヲ給フ

石清水使

返給內記、起座向東廊給使王、了復座、先是參議修理權大夫安親參入、次石清水使右馬頭實方(藤原)給宣命、件朝臣□上人也、使(殷アラン)奏事由所行也云々、仍以上自修理權大夫、給宣命退出、賀茂使定日左兵衛督充件使、而申障不參入、仍改安親爲使、安親本松尾使也、次自(於カ)余進給宣命二通、松尾、平野是相兼也、了

賀茂使
松尾平野使

嘉喜(殷アラン)門給次官仲光朝臣、此朝臣內兼(同カ)兩社、出自殷富門參松尾、酉時許參著、先洗手著座、次官仲光朝臣、乘物不合期、不參入、在平野云々、令奉御幣禰宜等著座、乍居拜之、余取宣命著座、兩段再拜、讀宣命、了又兩段再拜、禰宜傳神宣詞、了拍手三度、召禰宜預給宣命、了參平野、於廣隆寺邊秉燭、戌時許參著平野、次官仲光朝臣、先是參入、奉御幣(マヽ)及作法如松尾、次官捧御幣、讀宣命之間、立座前、是禰宜申也、又禰宜受宣命、入御社內讀申、此間次官在余座後座、禰宜歸出、傳神宣、拍手如例、亥時歸宅、

九日、戊午造酒司、酒ヲ進ム、

〔小右記〕六月九日、戊子(午)、造酒進(司)司(港)大刀自、小刀自各一瓶、

大刀自
小刀自

十日、己未(未)、御體御卜奏、

〔小右記〕六月七日、丙辰、○中略上卿召外記、問伊勢使及他使々具不、占部(卜部)不參、兼延朝臣雖載差文、依御體御卜、籠候神祇官、

十日、己未、○中略今日可奏御體御卜、而公卿不參內、仍遣召了云々、

十一日、庚申、興福寺主恩寂ス、

〔諸嗣宗脈紀〕上法相宗派圖

眞喜

主恩 十市郡人、永延三六月十一日卒、五十七、

永超 濟恩寺、出雲寺、橘孝之子、

〔元亨釋書〕五慧解二之四　釋主恩　居興福寺、學相學有義學名、于時叡山寛印負俊才、不屑南北學徒、獨言、天下只有主恩、當我願眄耳、恩以麤語忤朝旨、在筑(筑)築之博多、寛印又竄東州、印曰、恩貶西海、印在東地、日本宗乘已爲凹字、

傳義學ノ名アリ寛印ト主恩麤語ヲ以テ朝旨ニ忤ル

法系

〔本朝高僧傳〕九淨慧二之六　和州興福寺沙門主恩傳

釋主恩、不詳姓氏、和州十市人也、稟法相於興福寺眞喜僧正、寛和元年、任維摩會講師、以義學鳴當代、○中略主恩ト寛印トノコトニカヽル元亨釋書ニ同ジ、恩不幾放還、居興福寺、又弘法相、永延三年六月十一日遘病而化、壽五十七、

十二日、辛酉、衞府官人及ビ帶刀ノ恪勤ナラザル者ヲ解任ス、

〔小右記〕六月十二日、辛酉、○中略今日衞府官人直闕者九人、解却見任、左近將監源刀(マヽ)

規右近將監源能信、藤原昌時、將曹多妙茂、右兵衛尉高志秀香、源爲貞、府生山村實光者、又帶刀之不恪勤者三人解却、長藤原爲孝、帶刀源覺、大藏元近等也、

十八日、丁卯、〇中略昨日瀧口不恪勤者三人被停云々、

〇瀧口停任ノコト、便宜合敍ス、衞府官人、帶刀、竝ニ瀧口ヲ恩免スルコト、本月二十二日ノ條ニ見ユ、

瀧口ノ格勤ナラザル者ヲ停ムル

十四日、癸亥律師雅慶ヲ東寺別當ニ補ス、

〔僧綱補任〕〇三典福寺本　律師雅慶　六月十四日任東寺別當、

〔東寺長者補任〕一　律師雅慶　勸修寺、東大寺、眞言宗、六月十四日加任、但永延三加任、六十五云々、十二月十日拜堂、

二長者

〔灌頂記〕雅慶大僧正　永延三年六月十四日加二長者、于時律師、五十七、

十七日、丙寅攝政兼家、延曆寺ニ詣デ、八壇ノ修法ヲ行フ、

七箇日

〔日本紀略〕一院條　六月十七日、丙寅、攝政參天台山、修法七日、

〔小右記〕六月十七日、丙寅、今曉攝政殿被登山、始自明日七箇日、被行八箇壇修善云々、五壇自料、今三壇奉爲東宮（居貞）及院（冷泉）三四親王（爲尊、敦道）云々、

三壇ハ東宮及ビ爲尊敦道二親王ノ御料

廿四日、癸酉、〇中略攝政下從台山、被參入、

病惱ニ依ル尋禪藥師法ヲ修シ還賀等五壇法ヲ修ス

〔五壇法記〕一五壇法證文事一條

永祚元年十月廿九日宣命云、去夏攝政藤原朝臣病惱之間、中堂ニ攀躋テ、權僧正尋禪ニハ、藥師ノ法ヲ令修メ、少僧都還賀、聖救、正算、法仁、覺慶ヲシテハ、五大尊法ヲ令修タリ、感應揭焉ニテ、病惱モ除愈シ、氣力モ强健ナリ云々、

二十一日、庚午内御物忌、

〔小右記〕六月廿一日、庚午、〇中略内御物忌云々、

二十二日、辛未皇太后ノ御惱ニ依リ、禁中ニ於テ、御讀經ヲ修シ、尋デ、大赦ヲ行フ、

〔日本紀略〕一院條　六月廿一日、辛未、御讀經終、

廿四日、癸酉、詔、大赦天下、常赦所不免者赦除、又癈疾徒加賑給、依皇太后不豫也、又去十日（二脫カ）解諸衞官人被恩免之、然間、皇太后御惱平愈、

癈疾者ニ賑給ヲ加フ

御惱平愈

〔小右記〕六月廿一日、庚午、〇中略内堅僑、藏人伊祐仰云、可參入者、無指其事、推量若明日讀經事歟、

廿四日、癸酉、或告云、皇太后宮、自夜中許、危急惱給之、慥取案内、卯時許參入、先是公卿多被參入、被立種々大願、又於御前令剃童部頭、定覺阿闍梨、年來籠居

御前ニテ童部ヲ剃髮セシム

阿闍梨定覺加持シ奉ル非常赦

雲林院、差右衛門督道長、右大辨在國召遣、巳時許將來、卽奉加持、〇中略今日依
后宮御惱、有非常赦、令未得解由同在赦中、解官衛府瀧口帶刀被優免云々、左
大臣於仗座、召大內記佐忠、仰詔書趣、

社前ノ大樹顚倒ス

廿五日、甲戌、〇中略新源中納言(俊賢)相供參皇太后、御惱頗宜云々、

〔西宮記〕臨時十二仁王會裏書　永祚元年八月十七日、依種々怪異、奉幣諸社、六月欲
被奉依而(依カ)太相(和忠)府薨去延引、以今日被行、此間依皇太后御惱、彼宮於禁中被修
讀經、〇下略八月十七日ノ條ニ收ム、

藏人所ニテ御占ヲ行フ兵革疫氣ノ徵

二十五日、甲戌賀茂社ノ怪異ニ依リテ、軒廊御卜ヲ行ヒ、諸社ノ奉幣使ヲ定
ム、

〔日本紀略〕一條院　六月十九日、戊辰、亥刻鴨御社中門內御殿前大樹顚倒、數
星自樹中出、指南連飛、

〔小右記〕六月廿二日、辛未、去十九日賀茂上社〇本書二十五日ノ記、下社ニ作ル、御前大欅木、
俄以顚倒之間、大星出自木心云々、於藏人所有御占、兵革疫氣徵云々、可有軒
廊御占歟如何、

廿四日、癸酉、〇中略右大將(濟時)被參入、被命云、束帶可參入、可定諸社御幣使者、卽罷

出、束帶參入、攝政下從台山、被參入、左大臣(雅信)、右大將新(伊陟)中納言、余從飛香舍、相率
著陣座、〇中略左府被命云、諸社御幣使等事、今日可定、而陰陽師等盡向辛崎、爲
行攝政河臨禊、仍不能勘日時、明日可必定、可參入者、

攝政河臨禊

廿五日、甲戌、〇中略左府被參於左仗、有神祇陰陽官寮御占、是去十九日賀茂下
社怪、大樹顚、數多星出自樹中、去南方往也、掃部寮敷疊於軒廊中間、絕席一尺餘許、初(マヽ)被、其間三
四尺許、丞相目余、令仰其□、次盛水二坏、居東座前、丞相又目余、令置西座前、次
神祇陰陽官寮官人相率參入著座、丞相召兼延(下部)朝臣、稱唯著膝突、下給怪□(勇カ)(マヽ)奉
仰云、賀茂下社樹顚怪、可占申者、受文復座、次召保(慶盛)遠朝臣、進膝突、仰云、怪異文
下給神祇官、是賀茂下社樹怪也、可占申、蒙仰復座、神祇官龜筮、陰陽寮占文等、
各納於覽筥、進膝突奉之、神祇官先進、陰陽寮良久之後奉之、丞相以件勘文等、令藏人俊(憲)賢奏聞、
不納覽筥、直令奏也、次被定諸社御幣使、大社伊勢、石清水、賀茂上下、平野、松尾、春日、大原、野、住吉、稻荷、廣瀨、龍田、吉田、梅宮、廣田、北野、余
執筆書之如例、卽副日時勘文等被奏聞、廿八日可被立也者、此間時々小雨、左
大臣、左衛門督(重光)、新中納言、余、自敷政門、經溫明殿壇上、出自宣陽門、左丞相更折
南向春華門、左金□(吾)以下相揖、出自建春門、

勘文ヲ奏ス

伊勢以下十五社日時勘文

〔西宮記〕臨時十二仁王會裏書　或記云、永延三年六月廿八日、可有臨時奉幣事、而依

賴忠ノ薨去ニ依リ奉幣延引大祓ヲ行フ

有宮中御修法事、○本月二十二日ノ條ニ見ユ、被勘舊例之處、延喜、天慶有此例、延喜六年六月、自左近衛陣發遣伊勢使、但宣命紙、用太政大臣家者、然而依太政大臣（賴忠）薨事、遂延引有大祓事、

○百練抄、異事ナキヲ以テ略ス、奉幣使發遣ノコト、八月十七日ノ條ニ見ユ、

駿河國ニ封ズ三條太政大臣ト號ス

二十六日、乙亥、太政大臣從一位藤原賴忠薨ズ、尋デ、正一位ヲ贈リ、廉義公ト諡ス、

遺旨ニ依リ葬司葬具ヲ停ム

〔公卿補任〕六　太政大臣從一位藤賴忠、六十六、六月廿六日薨、七月廿日詔贈正一位、封駿河國、諡云廉義公、號三條太政大臣、

固關四十九日法會

〔日本紀略〕一條院　六月廿六日、乙亥、太政大臣從一位藤原朝臣賴忠薨、年六十六、七月廿日、詔、贈故太政大臣藤原朝臣正一位、封駿河國爲駿河公、諡曰廉義公、葬司葬具依遺旨停之、又賜官符固三關、八月十一日、己未、故太政大臣卌九日法會也、於法性寺東法院修之、

病症仁王經ヲ讀マシム

〔小右記〕六月廿三日、壬申、今朝太相府惱給之由云々、仍參入、被命云、從昨夕有惱、仍令占、瘧病時行風熱相剋歟者、自明日、可令行仁王經讀經者、廿四日、癸酉、○中略申時許從內罷出、次參太相府、惱給之氣頗倍昨日云々、

剃髮受戒

廣隆寺ニテ諷誦ヲ修ス

中宮渡御

入棺帝釋寺ニ葬ル

廿五日、甲戌、參大相府、御惱猶重、

廿六日、乙亥、太相府危急惱給之由云々、仍卯時許馳參、辰時許薨、先余○此間闕文アリ、（藤原公任）頭中將、令下御頂髮、奉令授戒了、早朝以御馬一匹、諷誦廣隆寺、左衛門督（惟光）桃園納言（保光）等參弔、勘解由長官（佐理）、修理（修平）大夫、內藏○此間闕文アリ、御穢、今日依重日、不定雜事、仍罷出了、中宮（遵子）今朝頻有臨御之仰、然而僉議之間、薨給了、仍渡給耳、

廿七日、丙子、早朝參故太相府、是彼相集議定雜事、陰陽允（泰方）奉平奉色々勘文、已時入棺、戌四點奉葬法住寺北邊帝釋寺、勘解由長官、修理大夫、右兵衛督、余衣冠藁履奉相送之、勘解由長官途中乘車、依難堪步行耳、夜中修理大夫、兵衛督、余等歸、勘解由長官宿彼寺、孝子（公任）頭中將烏帽直衣、

遺言ナシ

廿八日、丁丑、申時許參帝□（釋）寺、勘解由長官、修理大夫、依□衰日、早以退歸、右兵衛督稱所勞、願被歸了、戌四點行○此間闕文アリ、前僧都覺□（忍）大僧都□（總）慶、御前僧九口、余相送也、暫在孝子幕、子時許退歸、今日不可被○此間闕文アリ、由、令觸外記善言（小槻）了云々、家司時○此間闕文アリ、御骨僧亮高相送之、是可持參○此間闕文アリ、故相國無遺言云々、

薨奏

〔小右記目錄〕二十一公卿薨卒事　同（永祚元年）年七月廿日、太政大臣薨奏事、

同月廿二日、太政大臣諡號事、

永祚元年八月十一日、太相府七々忌事、

〔榮華物語〕三さま〳〵のよろこひはかなく明くれて、六月になりぬれは、あつさをなけく程に、三條のおほきおとゝ、いみしうなやませ給て、廿六日うせ給ぬ、このとのは、故小野宮のおとゝ(實頼)の二郎、頼忠ときこえつるおとゝなり、うせ給ぬるを、あないみしときゝ思おほせとかひなし、中宮(遵子)女御(護子)、權中納言やなと、さま〳〵いみしうおほしなけくへし、後の御いみな廉義公ときこゆ、あはれなる世なれと、さはいかゝはとそ、はかなう御いみもはてゝ、御法事なといみしうせさせ給ふ、

公任哀悼ノ歌

〔前大納言公任卿集〕故殿うせさせ給ふて後はなちたる鈴むしのきえて侍けれは、

いかてかは音のたえさらむ鈴蟲のうきよにふるはくるしき物を

ちゝおとゝ(頼忠)うせ給うてのころ、たきもの人のこひたる、遣すとて、

花たにも散つる宿のかきほには春の名殘もすくなかりけり

服中ノ歌

三月つこもりふくにおはするころ、

女御(護子)服中ノ歌

別にしかけさへ遠く成行はつねよりおしき年の春かな

春しらぬ宿には花もなき物を何かはすくるしるしなるらん

四月ふくなれはころもかへもし給はて、

御いもうとの女御(護子)

すみ染の衣なからのけふなれとかはれるものはむかしなりけり

ふくぬき給ふとて、

墨染の衣にそへてなかせともつきせぬ物は涙なりけり

〔閑院左大將朝光卿集〕三條の大殿のうせ給へるを、又ともかくもせて、おとゝいみしうなき給ふと聞て、

朝光哀悼ノ歌

烟とも雲ともならぬ程はかりありと思はんことのかなしさ

官歴

〔公卿補任〕參議從四位上藤頼忠、四十、左大臣實頼公二男、母故左大臣時平公女、右大將保忠(藤原)卿爲子、延長二年生、天慶四正七從五下、同五十二十三侍從、同六四廿四昇殿、同九月十六日任右兵衞佐、天暦二正七從五上、同卅日右少將、同二正廿四兼備前介(伊豫權介)、同六正七正五下、同八正十四兼伊豫權介(備中介)、同九二七從四下、同十七日昇殿、同七月廿四右近權中將、十年三廿四權左中辨、天德

保忠ノ子ト爲ル

四正七從四上、四月廿二日右大辨、應和三九四任參議、辨如元、同四年正月廿三日兼備前守、康保二年十二月四日兼勘長官、同三年九月十七日轉左大辨、兼官如元、○以上五、安和元年二月五日任中納言、今日從三位、九月五日東宮昇殿、十月八日聽昇殿、同二年二月七日兼左衞門督、十一月十一日兼右大將、天祿元年八月五日任權大納言、左(右カ)大將如元、同二年十一月二日任右大臣、正三位、同八日左(右カ)大將如元、同三年九月十七日東宮昇殿、十一月十七日爲氏長者、同四年正月七日、從二位、五十賀、五十算、天延二年二月八日止氏長者、貞元元年十二月廿二日蒙可行一上所行雜事宣旨、同二年四月廿四日任左大臣、同日正二位、卽載宣命、同廿五日左大將、五月十三補藏人所別當、十月十一日詔令關白萬機、同日幷爲氏長者、十一月三日依上表停大將、四日賜內舍人二人、左近衞各四人爲隨身、但請奏、止內舍人賜左近衞府生各一人、五日勅授帶劍、十八日聽輦車、馬上隨身左右四人、此時始之、天元元年十月二日任太政大臣、同二年正月三日聽牛車、同四年正月七日從一位、永觀二年八月廿七日天皇禪讓之日、載宣命關白、同廿八日聽帶劍、天皇讓位之宣命云、關白隨身如元、幷昨日皇太子受禪雖然不從公事、寬和二年六月廿三日停關白隨身等、皇太子受

禪日、太政大臣如元、十月六日如元給隨身兵仗、○以上六、

世系

〔尊卑分脈〕藤氏　實賴　公孫　賴忠　實賴　攝政、太政大臣、從一位、號小野宮、

賴忠　左大臣、參議、大辨、勘解由長官、六十算賀賜度者、賜內舍人、隨身兵仗近衞等、從一位、氏長者、關白太政大臣、左右大將、母同敦敏、○時平女、左大臣贈正一位、永延三六廿六薨、六十六、號三條殿、謚曰廉義公、封駿河國、

公任　正二位、別當、前權大納言、母中務卿代明親王第三女、

賴任　從四上、土佐守、治部少輔、母明祐大德女、

最圓　權少僧都、母山

諟子　圓融院后、號四條宮、母同公任、

遵子　花山院女御、母同公任、

女子　左大臣重信公北方、母

傳

〔大鏡〕三太政大臣賴忠　このおとゝ小野宮實賴大臣次郎なり、御母時平大臣御むすめ、敦敏少將おなしはらなり、大臣の位にて十九年、關白にて九年、この生は極せさせ給へる人そかし、三條よりは北西、東院よりは東に住給ひしかは三條殿と申、このおとゝいみしき事ともしをき給へる人なり、か

三條殿ト號ス

賀茂詣ノ異例ヲ開ク

過度ノ儉約

頼忠ト隆家

もまうてに、げひゐし車のしりにくする事、又馬のうへのすいしんさうに四人つかひはしむる事も、この殿のしいて給へり、いにしへは物のふのかきり一人つゝありて、ふさうはなくて侍し也、一の人おはすなと見ゆる事侍らさりけり、かならすかく侍るなりけることなりかし、あまりよろつしたゝめあまり給ひて、殿のうちによひにともしたるあふらを、又のつとめてさふらひにあふらかめをもたせて、女房のつほねまてめくりて、のこりたるをかへし入て、又今日のあふらにくはへてともさせ給ひけり、あまりにうたてある事なりや、一條院位につかせ給ひにしかは、よそ人にて關白はのかせたまひにき、たゝおほきおほい殿と申て、四條宮（遵子）にこそはひとつにすませ給ひしか、それにこの前帥殿（隆家）は時の一の（愛家）人の御孫にて、えもいはすはなやき給ひしに、六條（重信）殿の御むこにておはせしかは、つねに西洞院のほりにあるき給ふを、こと人ならはことかたよりもよきゝてもおはすへきを、大后（遵子）、太（頼忠）政大臣のおはしますまへを馬にてわたり給ふ、おほきおとゝいとやすからすおほせとも、いかゝはせさせ給はん、なをいかやうにてかとゆかしくおほして、中門の北の廊の連子よりのそかせ給へは、いみしう

参内ノ有様布袴ニテ参内スル年中行事ノ障子ノ許ニテ奏上ス

よその人

子女

はやる馬にて、御ひもをしのけて、雜色二三十人はかりに、さきいとたかくをはせてうち見いれつゝ、馬のたつなひかへてあふきたかくつかひてとをり給ふを、あさましくおほせと、中〳〵なる事なれは、ことおほくものたまはて、たゝなさけなけなるおのこにこそありけれとはかりそ申給ひける、非常の事なりや、さるは帥中納言（隆家）殿うへの六條殿ひめ君は、母は三條殿ひめ君におはすれは御孫そかし、されは人よりはまいりつかうまつりたにこそし給ふへかりしか、この頼忠おとゝ一の人におはしましゝかと、御なをしにてうちにまいり給ふ事侍らさりき、そうせさせ給ふ事あるをりは、布袴にてそまいりたまふ、さて殿上に候はせ給ふ、年中行事の御障子のもとにて、さるへき職事くらふとなとしてそ奏せさせ給ひ、又うけ給たまひてける、亦あるおりは御門鬼のまにいてさせ給ひてめしあるおりそまいらせ給ひし、關白し給へと、よそ人にておはしましけれはにや、故中務宮よしあきらのみこの御むすめのはらに、御むすめ（遵子、賀子）二人、男一人（公任）おはしまして、おほひめ君は、圓融院の御時、女御にて中宮と申き、御年廿六、（天元五年、壬午、三月五日、后たたせたまひき、）みこむまれおはせす、四條の宮とそ申めりし、（○中略）いまひとゝ

ころのひめ君は、華山院御時の女御にて、四條の宮にあまにておはしますめり、やかて后女御のひとつはらのおとこ君、只今按察大納言公任と申す、

○中略三條のおとゝ永祚元年六月廿六日にうせ給て、六月卅日○本書六月三十日ニ作ルハ誤レリ、贈正一位になり給、廉義公とそ申ける、

〔北山抄〕十 吏途指南 勘出事 先公命云、功課之定、朝之要事也、雖在其職之者、不必練習、予久經辨官、非無所聞、昇八座後、故殿下、於職曹司被行除目之時、依物忌不參仕、被賜御書云、無可定受領功過之公卿、修諷誦可參入者、仍即參入、頗勵愚心、今所思出事、時々示之、子孫之中、若有奉公之志、聊注大概、可備忽忘、隨即所記事等、已及卷軸、而蓬居燒亡之時、悉爲灰燼、其後嬾惰之上、皆以忘却、不能重注、自備无朝議之間、所見聞事、略雖記出、誰人敢信用、不如投爐中者歟、○中略

先公爲權辨、文範爲左中辨之時、於結政所、申山城國于葛遭水損文、文範許之後先公難之、文範頗有傾奇氣、見聞人又爲疑、後日文範問申事由、被答云、馬寮式云、八月以前干畢、不得申水損者、今及十月申之、未知其理、文範無敢所陳云々、尾張國爲輔納言任以正税申年料米運賃、是代々所申請也、先公難云、可請徭役

功課定ヲ重ンズ

政務ニ通ズ

事、及天聽、有被尋仰、被奏子細、尤可然者、件米以徭可運、而代々不知用殘有无許之、仍有此難云、

〔北山抄〕十 吏途指南 古今定功過例 大和守共政以契狀請不動爲過云々、定時濟時卿有所難事、恆光公陳不可然之由、事已縱横、他人不申是非、廉義公近候御前問事由、濟時卿申之、公云、此事雖不快、非指可爲過、但以契狀受不動、尤可爲過、而諸卿不申其由如何者、諸卿無敢所申、處過條云々、

〔禁祕抄〕上 一被聽臺盤所人事

花山院御時、三條關白不被聽、尤可有祕藏事歟、○上下略

〔大槐祕抄〕文範の民部卿は正左中辨、三條關白頼忠は權左中辨にて、まつりを三條關白わたるへきにて候けるに、三條の關白、わたくしに文範にあひて、祭は我等かやうなる人のわたるなり、我わたり給へと申されけれは、さ侍るとてこそ文範わたり候けれ、昔は人の心うるはしくて、かくのことき候けるなり、今の人は、我やくをせさせむとこそ思ひ、かつはつかうまつり候めれ、よき諸大夫とあやしのきむたちとは、はるかに絶席したる者にてなん候ける、

臺盤所ヲ聽サレズ

頼忠祭ノ使ヲ文範ニ讓ル

〔和歌色葉集〕上 六 名譽歌仙者 大臣十三人

後撰拾遺　三條關白殿下　太政大臣頼忠、廉義公、清慎公御子、

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　三條關白（従一位太政大臣頼忠、廉義公、藤原清慎公男、）　拾遺集賀、一、三條太政大臣、　新古今集戀三、一、廉義公、　新千載集戀四、一、　新拾遺集哀、一、

〔拾遺和歌集〕五賀　小野宮（實頼）の太政大臣の家にて、子日じ侍けるに、下らうに侍ける時よみはへりける、　三條太政大臣（廉義公、）

行末も子日の松のためしには君か千年をひかむとそ思ふ

〔前大納言公任卿集〕大殿のまた所々におはせし時、人々くして、もみち見にありき給ひしに、さかのたきとのにて、

歌什　實頼第ノ子日ニ詠ム

瀧の音はたえて久しく成ぬれと名こそなかれて猶きこえけれ

殿にかへり給ひて、

嵯峨ノ瀧殿ニテ紅葉チ見ル

山邊よりのへものこさす尋きてとまりもしるき宿の紅葉は

大殿いしやまにこもりたまひて、たいともしてうた合せし給ひにけるに、題をよみてありけるに、みねの上のほとゝきす、

石山ニ籠リテ歌合チ行フ

山邊たにねかたき物をほとゝきす都の人はまちやかぬらむ○外五首略ス、

大殿のみもとにて、秋の日遊ひくらして、

頼忠ト公任

秋の夜は水こそことに増るらし月と露とのもるにまかせて

大殿より

我宿のみきはにまちし秋風は半によくもすきにけるかな

御かへし

夜とともにすめるみきはの秋かせはつくるしるしもみえすも有哉

いはし水臨時まつりのつかひ、どのゝ少將（敦敏）まひ人にてわたり給ひけるに、大殿のもの見給ひけるにきこえ給ふける、

をみ人のゆふかたかけて行道をおなし心に誰なかむらむ

かへし

小忌衣袂にきつゝ石清水心をなへてくますもあらなむ

せきみ（敦敏）の少將、春日の使したまふて歸り給ふ日、いみしう霧のたちたりけれは、是より大殿に、

三笠山春日の原の朝霧にかへりたつらむ今朝を社思へ

御かへし

みかさ山麓の霧をかき分て秋をしるへに今やきぬらむ

頼忠ト敦敏

邸宅三條院四條宮

〔二中歴〕十名家歴　三條院（殿ノ）三條南、大宮東、頼忠公家、抄云、基隆傳領之、

〔拾芥抄〕中末諸名所部二十　四條宮四條南、西洞院東、廉義公家、公任大納言家、紫雲立所也、

〔前大納言公任卿集〕野分したるつとめてなかふるか家の北に故入道とのみなみには、故三條殿すませ給ひけるに、おほ風の吹けれはたてまつれる、

我宿は野分はふかむとなりよりあれ増りたる心地こそすれ

かへし

となりよりあれまされりといふなるはいかなる風か身をは吹らん

○百練抄、愚管抄、大鏡裏書等、異事無キヲ以テ略ス、

僧都清胤ヲ天王寺別當ニ補ス、

〔僧官補任〕天王寺別當次第　清胤僧都　十禪師、内供、治七年、永延三六廿六任、○法中補任同ジ、

二十七日、丙子、大納言藤原朝光ノ左大將ヲ停ム、

〔公卿補任〕六　大納言正二位藤朝光　六月廿三日、依重病辭大將大夫、不許、同廿七日、重辭大將大夫等、依病也、被優許、大納言按察如元帶之、

病ニ依ル

初度ノ表ヲ返サル

藤大納言ト稱ス

〔日本紀略〕一院　六月廿五日、甲戌、大納言左近大將藤原朝臣朝光請罷大將、勅許之、

〔小右記〕六月廿三日、壬申、○略中　左大將從去十九日俄沈重病、旦暮難期、仍今日上辭大將春宮大夫之表云々、

廿四日、癸酉、○略中　左大將辭表、今日被返云々、

廿五日、甲戌、○略中　詣左大將御病、

〔大鏡〕五太政大臣兼通　閑院左大將朝光と申して、父（兼通）おとゝのおはしましをり、○略中なに事につけても、はなやかにもていてさせ給へりし、とのの ちゝとのうせ給ひにしかは、世中おとろへなとして、御やまひもおもくて、大將も辭し給ひてしこそ口をしかりしかさてたゝ藤大納言とそ聞えさせし、○略下

○日本紀略、二十五日ニ作ル、今公卿補任ニ據ル、

二十八日、丁丑、八省院ニ於テ、大祓ヲ行ヒ、明日、又朱雀門ニ於テ、之ヲ行フ、

〔日本紀略〕一院條　六月廿八日、丁丑、大祓、於八省院行之、

廿九日、戊寅、大祓、於朱雀門行之、

〔西宮記〕臨時十二仁王會裏書　或記云、永延三年六月廿八日、可有臨時奉幣事、○中略、全文、八、八月十七日ノ條ニ收ム、而依太政大臣（頼忠）薨、事遂延引、有大祓事、

是月、疫癘ニ依リ、大極殿ニ於テ、仁王經ヲ轉讀セシム、

〔小右記〕六月廿四日、癸酉、○中略　天下疫氣尤熾、仍於大極殿、可被轉讀仁王經、僧數百口云々、明日可定之由被示、僧數百口

七月大己卯朔盡

十三日、辛卯、小除目、内大臣道隆ニ左近衛大將ヲ兼ネシム、

〔公卿補任〕六

内大臣正二位藤道隆、三十七、七月十三日左大將、任大臣後兼大將例、

權中納言正三位藤公季、卅三、春宮權大夫、七月十三日轉大夫、

參議正四位下藤誠信、廿六、侍從、春宮權亮、紀伊權守、七月十三轉權大夫、

藤懷忠、五十五、七月十三日任、左大辨、近江權守等如元、元藏人頭、○職事補任同ジ、

〔公卿補任〕六永祚二年　非參議從三位藤在國　七月十三日春宮權亮、（永祚元年）

〔公卿補任〕六曆二年　參議正四位下藤伊周　七月十三日右少將、辨如元、（永祚元年）

〔小右記目錄〕五京官除目事　同七月十三日、小除目事、（永祚元年）

法橋有然ヲ東大寺別當ニ補ス、

〔正倉院文書〕一東南院文書櫃第二卷

太政官牒　東大寺

應補任寺家別當事

永祚元年七月十三日

寡然ノ奏狀

法橋上人位寡然

右得寡然今年五月廿三日奏狀�uu謹檢舊記、勝寶感眞聖武天皇叡哲、內融欽明、外照廣濟、如天厚養、似地遠顧、四生遂崇三寶、以天平十三年歲次辛巳二月十四日、勅令邦國每置二寺、所謂金光明四天王護國之寺、法華滅罪之寺、今斯之寺其一也、獨峙城東、故曰東大寺、卽皇帝發願曰、所冀聖法之盛與天地而永流、擁護之恩被幽明而恆滿、天地神祇共相和順、恆將福慶永護國家、開闢以降、先帝尊靈、長幸珠林、同遊寶刹、又願太(元正)上天皇、太皇后藤原氏(宮子)、皇太子(聖武)已下親王及大臣等、同資此福、俱到彼岸、藤原氏先後太政大臣及皇后先妣(藤大夫人)從一位橘氏大夫人(三千代)之靈先識(考)、恆奉先帝而陪遊淨土、長顧後代而常衞聖朝、乃至自古已來至於今日、身爲大臣、竭忠奉國者、及見在子孫、俱因此福、各繼前範、堅守君臣之禮、長紹父祖之名、廣洽群生、通該庶品、同解愛網、共出塵籠、若有後代聖主賢卿、成此願(願カ)、乾坤致福、愚君拙臣、改替此願、神明効訓(訓カ)者、自爾以來、年代二百卌八年、皇帝廿一代、而間佛法漸澆漓、伽藍已破壞、望請天恩、被恤任寺家別當職、將修治破壞堂舍、欲興復陵遲佛法者、左大臣宣、奉勅依請者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

永延三年七月十三日

正四位下行左中辨兼近江權介平(僧仲)「朝臣」

右大史正六位上尾張連(自署下同ジ)「　」牒

奉行　同年十月一日

權別當大法師「　」

少別當威儀師「　」

權上座威儀師「　」

上座威儀師　○東大寺別當譜同ジ、本書、太政官印七顆ヲ踏ス、

都維那法師「　」

〔東大寺別當次第〕　法橋上人位寡然　永延三年七月十日(三脫カ)官符、三論宗、本寺東南院、觀理資、

二十三日、辛丑藤原眞正等ヲ追捕セシム、

〔日本紀略〕一條院　七月廿三日、(辛丑脫カ)令尋捕藤原眞正、爲信等殺三國雅憲之故也、

二十九日、丁未相撲召合、尋デ、追相撲アリ、

三國雅憲ヲ殺害ス

〔日本紀略〕一條院　七月廿九日、丁未、相撲召合、天皇出御南殿、

南殿ニ出御

八月二日、庚戌、相撲拔出、

拔出

〔樗囊抄〕年中行事相撲　二十九日召合　天元五、永祚元、長和二、

永祚元年七月二十三日　二十九日

追相撲融日　永祚元八二、去廿九日合、

是月、彗星出現、

〔日本紀略〕一院條　七月中旬、連夜、彗星見東西天、

〔諸道勘文〕四十五　勘申彗星年々事

永延三年七月十三日、彗星見東方、經數夜、長五尺許、長サ五尺許〇下略、一代要記同ジ、

〇百練抄、歷代編年集成異事ナシ、彗星出現ノコト、六月一日ノ條ニ見ユ、

左大臣雅信ニ牛車ヲ聽ス、

〔公卿補任〕六　左大臣從一位源雅信、七十、七月日聽牛車、

八月大己酉朔盡

二日、庚戌、治部卿從三位藤原尹忠薨ズ、

〔公卿補任〕六　非參議從三位藤尹忠　八月日卒、

〔日本紀略〕一院條　八月二日、庚戌、今日從三位治部卿藤原朝臣尹忠薨、〇一代要記同ジ、

〔公卿補任〕六　非參議從三位藤尹忠　故大納言道明卿五男、母散位藤常賴女、寛和二年七月廿三敍、治國、治部卿如元、

〔尊卑分脈〕藤氏南家貞嗣卿孫　道明

官歷

世系

猪熊三位ト號ス

尹忠 從三、刑部卿、母散位常(藤カ)作女、永祚元八二薨、八十四、號猪隈三位、

- 貞節 木工允、母、
- 貞廉 從五下、豐後守、大藏大輔、母越後守清原樹蔭女、
- 貞潔 藏人所衆、母、
- 女子 中納言重尹(藤原カ)女、母、

八日、丙辰、永祚ト改元ス、

永祚元年八月二日　八日

彗星ト地震トニ依ルト老人僧尼ニ穀ヲ給フ

〔日本紀略〕一條院　八月八日、丙辰、改元爲永祚元年、老人僧尼給穀、依攘彗星

○彗星出現ノコト、六月一日、七月是月ノ條ニ見ユ、　天變地震之災異也、大内記三善佐忠作詔、

〔扶桑略記〕二十七一條天皇上　永延三年己丑八月八日、改爲永祚元年、依彗星天變也、

〔改元部類〕外記記　永延三年八月八日、丙辰、天晴、中納言藤原顯光卿、重光（源脫カ）卿、同保光卿、權中納言藤原道長卿、左衞門陣座移著、於廳政有官申文、午後右（後光）大臣、權中納言源伊陟卿、參著左仗座、今日被定行改元之事、于時大臣召大内記三善朝臣佐忠被仰云、改永延三年、爲永祚元年、隨卽其詔書可早作之、于時蒙仰還本所、成草案覽大臣、附藏人頭右大辨藤原在國朝臣、令奏聞之後、給佐忠朝臣令淸書、而大臣召中務少輔藤原朝臣統理、著膝衝座、給詔書退出、

大江維時ガ年號ヲ撰ブトノ說

〔元祕別錄〕一條勘文事改元事　永延三年八月八日改元、爲永祚、依彗星地震、

或抄云、件永祚元年、中納言維時（大江）撰申云々、

○百練抄、一代要記異事ナシ、

九日、丁巳、釋奠、

〔日本紀略〕一條院　八月九日、丁巳、釋奠、上卿不參、參議一人行之、

十一日、己未、權大僧都圓賀寂ス、

〔日本紀略〕一條院　八月十一日、己未、今日權大僧都圓賀卒、

官歷

〔僧綱補任〕乾德川昭武氏本　○權律師圓賀　天台宗、延曆寺、貞元二年十月五日任、或本、明年十月五日任、年七十二、臘五十二、京人、源氏、故座主贈僧正法印大和尙位尊意弟子、依贈僧正付屬領知法房性延長四年六月十五得度受戒、□年□月□日依良源座主奏、爲延曆寺阿闍梨、天曆十年十月十三日補定心院十禪師、喜慶替、安和元年七月五日補內供奉十禪師、遍數讓、或本、今年（天元元）十月五日任律師、天元四年律師、寬和二年八月廿日任權大僧都、不歷少僧都、臘次（元杲）上、護持、勞、或本、明年三月十日任、八十一、或云、今年（永延元）三月十日任大僧都、不歷少僧都、永祚元年八月十一日卒、八十四、

法系

〔諸嗣宗脈紀〕下天台宗　尊惠（令惠）——圓賀

傳記

〔眞言傳〕五　小僧都陽生○中略（顯忠）廉義亭ニテ、圓賀僧都ト參リ相タリケルニ、關白仰ラレテ云、僧中ニハ驗クラヘト云事アリ、サルコトヲ見テ、彌ヨ佛法ノ威驗ヲ信セハヤト、其時二人且ヶ念誦スル氣色ニテ、圍碁盤ノ有ケルヲ

陽生ト驗競ヲ爲ス